秋田県文化財調査報告書第418集

家　ノ　前　遺　跡

── 国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ──

２００７・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろさか）遺跡

出土の「岩偶」です。

縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩

家（いえ）ノ（の）前（まえ）遺跡

── 国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ──

２００７・３

秋田県教育委員会

家ノ前遺跡　遠景（西→）

フラスコ状土坑実測状況

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹を成すものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、国道105号改築工事に先立って、平成17年度に由利本荘市大内で実施した家ノ前遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

調査の結果、縄文時代前期のフラスコ状土坑群、縄文時代中期の竪穴住居跡などが見つかり、今回発掘調査した場所は、縄文時代前期と中期の集落と考えられる家ノ前遺跡の北端のあたることがわかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力いただきました秋田県由利地域振興局、由利本荘市教育委員会など関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

秋田県教育委員会
教育長　根　岸　均

例　　言

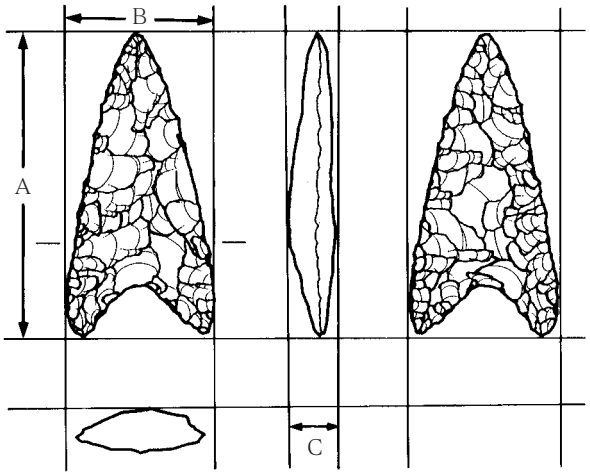
１．本書は、国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）建設に係る家ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
２．本書は、平成17年度に発掘調査された秋田県由利本荘市大内米坂に所在する、家ノ前遺跡の調査成果を収めたものである。
３．発掘調査成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報24(平成17年度）』および発掘調査報告会資料などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
４．本書第５章の自然科学的分析は、下記に委託した分析報告である。
放射性炭素年代測定・・・・・・・・・（株）加速器分析研究所
５．本書の草稿執筆は第２章１節を簗瀬圭二、第４章を吉川寿朗・打矢泰之の協力を得た。それ以外の執筆・編集は開田猛夫が行った。遺構図作成に吉川寿朗・打矢泰之の協力を得た。

凡　　例

１．本書に使用した図は、秋田県由利地域振興局建設部提供の『工事路線計画図』、国土地理院発行の50,000分の１地形図『岩谷』である。
２．遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版土色帖1996年版』を使用した。
３．本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第Ｘ系による座標北を示す。座標北と磁北との偏角は西偏８°29′である。
４．遺構については検出順にその種類を示す略番号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下のとおりである。
ＳＩ(竪穴住居跡)　ＳＫ(土坑)　ＳＫＦ（フラスコ状土坑）　ＳＫＴ(陥し穴)　ＳＫＰ(柱穴様ピット)　ＳＮ(焼土遺構)　ＳＸ(性格不明遺構)
５．遺構図および本文中のＰは竪穴住居跡・柱穴列などに伴う柱穴等を示し、当該の遺構内でＰ1、Ｐ2、Ｐ3のように番号を付し、各柱穴等を表示している。この他、遺構図中のＲＰは土器、Ｓは礫を示している。
６．基本的に遺構実測図は1/20の縮尺、遺物実測図は1/2の縮尺で掲載した。しかし、挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図もある。各図に付したスケールを参照されたい。
７．挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については、個々の頁に明示した。

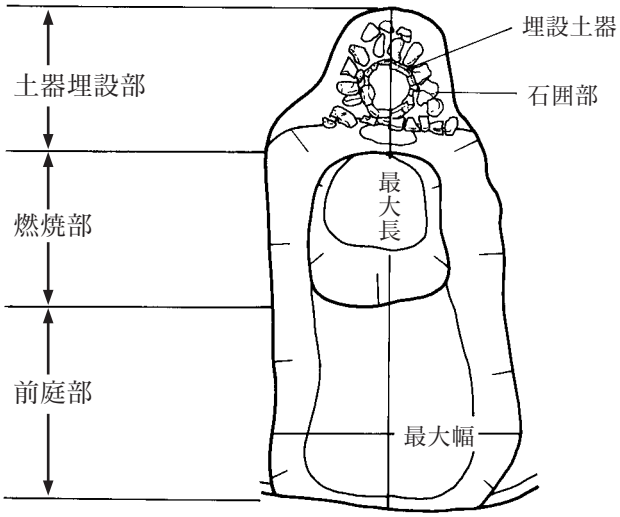
遺構　焼土　　柱痕跡
遺物　磨面　　アスファルト

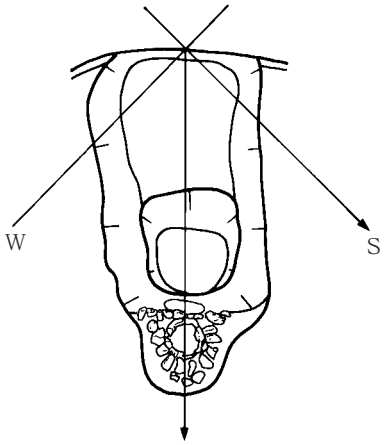
８．石器の計測部位は下図のとおりである。計測値の単位は長さ・幅・厚さがcm、重さがｇである。



Ａ　最大長（cm）
Ｂ　最大幅（cm）
Ｃ　最大厚（cm）

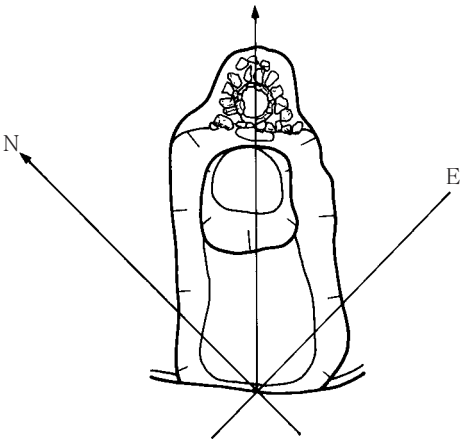
９．複式炉の各部名称は、左下図のように記述した。また、複式炉の軸線方向については、炉の最大長を示す軸線と、南北の方位が交わる角度を右下図のように計測し、その値をＮ－Ｘ°－Ｅや Ｓ－Ｙ°－Ｗのように表した。





S-Y°-Wの場合

N-X°-Eの場合



目　次

序
例言・凡例
目次
挿図・表・図版目次

第１章　はじめに ……1
　第１節　調査に至る経過 ……1
　第２節　調査要項 ……1

第２章　遺跡の環境 ……3
　第１節　遺跡の位置と立地 ……3
　第２節　歴史的環境 ……5

第３章　発掘調査の概要 ……10
　第１節　遺跡の概観 ……10
　第２節　調査の方法 ……10
　第３節　調査の経過 ……12

第４章　調査の記録 ……16
　第１節　基本層序 ……17
　第２節　縄文時代前期の遺構と遺物 ……18
　第３節　縄文時代中期の遺構と遺物 ……43
　第４節　遺構外出土遺物 ……60

第５章　自然科学的分析 ……84

第６章　まとめ ……88

図版

報告書抄録

挿図・表・図版目次

挿図目次

第１図　路線と遺跡位置図…… 2
第２図　遺跡位置図…… 3
第３図　地形区分図…… 4
第４図　家ノ前遺跡と周辺遺跡位置図…… 7
第５図　家ノ前遺跡グリッド配置図…… 11
第６図　遺構配置図…… 14
第７図　遺構配置図　縄文時代前期…… 15
第８図　遺構配置図　縄文時代中期…… 15
第９図　基本土層図…… 19
第10図　ＳＫＦ27・32・35平面図・断面図　ＳＫＦ35出土遺物（1） 19
第11図　ＳＫＦ35出土遺物（2）…… 20
第12図　ＳＫＦ34・36平面図・断面図　ＳＫＦ36出土遺物…… 22
第13図　ＳＫＦ39・77・82　ＳＸ81平面図・断面図 …… 23
第14図　ＳＫＦ39出土遺物　ＳＫＦ40　ＳＫ42平面図断面図… 24
第15図　ＳＫＦ44・55平面図・断面図　ＳＫＦ44出土遺物…… 26
第16図　ＳＫＦ60・61　ＳＸ80平面図・断面図　ＳＫＦ60出土遺物　28
第17図　ＳＫＦ62・67・68・69平面図・断面図…… 30
第18図　ＳＫＦ67・69出土遺物 …… 31
第19図　ＳＮ15・43・46・47・49平面図・断面図　ＳＮ15出土遺物　33
第20図　ＳＮ56・57・59・64・66・74平面図・断面図…… 34
第21図　ＳＫ30・37・38・45平面図・断面図 …… 37
第22図　ＳＫ48・53・54・76平面図・断面図 …… 39
第23図　ＳＫＰ58・65・70・71・75平面図・断面図
ＳＫＰ58出土遺物…… 41
第24図　ＳＫＰ58・65・70・71・75平面図・エレベーション図… 42
第25図　ＳＩ03平面図・断面図　ＳＩ03炉跡平面図・断面図 … 44
第26図　ＳＩ04平面図・断面図・出土遺物…… 45
第27図　ＳＩ04炉跡平面図・断面図・出土遺物…… 46
第28図　ＳＩ05・ＳＩ07平面図・断面図・出土遺物
ＳＩ07炉跡平面図・断面図…… 48
第29図　ＳＩ23平面図・断面図・焼土ブロック範囲図…… 50
第30図　ＳＩ23炉跡平面図・断面図…… 51
第31図　ＳＩ23出土遺物（1）…… 52
第32図　ＳＩ23出土遺物（2）…… 53
第33図　ＳＫ02・10・11平面図・断面図　ＳＫ10出土遺物…… 55
第34図　ＳＫ13・14・16・24・25・28　ＳＫＴ06平面図・断面図… 57
第35図　ＳＮ09　ＳＫＰ18・19・22・26・29・33・51平面図・断面図　59
第36図　遺構外出土土器（1）…… 64
第37図　遺構外出土土器（2）…… 64
第38図　遺構外出土土器（3）…… 66
第39図　遺構外出土土器（4）…… 67
第40図　遺構外出土石器（1）石鏃…… 68
第41図　遺構外出土石器（2）石鏃…… 69
第42図　遺構外出土石器（3）石鏃…… 70
第43図　遺構外出土石器（4）石鏃…… 71
第44図　遺構外出土石器（5）石槍…… 72
第45図　遺構外出土石器（6）石匙…… 73
第46図　遺構外出土石器（7）石匙…… 74
第47図　遺構外出土石器（8）石匙…… 75
第48図　遺構外出土石器（9）石錐…… 76
第49図　遺構外出土石器（10）石篦…… 77
第50図　遺構外出土石器（11）掻器…… 78
第51図　遺構外出土石器（12）削器・打製石斧…… 79
第52図　遺構外出土石器（13）磨石…… 80
第53図　遺構外出土石器（14）敲石・凹石・石錘…… 81

表目次

第１表　周辺遺跡一覧（1）…… 8
第２表　周辺遺跡一覧（2）…… 9
第３表　柱穴様ピット計測一覧…… 42
第４表　竪穴住居跡柱穴観察表…… 53
第５表　遺構外出土土器観察表…… 67
第６表　遺構外出土石器観察表（1）…… 82
第７表　遺構外出土石器観察表（2）…… 83
第８表　暦年代較正の結果…… 86
第９表　放射性炭素年代測定の結果…… 87

巻頭図版目次

巻頭図版１　家ノ前遺跡遠景（西→）
巻頭図版２　フラスコ状土坑実測状況

図版目次

図版１
１　遠景（西→）　２　全景（北→）
図版２
１　ＳＫＦ27断面（南→）　２　ＳＫＦ27炭化物出土状況（南→）
３　ＳＫＦ27完掘（南→）
図版３
１　ＳＫＦ34・36断面（東→）　２　ＳＫＦ34・36完掘（南東→）
図版４
１　ＳＫＦ39完掘（南→）　２　ＳＫＦ39・77断面（東→）
３　ＳＫＦ62・68・69完掘作業
図版５
１　ＳＫＦ44断面（南→）　２　ＳＫＦ44完掘（西→）
３　ＳＫＦ61完掘（北東→）
図版６
１　フラスコ状土坑完掘作業　２　フラスコ状土坑群（西→）
図版７
１　ＳＫ30検出状況（北→）　２　ＳＫ30完掘（南→）
図版８
１　ＳＫ37完掘（北東→）　２　ＳＫ38完掘（南西→）
３　ＳＫ42完掘（西→）
図版９
１　ＳＮ47断面（南→）　２　ＳＮ47完掘（南→）
図版10
１　ＳＫＰ58断面（北→）　２　ＳＫＰ65断面（北→）
図版11
１　ＳＫＰ71・65・58・70柱穴列（北→）
２　フラスコ状土坑群（南東→）
図版12
１　ＳＩ03完掘（北→）　２　ＳＩ03検出状況（北→）
３　ＳＩ03炉完掘（北→）　４　ＳＩ03炉跡土器埋設部側面（西→）
５　ＳＩ03炉跡土器埋設部断面（西→）
図版13
１　ＳＩ04完掘（南→）　２　ＳＩ04検出状況（南→）
３　ＳＩ04複式炉（南西→）　４　ＳＩ04複式炉土器埋設部側面（東→）
５　ＳＩ04複式炉土器埋設部断面（東→）
図版14
１　ＳＩ05検出状況（南→）　２　ＳＩ05土器埋設部側面（南東→）
図版15
１　ＳＩ07完掘（北→）　２　ＳＩ07炉　炉跡完掘（北東→）
図版16
１　ＳＩ23焼土ブロック検出状況（東→）
２　ＳＩ23複式炉完掘（東→）
３　ＳＩ23複式炉土器埋設部（東→）
４　ＳＩ23土器埋設部小型深鉢形土器側面（東→）
５　ＳＩ23土器埋設部埋設土器側面（東→）
図版17
１　ＳＫ02完掘（南→）　２　ＳＫ16完掘（北西→）
３　ＳＫ25完掘（南→）
図版18
１　ＳＫＴ06完掘（南→）　２　作業風景
図版19
１　ＳＩ23炉埋設土器　２　ＳＩ23出土遺物（RP１）
図版20
１　ＳＩ23出土遺物（RP２）　２　ＳＩ04炉埋設土器
図版21
１　ＳＩ05出土遺物　２　遺構内出土土器　前期①
図版22
１　遺構内出土土器　前期②　２　遺構内出土土器　前期③
図版23
１　遺構内出土土器　中期　２　遺構内出土石器　前期①
図版24
１　遺構内出土石器　前期②　２　遺構内出土石器　前期③
図版25
１　遺構内出土石器　中期　２　遺構外出土土器①
図版26
１　遺構外出土土器②　２　遺構外出土土器③
図版27
１　遺構外出土土器④　２　遺構外出土土器⑤
図版28
１　遺構外出土土器⑥　２　遺構外出土土器⑦
図版29
１　遺構外出土土器⑧　２　遺構外出土土器⑨
図版30
１　遺構外出土土器⑩　２　遺構外出土石器　石鏃①
図版31
１　遺構外出土石器　石鏃②　２　遺構外出土石器　石鏃③
図版32
１　遺構外出土石器　石槍　２　遺構外出土石器　石匙①
図版33
１　遺構外出土石器　石匙②　２　遺構外出土石器　石匙③
図版34
１　遺構外出土石器　石錐　２　遺構外出土石器　石篦
図版35
１　遺構外出土石器　掻器　２　遺構外出土石器　削器　打製石斧
図版36
１　遺構外出土石器　磨石
２　遺構外出土石器　敲石・凹石・石錘

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

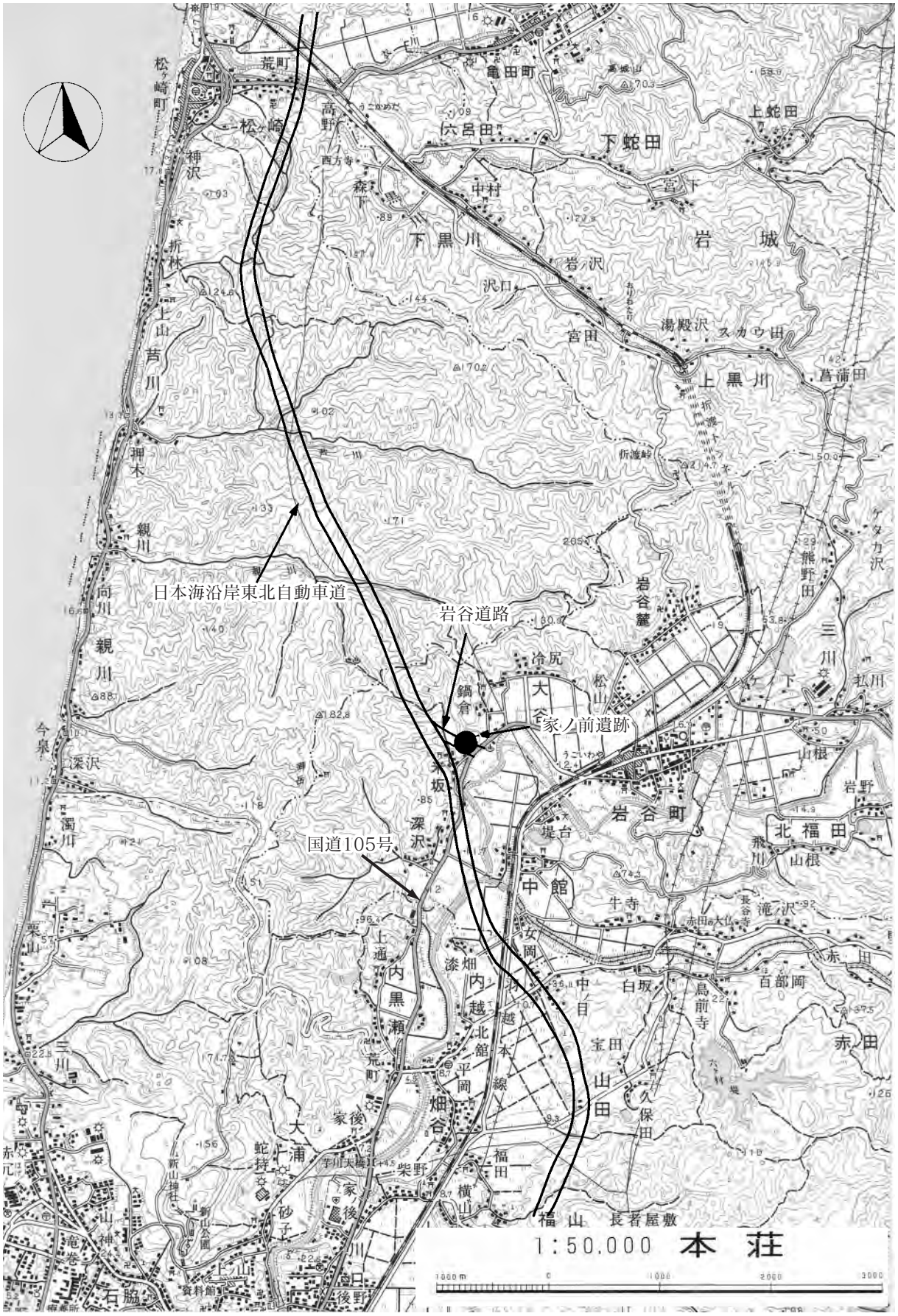
国道105号国道道路（岩谷道路）改築事業は、日本海沿岸東北自動車道大内ＩＣ（仮称）から国道105号につながるアクセス道路の建設である。全長0.8㎞を整備する事業で、平成18年度に完成予定である。

日本海沿岸東北自動車道は新潟県新潟市を起点として、日本海に沿って新潟県・山形県・秋田県を経て東北自動車道に連結し、青森県に至る高規格幹線道路である。この道路の整備により、日本海沿岸地域の交通・連携が促進されるとともに、より多くの人が高度医療を受けられるようになるほか、緊急時における代替・迂回路等のネットワーク機能が強化され、秋田県においては県内外から訪れる観光客の交通手段としても期待されている。

秋田県教育委員会は、平成16年度秋にアクセス道路の遺跡分布調査を行い、同年12月に遺跡確認調査を実施した。2,600㎡を対象として確認調査を行い、1,700㎡が発掘調査の必要な範囲と判断され、事業計画との関連から平成17年度に発掘調査をすることになった。

第２節　調査要項

遺跡名称	家ノ前遺跡（いえのまえいせき）
遺跡略称	６ＩＮＭ
所在地	秋田県由利本荘市米坂字家ノ前87－３外
調査期間	平成17年８月30日～11月７日
調査目的	国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）に係る事前調査
調査面積	1,700㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	開田　猛夫（秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事）
	吉川　寿朗（秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事）
	打矢　泰之（秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員）
総務担当者	柴田　卓也（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任）
	佐々木　和幸（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
	田口　　旭（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
	現　秋田県立角館南高等学校　主事
調査協力機関	秋田県由利地域振興局建設部　由利本荘市教育委員会



第１図　路線と遺跡位置図

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

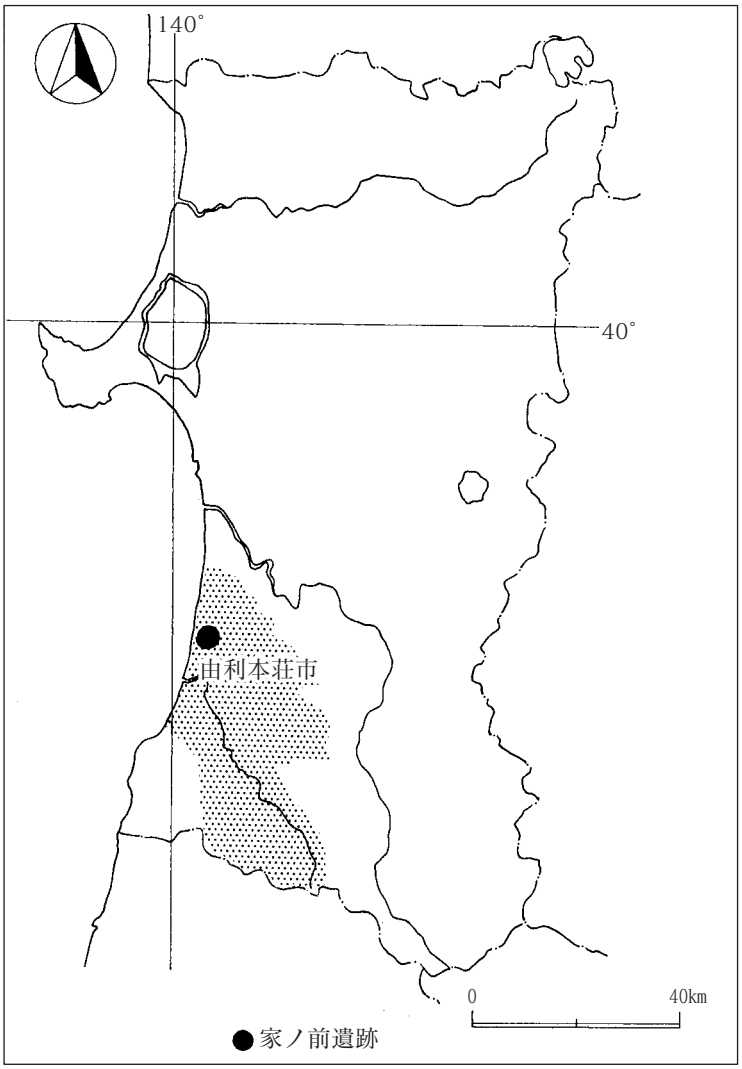
家ノ前遺跡が所在する由利本荘市は秋田県の南西部に位置し、西側は日本海と南側は山形県と接している。由利本荘市は平成17年３月22日に周辺８市町村が合併してできた市で、家ノ前遺跡は旧大内町米坂に所在する。

家ノ前遺跡周辺では、芋川の西から北に広がる北由利丘陵地から芋川低地に、小さな尾根が舌状に多く延びている。遺跡は、北から南に突き出た尾根状の狭小な平坦面にある。尾根の三方は急斜面となっており、平坦面は長さ（南北）約100ｍ、幅（東西）20～70ｍで、北側が狭くなっている。この平坦面全域が遺跡範囲と考えられ、調査区はそのうちの北部にあたる。調査区は、北緯39°26′28″、東経は140°４′39″、ＪＲ羽後岩谷駅から西約１㎞に位置する。調査区の標高は33m～37ｍである。

家ノ前遺跡のある北由利丘陵地は標高100～200m未満の背面の定高性をもつ大起伏丘陵地で、その主分嶺の方向は芋川下流の流走方向に協調している。地質的には新第三世紀泥岩堆積層で、羽越油田褶曲を成した山地性丘陵地である。

以上の地形的条件から想定される縄文時代の家ノ前遺跡の様相は次の通りである。①遺跡の南側は斜面の傾斜がかなり緩く、斜面下との昇降が比較的容易であったと思われる。②当時の芋川がどの流路であったかはわからないが、近くを流れていたことは間違いないため、取水に便利な場所であった。③北側は北由利丘陵地が広がり木の実や狩猟をするに適した場所であった。④海までの距離も10㎞ほどで日帰りできた距離であり、海産物を手に入れることもできた。

本遺跡は以上のことから集落を形成するに十分な立地条件を備えており、長い間居住空間として使われたものと推定される。



第２図　遺跡位置図

Ⅰ　山地　　Ⅱ　丘陵地　　Ⅲ　台地・低地

Ⅰa　権現山山地
Ⅰb　鬼倉山山地

Ⅱa　岩城丘陵地
Ⅱb　北由利丘陵地
Ⅱc　中央丘陵地
Ⅱd　子吉丘陵地
Ⅱe　葛法丘陵地
Ⅱf　石橋丘陵地
Ⅱg　中ノ俣丘陵地
Ⅱh　扇森丘陵地
Ⅱi　上川大内丘陵地
Ⅱj　岩野目沢丘陵地
Ⅱk　小羽広丘陵地
Ⅱl　桧山丘陵地

Ⅲa　子吉川低地
Ⅲb　石沢川低地
Ⅲc　芋川低地
Ⅲd　衣川低地
Ⅲe　西目低地
Ⅲf　由利砂丘地
Ⅲg　本荘砂丘地
Ⅲh　西目砂丘地
Ⅲi　海浜低地

第３図　地形区分図

第２節　歴史的環境

家ノ前遺跡は縄文時代（前期・中期）の遺跡である。家ノ前遺跡の周辺には縄文時代から近世までの遺跡が多数確認されている。ここでは家ノ前遺跡の周辺に位置する子吉川の支流芋川流域の縄文時代の遺跡を中心に歴史的な環境を概観する。

1　縄文時代の遺跡

由利本荘市にある本遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、早期の菖蒲崎貝塚（５－16）・小吉川底遺跡（５－17）・神沢遺跡（５－1）、前期の親川冷水遺跡（５－４）・深沢遺跡（５－６）・菖蒲崎遺跡・小吉川底遺跡・土谷白山遺跡（５－74）・才ノ神遺跡（44－30・42）、中期の田尻遺跡（５－19）・薬師堂遺跡（５－24）・才ノ神遺跡、後期の親川フタノ沢遺跡（５－５）・大浦遺跡（５－13）・熊野神社遺跡（５－51）・上谷地遺跡（５－68）・芋種坂Ⅲ遺跡（５－Ｕ）、晩期の大浦遺跡・長老沼遺跡（５－21）・東町遺跡（５－22）・小友金山遺跡（５－52）等が確認されている。菖蒲崎貝塚は本遺跡の南南西５㎞の子吉川と芋川の合流点芋川河口左岸にあり、日本海沿岸における希少な縄文時代早期の大規模な貝塚である。平成12・13年度の調査で貝層および貝層西側の礫面状で縄文時代早期末葉の尖底深鉢形土器・石器が出土している。才ノ神遺跡は本遺跡の東５㎞の芋川流域にある。昭和54年に調査が行われ、縄文時代前期１軒・中期11軒の竪穴住居跡が検出され、土器・石器を始め三角形土製品・剣状土製品・石皿・石棒など多量の遺物が出土している。縄文時代の日本海沿岸のこの地域はいわゆる大木式土器と円筒式土器とが接触する地域にあたり、円筒式土器の出土する遺跡も多い。日本海岸から直線距離にして約９㎞のところにある才ノ神遺跡からは円筒式土器が全く発見されず、大木式土器だけ出土したことに一つの特徴がある。上谷地遺跡は本遺跡の南南東６㎞、子吉川の右岸、芋川の下流域にある。平成12・13年度の調査で県内では初めての縄文時代後期の水さらし場遺構が出土している。

2　弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡としては、海岸部の親川遺跡（５－３）が知られているが、詳細は不明である。

3　古代の遺跡

古代の遺跡としては、大浦遺跡・菖蒲崎貝塚・土谷遺跡（５－18）・新漆畑遺跡（５－61）・中ノ目遺跡（５－62）・新ウルイノ遺跡（５－65）・横山遺跡（５－66）・大覚遺跡（５－67）・上谷地遺跡・新谷地遺跡（５－69）・岩瀬堤遺跡（５－70）・大坪遺跡（５－Ｏ）・芋種坂Ⅲ遺跡・堤沢山遺跡（５－Ｔ）・樋ノ口遺跡（５－Ｈ）等が確認されている。これらの遺跡は子吉川の右岸にあり、芋川の沖積地とその周辺の丘陵地に分布している。新漆畑遺跡では平成10年度の調査で土師器杯とフイゴの羽口や大量の鉄滓など、大覚遺跡では平成12年の調査で河川跡から多量の土師器杯、横山遺跡では平成12年度の調査で県内で初めて平安時代（10世紀）の水田跡、芋種坂Ⅲ遺跡では平成15年度の調査でフイゴ座を持つ製鉄炉跡、樋ノ口遺跡では平成15・16年度の調査で炉壁やフイゴの羽口、椀形鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓、炭窯などの鍛冶生産に係わる遺物・遺構が検出している。

4　中世の遺跡

中世の遺跡としては、大浦遺跡・大坪遺跡・堤沢山遺跡・深沢遺跡・黒瀬館（５－７）・平岡館（５－８）・巣子館（５－９）・後田館（５－10）・川口館（５－14）・岩倉館（５－15）・埋田小館（５－

25)・館前館（５－32）・株切館（５－50）・樋ノ口遺跡・元館（44－35）・古館（44－37）・岩谷古館（44－38）・岩谷麓古館（44－39）・中館（44－40）等が確認されている。大浦遺跡では平成12年度の調査で4間×４間の総柱掘立柱建物跡や井戸跡、道路跡等の遺構からなる集落跡、大坪遺跡では平成14年度の調査で鍛冶生産が行われた集落跡、堤沢山遺跡では平成15・16年度の調査で梵鐘や磬などの仏具が生産された鋳造施設が検出されている。また、岩倉館跡では平成15・16年度の調査で郭を10か所、4条の堀切や３条の空堀などを検出し、15世紀中頃を中心とする中世陶磁器などが出土している。

5　近世の遺跡

近世の遺跡としては、本荘城（５－64）がある。最上氏家臣の楯岡氏が慶長15（1610）年に尾崎山に本城城を築いた。元和８（1622）年の最上氏の改易に伴い、本城城は破却された。最上氏に代わって本多氏の領地となったが翌元和９（1623）年に改易となり、その以後、六郷氏２万石の領地となった。六郷氏は尾崎山に改めて城を築き、本荘城とした。平成15・16年度の調査で近世の城郭遺構のほか中世の掘立柱建物跡、竪穴状遺構、井戸跡、空堀などの遺構や遺物が出土し、本荘城築城の前に中世城館があったことが明らかになった。

註

・才ノ神遺跡（44－30）・才ノ神Ⅱ遺跡（44－42）は同時に発掘調査を実施し、「才ノ神遺跡」として秋田県文化財調査報告書　第71集で報告されている。本文では報告書に基づいて「才ノ神遺跡」と表記した。

・地図、一覧、本文に記載した番号は、『秋田県遺跡地図（由利地区版）』2001に掲載されている地図番号である。これ以降新発見の遺跡は、市町村番号と遺跡の頭文字を付した。

《参考文献》

秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　本荘』　1980(昭和55年)年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（由利地区版）』　2001(平成13)年

秋田県教育委員会　『才ノ神遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第71集　1980(昭和55)年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

秋田県教育委員会　『大浦遺跡－芋川災害復旧等関連緊急事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第336集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書 』秋田県文化財調査報告書第342集　2002(平成14)年

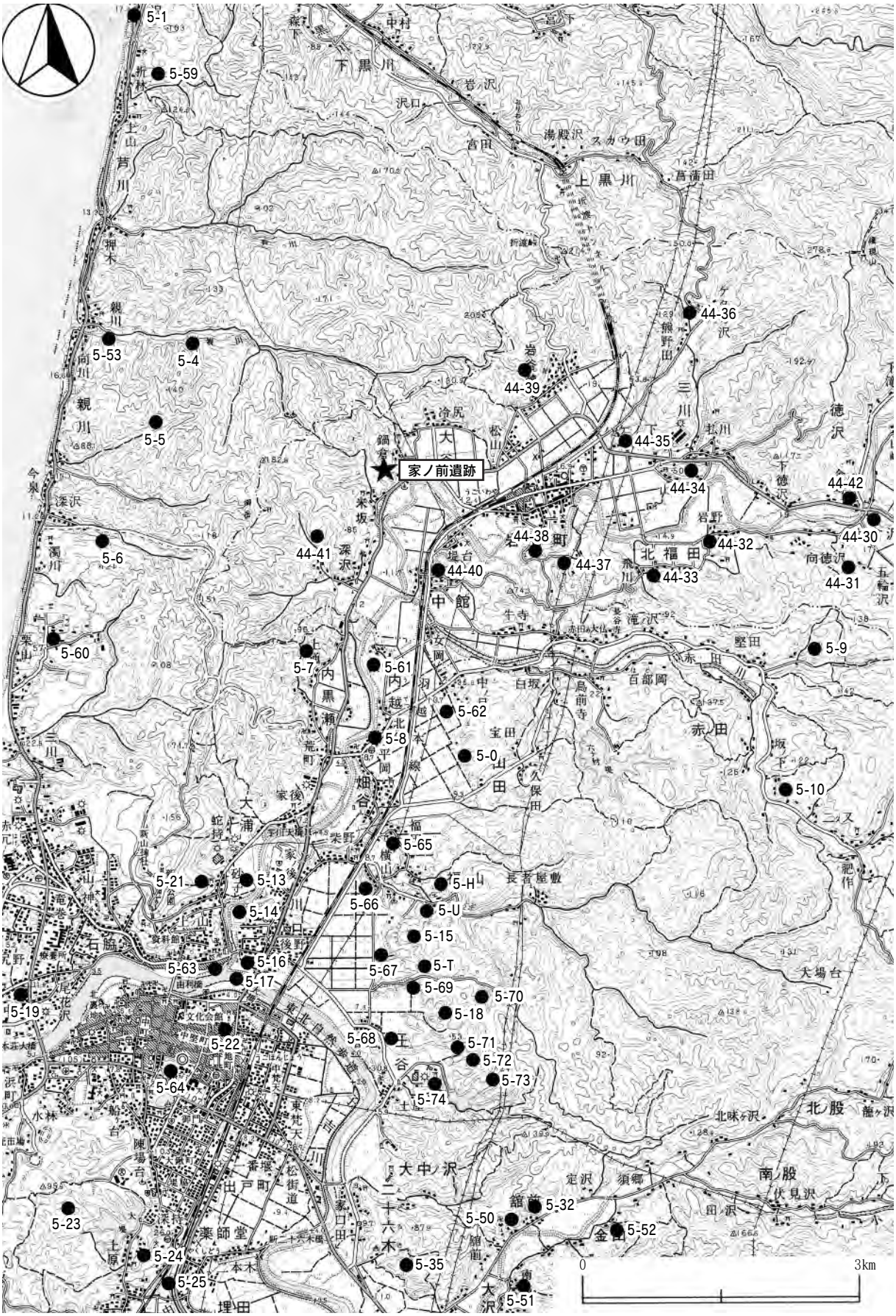
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書 』秋田県文化財調査報告書第365集　2003(平成15)年

秋田県教育委員会　『菖蒲崎貝塚－芋川災害復旧等関連緊急事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　－』秋田県文化財調査報告書第371集　2004(平成16)年

秋田県教育委員会　『上谷地遺跡　新谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財　発掘調査報告書ＸＸⅡ－』秋田県文化財調査報告書第395集　2005(平成17)年

本荘市　『本荘市史資料編・Ⅰ上』　1984(昭和59)年

大内町　『大内町史』　1990(平成２)年



第４図　家ノ前遺跡と周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧（１）

『秋田県遺跡地図（由利本荘版）』収載の周知の遺跡　　＊所在地はすべて由利本荘市内

遺跡名	地図番号	所在地	種別	現状	主な遺構・遺物
神沢	５－１	神沢	遺物包含地	海岸	縄文土器（早期）・尖底土器・石錘・石鏃
親川	５－３	親川字ﾂﾂﾁ山	遺物包含地	宅地	弥生土器片
親川冷水	５－４	親川字槻木林	遺物包含地	畑地	縄文土器片（前期）
親川フタノ沢	５－５	親川字金ヶ沢	遺物包含地	畑地	縄文土器片（後期）
深沢	５－６	深沢字深沢	遺物包含地	畑地	縄文土器片・中世銭貨
黒瀬館	５－７	内黒瀬字坂ノ下	館跡	草地	腰郭
平岡館	５－８	内越字平岡	館跡	神社他	空堀・土塁
巣子館	５－９	赤田字巣子	館跡	山林	陶器片・木製品
後田館	５－10	赤田字古館	館跡	山林	
大浦	５－13	大浦字八走	集落跡	畑地・水田	縄文土器（後期・晩期）・須恵器・土師器・石器・木器
川口館	５－14	川口字愛宕山	館跡	学校地	空堀・須恵器片
岩倉館	５－15	川口字岩倉	館跡	山林・採石地	陶器片
菖蒲崎貝塚	５－16	川口字下菖蒲崎	貝塚	河川敷	縄文土器（早期・前期）・貝（シジミ貝）・魚骨
子吉川底	５－17	川口字下菖蒲崎付近川底	遺物包含地	川底	縄文土器片
土谷	５－18	土谷字田ノ沢	遺物包含地	山林・畑地	製鉄炉跡・珠洲系土器・唐津焼・羽口・鉄滓
田尻	５－19	石脇字田尻	遺物包含地	畑地	縄文土器片（中期末：大木９・10式）
長老沼	５－21	石脇字上長老沼	遺物包含地	宅地・畑地	縄文土器片（晩期）・石匙・石斧・石鏃
東町	５－22	東町	遺物包含地	宅地	縄文土器片（晩期）
子吉館	５－23	出戸町字水林	館跡	山林	空堀・土塁・馬場跡
薬師堂	５－24	薬師堂字堂ノ下	遺物包含地	原野・畑地宅地	縄文土器片
埋田小館	５－25	埋田字小館	館跡	畑地・草地雑木林	
館前館	５－32	館前字館前	館跡	山林	腰郭、須恵器四耳壺
三条山	５－35	三条字定ヶ沢	遺物包含地	山林	縄文土器片
株切館	５－50	館前字株切館	館跡	山林	
熊野神社	５－51	大沢字南関	遺物包含地	草地・神社	縄文土器片（後期）
小友金山	５－52	金山	遺物包含地	山林	縄文土器片（晩期）・石斧・石鏃
大森山	５－59	芦川字大森山	遺物包含地	山林	鉄滓
西大台	５－60	三川字西大台	遺物包含地	山林	鉄滓
新漆畑	５－61	内越字新漆畑	遺物包含地	水田	土師器片
中ノ目	５－62	内越字中ノ目	遺物包含地	水田	須恵器片
石脇中町	５－63	石脇字石脇	遺物包含地	宅地・畑地	縄文土器片

第２表　周辺遺跡一覧（２）

遺跡名	地図番号	所在地	種別	現状	主な遺構・遺物
本荘城	５－64	出戸町字尾崎	城跡	公園	縄文土器片・石器・中世陶器片・磁器片
新ウルイノ	５－65	畑谷字新ｳﾙｲﾉ	遺物包含地	水田	土師器片
横山	５－66	福山字横山	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
大覚	５－67	川口字大覚	遺物包含地	水田	土師器片
上谷地	５－68	土谷字上谷地	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片・木製品
新谷地	５－69	土谷字新谷地	遺物包含地	水田	土師器片
岩瀬堤	５－70	土谷字管沼	遺物包含地	水田	須恵器片
土谷字田ノ沢	５－71	土谷字田ノ沢	遺物包含地	山林	鉄滓
土谷堤下	５－72	土谷字堤下	遺物包含地	山林	
土谷堂ヶ沢	５－73	土谷字堂ヶ沢	遺物包含地	山林	
土谷白山	５－74	土谷字小深田	遺物包含地	山林	縄文土器（前期）
大坪	５－Ｏ	細谷字大坪	集落跡・鍛冶生産	水田	溝跡・鍛冶炉・土師器・須恵器・須恵器系陶器・常滑焼・渥美焼・青磁・白磁・宋銭・硯・鉄滓・炉壁・羽口
樋ノ口	５－Ｈ	福山字樋ノ口	集落跡・館跡	山林	檜跡・空堀・土師器・須恵器・木製品（刀形等）
堤沢山	５－Ｔ	川口字大学堤沢山	鋳造遺跡	山林	鉄滓・炉壁・鋳型（仏具）・青磁・銭貨・木製品
芋種坂Ⅲ	５－Ｕ	福山字芋種坂	製鉄	山林	縄文土器（後期）・鉄滓・炉壁・羽口
才ノ神	44－30	徳沢字才ノ神	遺物包含地	畑地・公園	竪穴住居跡・土坑・縄文土器（前期・中期）・土製品・石鏃・石匙・石錘・石斧・石棒・石皿など
徳沢館	44－31	徳沢字飛種	館跡	山林	
岩洞河原	44－32	北福田字岩洞河原	遺物包含地	宅地	須恵器片・石斧・石鏃・旧石器
飛川	44－33	北福田字沢入	遺物包含地	山林	縄文土器片・石匙
天堂山	44－34	三川字白山田	遺物包含地	山林	縄文土器片・石斧・石匙
元館	44－35	岩谷町字ﾊｹﾉ下	館跡	山林	空堀
熊野田	44－36	三川字熊野田	遺物包含地	水田・畑地	石槍
古館	44－37	岩谷町字古館	遺物包含地	畑地・宅地	石斧・石鏃・石匙
岩谷古館	44－38	岩谷町字古館	館跡	山林	空堀・腰郭
岩谷麓古館	44－39	岩谷麓字古館	館跡	山林	
中館	44－40	中館字堤台	館跡	山林	
蜂長根	44－41	深沢字横沢	遺物包含地	山林	石槍・石鏃・石匙
才ノ神Ⅱ	44－42	徳沢字細田	遺物包含地	畑地・宅地	石器片
家ノ前		米坂字家ノ前	集落跡	山林	竪穴住居跡・フラスコ状土坑・縄文土器（前期・中期）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

家ノ前遺跡は、子吉川支流の芋川の右岸に位置し、周辺地域は広大な水田地帯となっている。遺跡は芋川の西から北に広がる北由利丘陵地から芋川低地に、小さな尾根が舌状に延びた尾根状の狭小な平坦面にある。尾根の三方は急斜面になっており、遺跡の標高は33ｍ～37ｍである。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡・フラスコ状土坑・土坑・陥し穴・焼土遺構・柱穴様ピットを検出した。遺物は縄文時代の土器と石器が18リットル入コンテナでそれぞれ８箱出土した。

竪穴住居跡は尾根の平坦部全域にわたり６軒検出した。直径3.8ｍ～4.8ｍのほぼ円形で、そのうちの３軒には複式炉があった。複式炉は縄文時代の中期の終わり頃に盛んに作られた炉であるが、本遺跡から見つかった複式炉は燃焼部の外側にもう一つ石囲いがあり、その中に土器を埋設している。

また、竪穴住居跡の下を少し掘り下げた面から縄文時代前期のフラスコ状土坑が15基検出された。フラスコ状土坑は比較的平らな中央部と緩やかな斜面部に集中している。断面形もフラスコ状のものだけでなく、ビーカー形のものもあった。大きさは小さいもので開口部の直径0.9m、深さ１ｍで、大きいものだと開口部の直径が２ｍ、深さ1.8ｍであった。

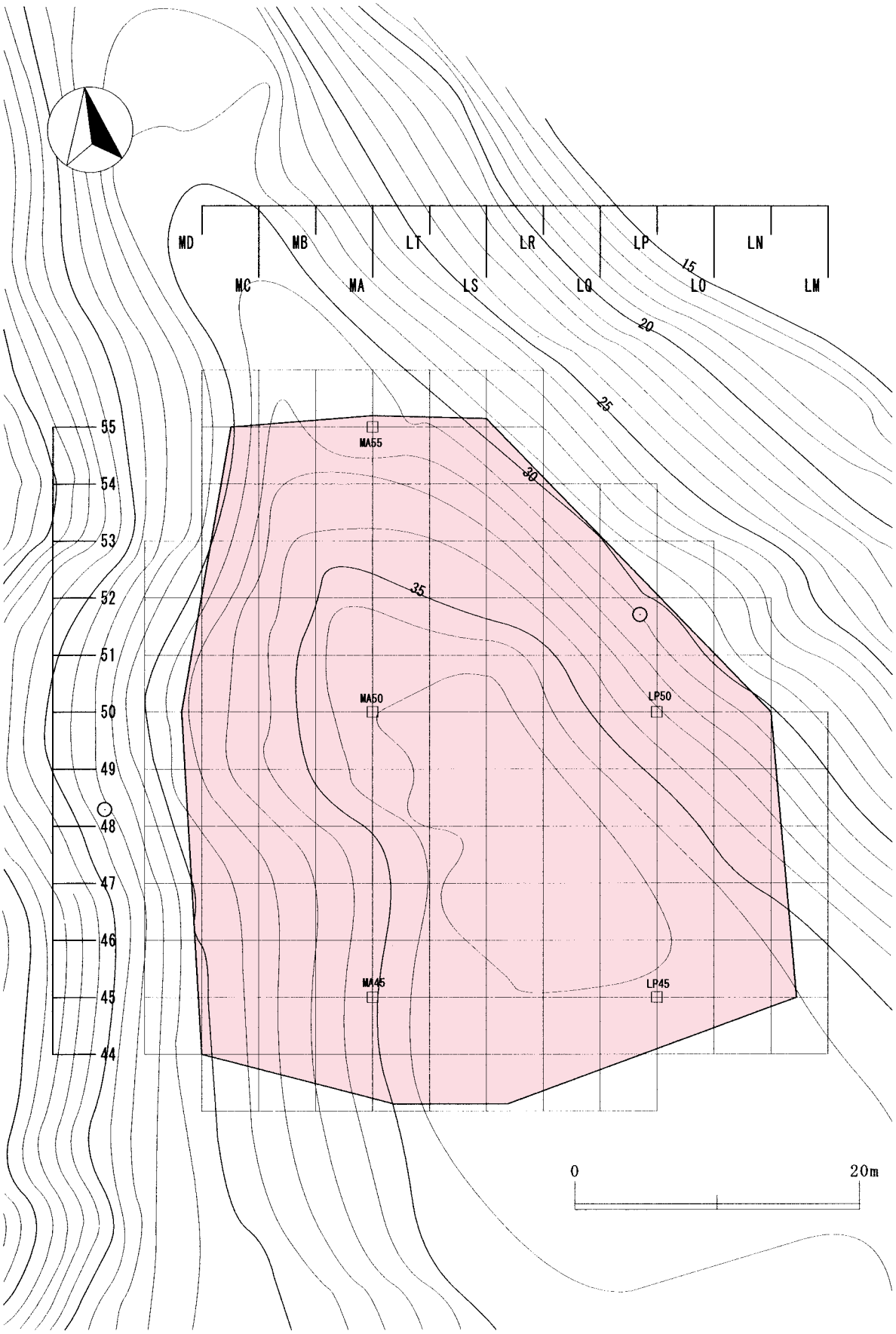
調査の結果、家ノ前遺跡遺跡は縄文時代前期と中期に集落が営まれていたことが分かった。調査区の南側は平坦部が広がっていることから、遺跡は調査区の南側に続いているものと思われる。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の１点（国家座標Ｘ系：Ｘ＝－61 770.848　Ｙ＝－65 050.106）を選定し、これを原点（ＭＡ50）とした。この原点から座標北方向に基準線を設定し、この基準線に直交する４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。また数か所の杭を水準測量して水準原点とした。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す･･･ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ･･･というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す･･･48・49・50・51・52･･の２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍの方眼杭の南東端をグリッドの名称とした。

調査は尾根部の平坦部からおこなった。確認調査のトレンチを再度掘り下げ、基本土層をとる地点を確認した。また土層の確認を行い、表土から人力で掘り下げ、Ⅱ層以下について精査を実施した。

検出した遺構には、確認調査で検出した遺構と混同しないように２桁の番号から付し、精査の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。遺構プランは、表面土色観察、実測用ベルトを設定して掘り下げ、土層断面の分層時に野帳等に堆積状態をスケッチして土色・土性等を記入した。後は断面図を作成し、完掘後に平面図を作成した。完形の石器はレベリングして取り上げた。縄文土器などの遺物は、グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。



第５図　家ノ前遺跡グリッド配置図

調査の記録は、断面図・平面図および写真を用い、図に記録する際は縮尺１/20を原則とした。ただし、竪穴住居内の炉は１/10で記録した。また、写真撮影は、35ｍｍのモノクロ・ネガカラーおよびリバーサルフィルムを使用した。

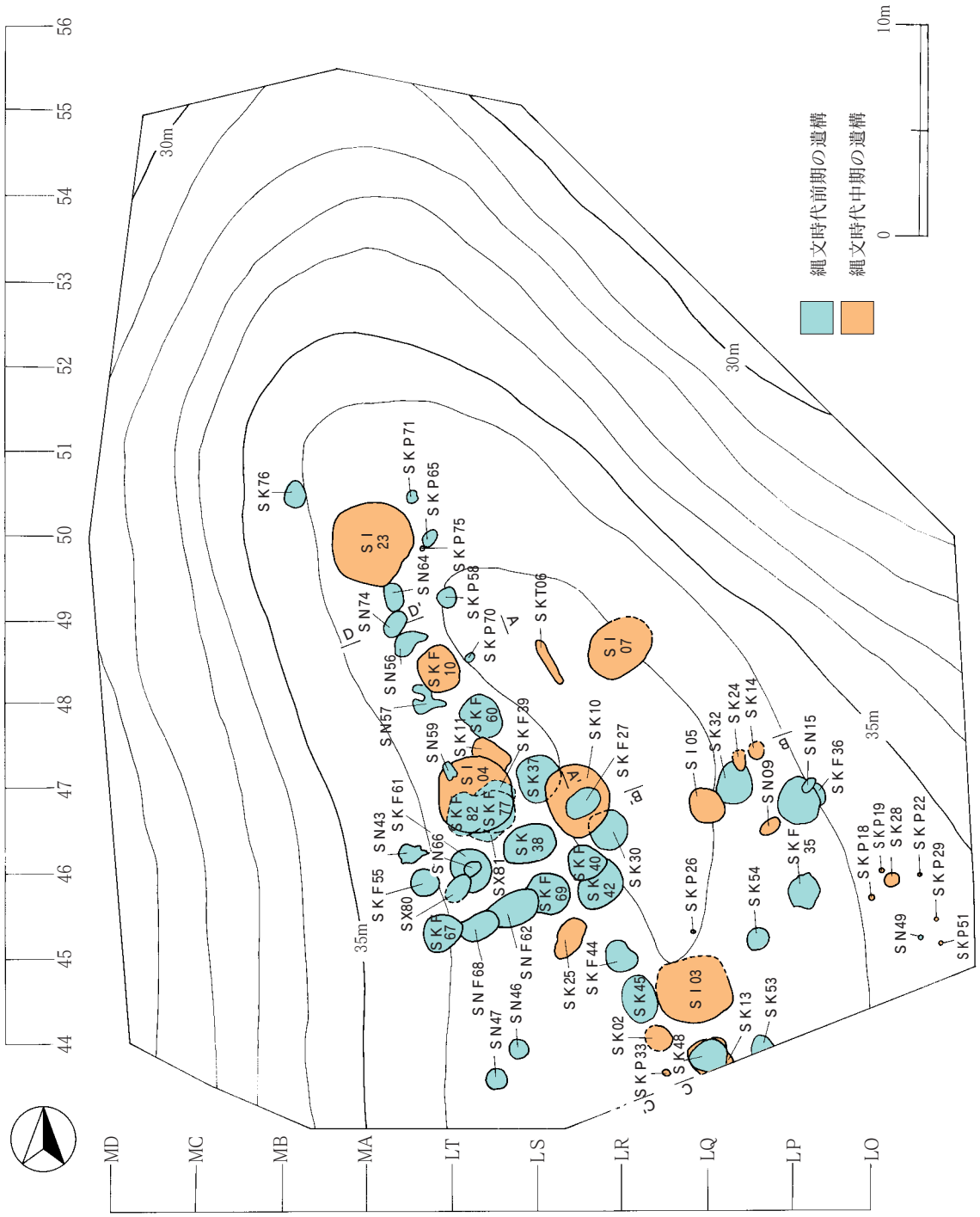
室内における整理は、遺構については現場で図化した平面図・断面図から第２原図を作成し、それをトレースして挿図を作成した。遺物は洗浄・注記の後、接合・復元をし、実測図・拓影図を作成した後に写真撮影を行った。遺物の注記は、遺跡略記号（６ＩＮＭ）・出土位置（地区名もしくは遺構名）・遺物番号・出土層位・出土年月日（050830）のような６桁の数字を記入した。また、遺構内より検出した炭化物７点を自然科学的分析に委託した。

第３節　調査の経過

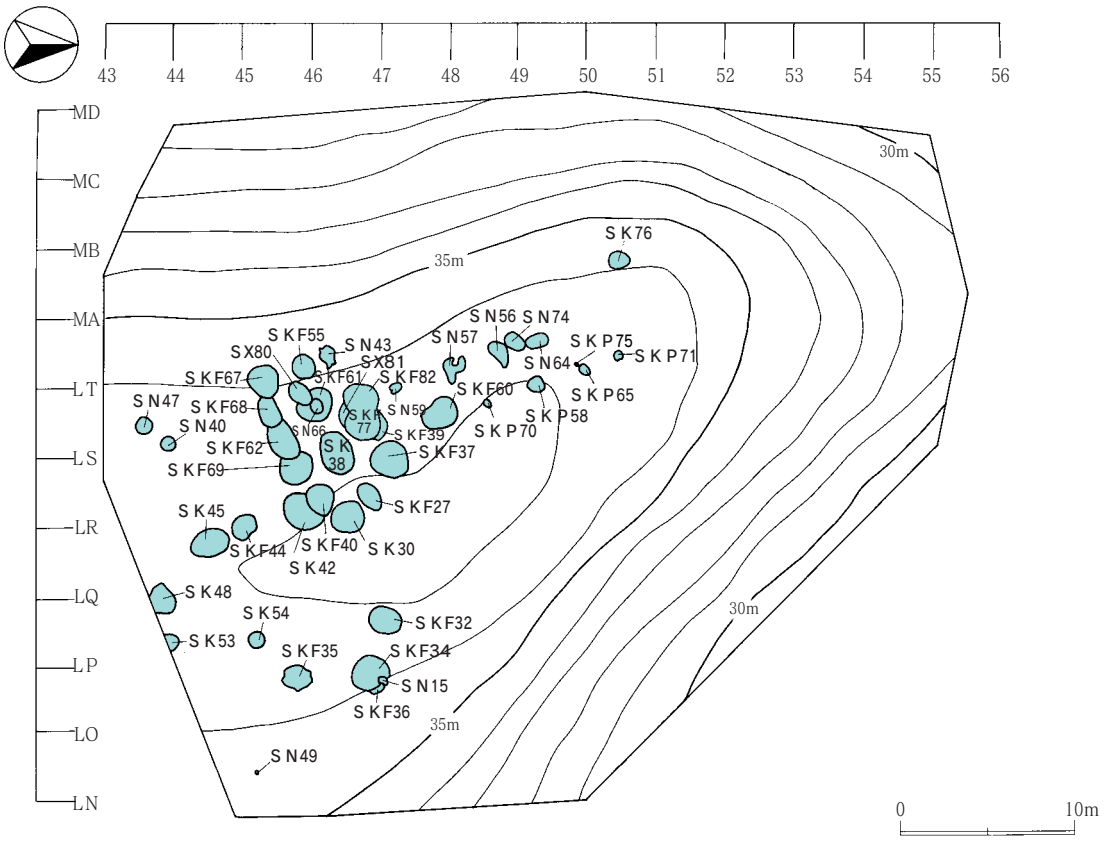
家ノ前遺跡の発掘調査は平成17年８月30日から11月７日まで実施した。発掘調査の経過は、以下の通りである。

８月３０日	作業員の説明会、機材の搬入、周囲の環境整備を行った。
８月３１日	調査区へ登る急斜面に階段をつくり、調査区の草刈りをする。
９月　１日	ベルトコンベアー１０台を調査区まで人力で運ぶ。
９月　２日	平坦部の南側より表土除去を開始。確認調査のトレンチを掘り下げきれいにする。
９月　６日	トレンチ位置図を作成。 ＬＱ４４グリッドで複式炉を検出。ＳＩ０４とする。
９月　７日	竪穴住居跡と思われる遺構（ＳＩ０１、ＳＩ０３）検出。
９月　９日	ＬＰ４６グリッドでＳＫ０５検出。竪穴住居跡になる可能性あり。 文化財保護室大野室長・櫻田主幹来跡。
９月１２日	ＳＩ０４の平面形を確認し、ベルトを設定。陥し穴（ＳＫＴ０６）検出。 遺跡のある鍋倉集落町内会長藤田氏来跡。
９月１３日	平坦部東側でＳＩ０７検出。そのすぐ近くでＳＮ０９（焼土遺構）検出。
９月１５日	読売新聞秋田支局井上記者取材に来跡。大内文化財保護協会遠藤光市さん来跡。 １トレンチと３トレンチの交差点で竪穴住居跡（ＳＩ１０）検出。 ＳＩ０４に切られた炭が大量に入った土坑（ＳＫ１１）を検出。
９月１６日	基本土層Ｂの写真・図面終了。井上記者１日体験発掘。
９月２０日	基本土層Ｃの写真・図面終了。
９月２１日	東側斜面部で４基のピット検出。
９月２６日	平坦部北側で竪穴住居跡（ＳＩ２３）検出。
９月２７日	ＳＫ０５で埋設土器を検出。住居の炉の可能性が出てきた。

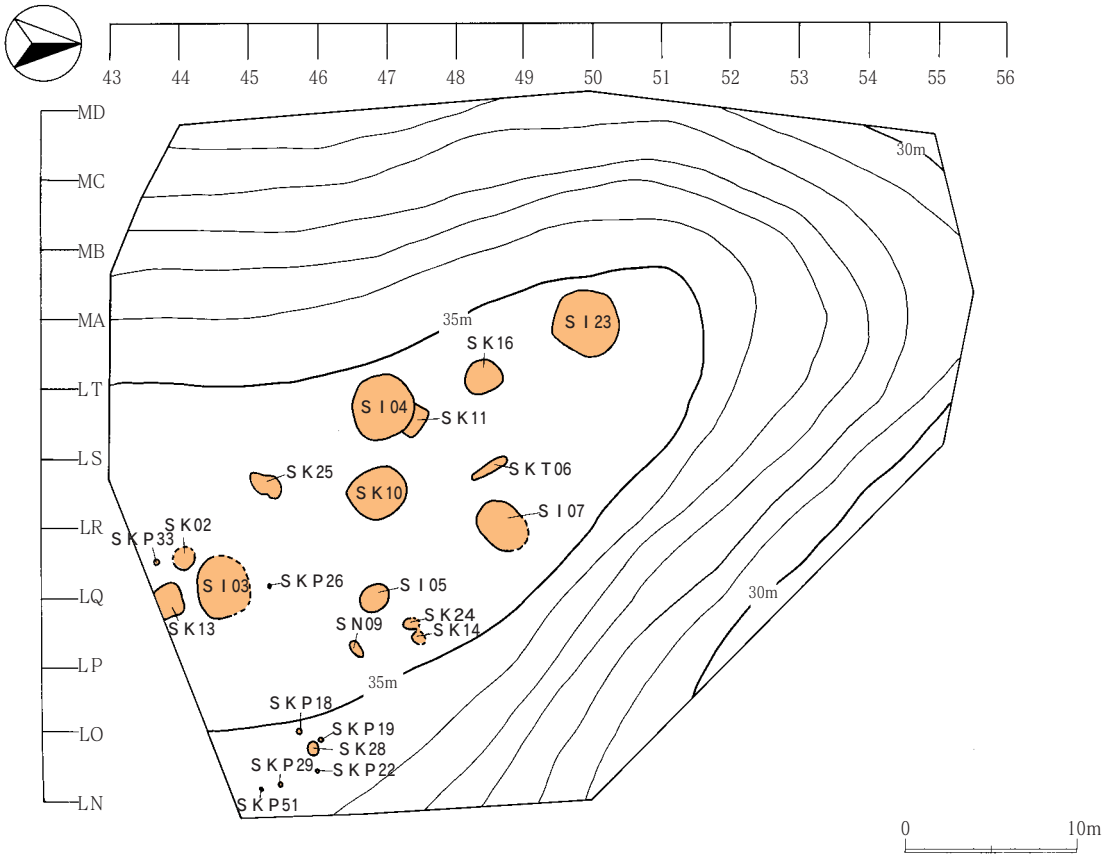
９月２８日	ＳＩ２３で石組の中に埋設土器を検出。複式炉と思われる。
９月２９日	米坂集落住民１２名見学。
９月３０日	ＳＫ２４検出。
１０月　５日	ＳＫ０２、ＳＫ１３完掘。
１０月　７日	文化庁岡田調査官、文化財保護室藤澤主任学芸主事・五十嵐学芸主事、由利本荘市教育委員会須田文化課長・三浦主査来跡。
１０月１３日	大内ＣＡＴＶセンター取材のため来跡。フラスコ状土坑（ＳＫＦ２７）検出。
１０月１５日	大内埋蔵文化財審議委員伊藤良二氏来跡。
１０月１８日	ＳＫ３２検出。文化財保護室大野室長来跡。
１０月１９日	ＳＫＦ３５・３６検出。ＳＸ３７・３８・３９検出。
１０月２０日	ＳＩ２３調査終了。ＳＫＦ３２・３５・４０検出。ＳＸ４２、ＳＮ４３検出。 佐田副所長来跡。
１０月２１日	ＳＫＦ４９・５４・５５、ＳＸ５２検出。
１０月２４日	ＳＫ５８、ＳＮ５９、ＳＸ６１・６２・６３検出。 ラジコンヘリを使って遺跡の航空写真を撮影。
１０月２５日	ＳＫＦ６７・６８・６９、ＳＫＰ７０・７１検出。柱穴の痕跡を確認する。
１０月２６日	ＳＫＦ７７検出。
１０月２７日	熊谷所長来跡。
１０月２８日	フラスコ群の完掘写真を撮影。調査区への階段を撤去。 佐田副所長、柴田主任来跡。
１０月３１日	調査区のコンター図作成。ベルコン等のリース品返却。
１１月　１日	コンター図完成。
１１月　４日	秋田県由利地域振興局建設部高橋忠副主幹に現場引き渡しを行う。
１１月　７日	発掘用機材を撤収し、調査を終了。



第６図　家ノ前遺跡遺構配置図



第７図　遺構配置図　縄文時代前期



第８図　遺構配置図　縄文時代中期

第４章　調査の記録

第１節　基本層位

調査区の現況は杉を中心とした森林であった。調査区全体が馬の背状の地形で平坦面が比較的狭く、西側・東側とも斜面となっていて、中腹から急斜面となっている。土層は一部森林を伐採するために重機が入り、削平を受けた箇所もあるが、自然の堆積を残しているところも多い。

平坦部（基本土層Ａライン）、西側斜面（基本土層Ｄライン）とも層厚の違いはあるが基本的な土層に大きな違いは見られない。東側斜面（基本土層Ｂライン）は削平を受けたためⅢ層とⅣ層が確認できなかった。以下に示すＩ～Ⅴ層に分層した。

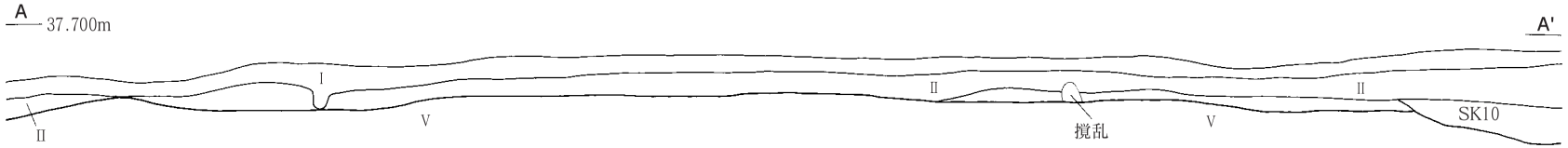
Ｉ層：黒褐色土層。層厚20～50cmほどで遺物はほとんど包含しない。平坦部では20cmほどであるが、斜面を下るにつれて堆積も厚くなる。

II層：にぶい黄褐色土層。平坦面と西側斜面に残存していて、層厚は10～25cmである。ほとんど遺物は確認されていない。

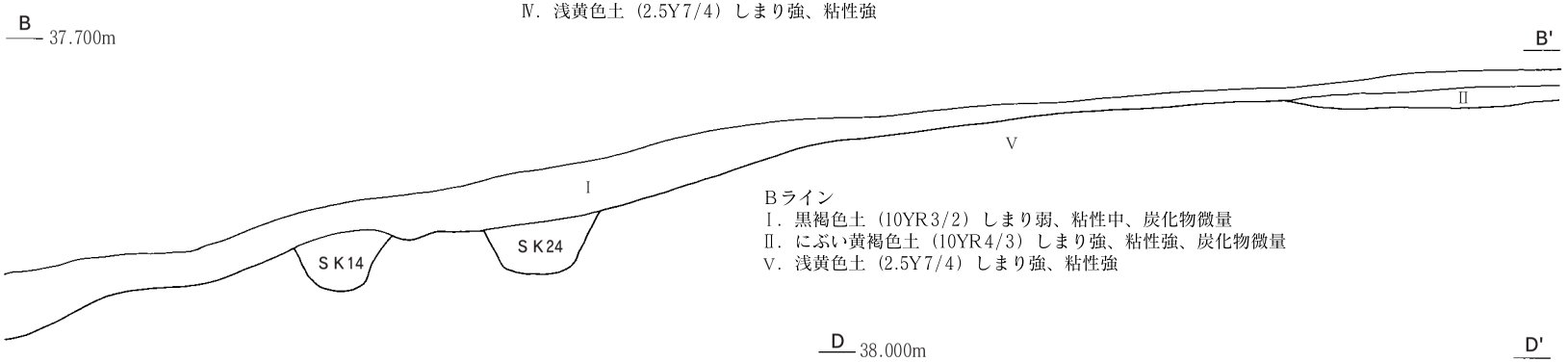
Ⅲ層：にぶい黄褐色土層（遺物包含層）。縄文時代中期と思われる石器を包含するが、遺物廃棄単位に相当する層の細分はできなかった。このため遺物は基本的には一括で取り上げた。

Ⅳ層：にぶい黄橙色土層。縄文時代前期の土器と石器を包含する。西側斜面で確認され、まとまった量の土器と石器が出土した。

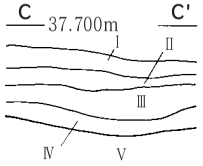
Ⅴ層：浅黄色土層（地山層）。無遺物層で固くしまっており、上層のⅣ層とは区別できるが明瞭ではない。粘土質で下部に礫は含まれていない。



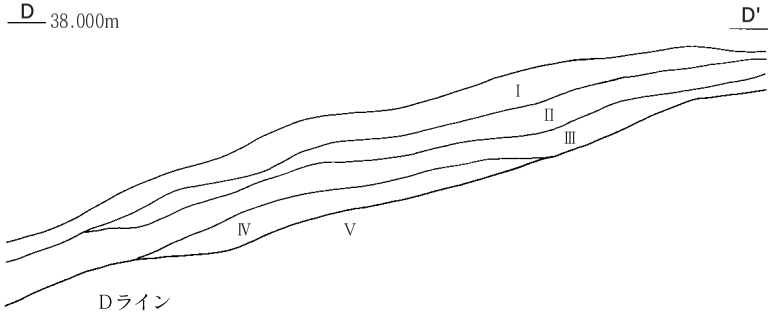
Aライン
Ⅰ．黒褐色土（10YR3/2）しまり弱、粘性中、炭化物微量、植物根少量
Ⅱ．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
Ⅲ．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、地山ブロック少量
Ⅳ．浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強



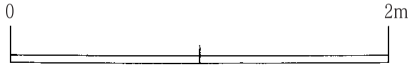
Bライン
Ⅰ．黒褐色土（10YR3/2）しまり弱、粘性中、炭化物微量
Ⅱ．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強、粘性強、炭化物微量
Ⅴ．浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強



Cライン
Ⅰ．黒褐色土（10YR3/2）しまり弱、粘性弱、炭化物微量
Ⅱ．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり中、粘性中、炭化物微量
Ⅲ．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性中、炭化物微量、地山粒微量
Ⅳ．にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり強、粘性強
Ⅴ．浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強



Dライン
Ⅰ．黒褐色土（10YR3/2）しまり弱、粘性弱、炭化物微量、植物根少量
Ⅱ．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり中、粘性中、炭化物微量
Ⅲ．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性中、炭化物微量、地山ブロック少量
Ⅳ．にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり強、粘性強
Ⅴ．浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強



第９図　基本土層図

第２節　縄文時代前期の遺構と遺物

（１）フラスコ状土坑

①ＳＫＦ27（第10図、図版２）

《位置と確認》LR46グリッド。・層で確認。SK10の底面にサブトレンチを設定したところ、掘り下げるにつれて外側へ広がっていったため、フラスコ状土坑であると判断した。

《規模と平面形》口径1.83×1.32mの楕円形で、深さは1.58mである。底径は1.83mで、掘り過ぎたため下場の半分の形状は不明である。

《重複》なし

《覆土》11層に分層した。地山が主体の層か、地山ブロック混入の層がほとんどであるため、人為堆積と思われる。11層からは炭化物がまとまって検出された。炭化物は木材と思われ、棒状に３本確認できた。

《壁・底面》底面は平坦、壁はフラスコ状。南側を掘り過ぎたため、下場の半分を記録できなかった。

《出土遺物》縄文土器片１点が覆土上位層で出土。剥片と刃の調整時に出たと思われるチップが覆土の上位層で少量出土した。埋め土に混入していたと思われる。

②ＳＫＦ32（第10図、図版21・23）

《位置と確認》LP46・47グリッド。・層で確認。SK05下の遺構の有無を確認するためサブトレンチを設定したところ、トレンチ断面にフラスコ状の立ち上がりを確認した。

《規模と平面形》口径1.94×1.74mの楕円形で、深さ0.44mであった。底径は1.82×1.35mの楕円形である。

《重複》縄文中期のSK24によって北側が少し撹乱されている。

《覆土》４層に分層した。３層には炭化物が多く見られ、土器片も数点出土しており、人為的に埋められたものと判断した。

《壁・底面》底面は凸凹している。壁は北側の一部がフラスコ状になっている他は、ほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で大きく広がり緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》縄文土器片１点、石鏃１点が出土した。第10図１は、木目状撚糸文が施文されている。第10図２の石鏃は涙型で、基部にやや丸みがある無茎石鏃である。先端部が欠損している。

③ＳＫＦ34（第12図、図版３）

《位置と確認》LO46・LP46グリッド。・層で確認。SN15下の遺構の有無を確認するためサブトレンチを設定したところ、トレンチ断面にフラスコ状の立ち上がりを確認した。東側半分は本来0.3mほど上位面で確認できたと思うが、プランを見つけられず、掘りすぎてしまった。

《規模と平面形》口径2.28×1.98mの楕円形で深さは0.64m。底径は1.98×1.66mの楕円形。

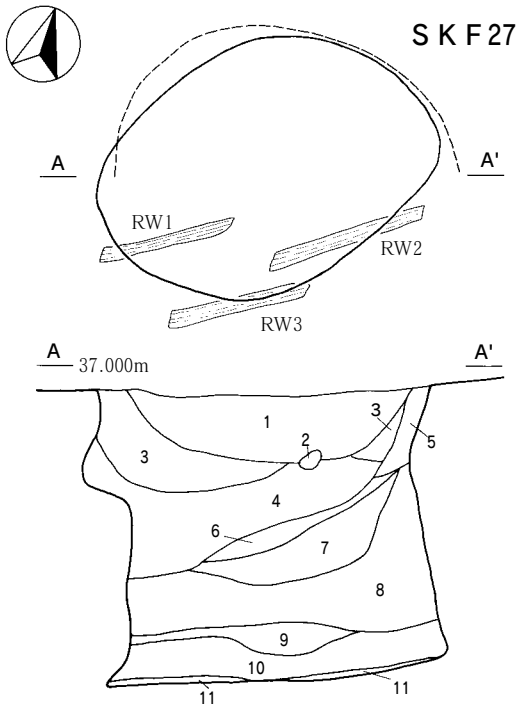
《重複》SKF36とSN15と重複している。　（旧）　SKF36→SKF34→SN15　（新）

《覆土》４層に分層した。３層には炭化物の混入が目立つ。人為堆積と判断した。

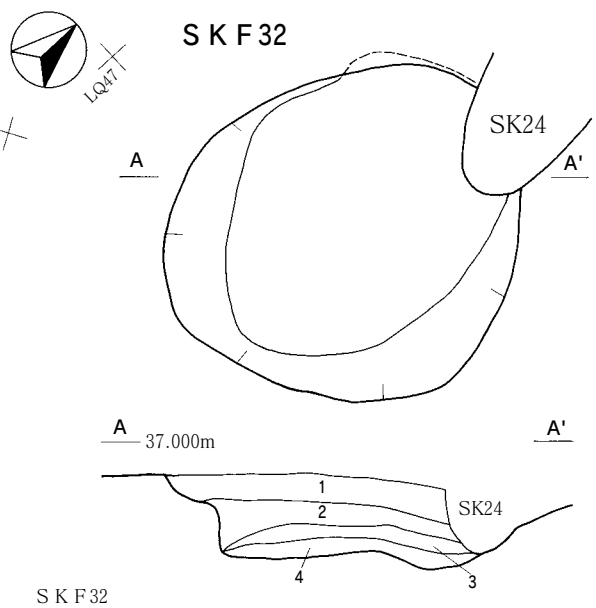
《壁・底面》底面は平坦で、壁はフラスコ状となっていた。

《出土遺物》縄文土器片１点。剥片２点。

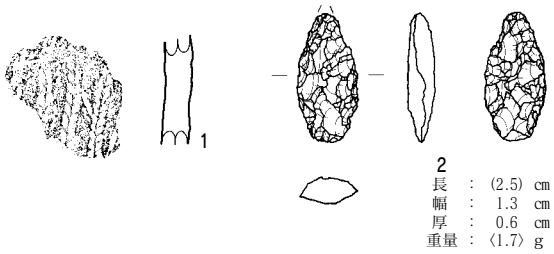
④ＳＫＦ35（第10・11図、図版21・23）



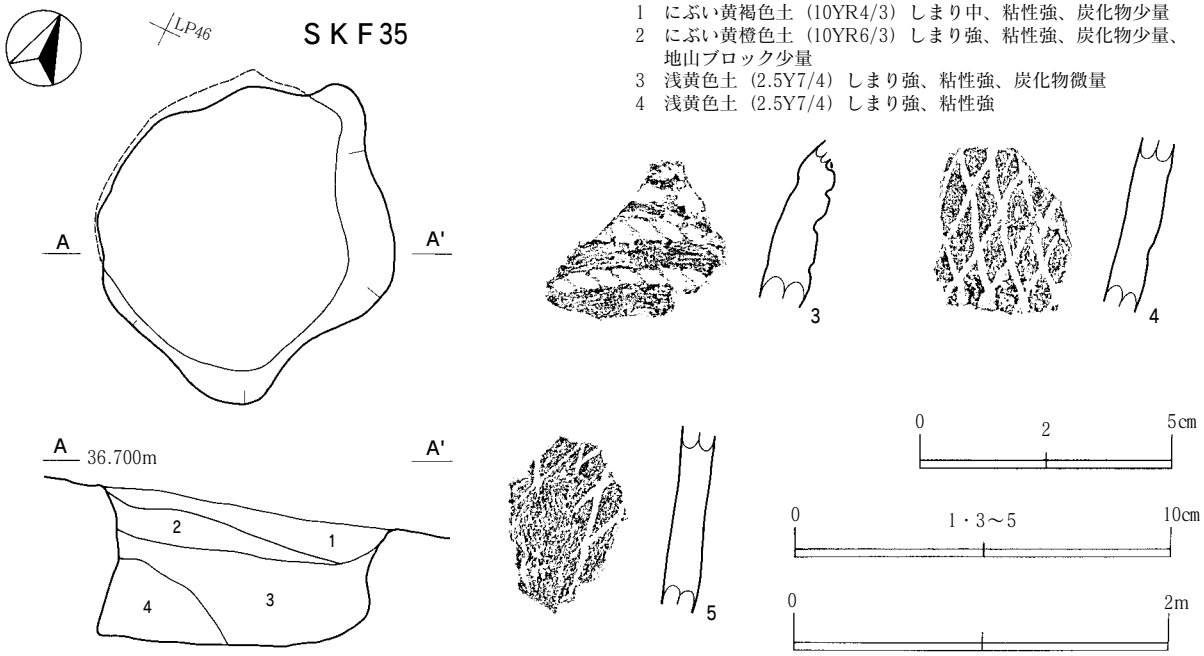
ＳＫＦ27
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
2　灰黄褐色土（10YR5/2）しまり中、粘性強、炭化物多量
3　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり中、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
4　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性中、炭化物微量
5　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
6　灰黄褐色土（10YR6/2）しまり中、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
7　にぶい黄橙色土（10YR7/2）しまり中、粘性強、炭化物少量、地山ブロック多量
8　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性中、炭化物少量
9　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり中、粘性強、炭化物微量
10　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性中、炭化物微量
11　灰黄色土（2.5Y6/2）しまり中、粘性強、炭化物少量



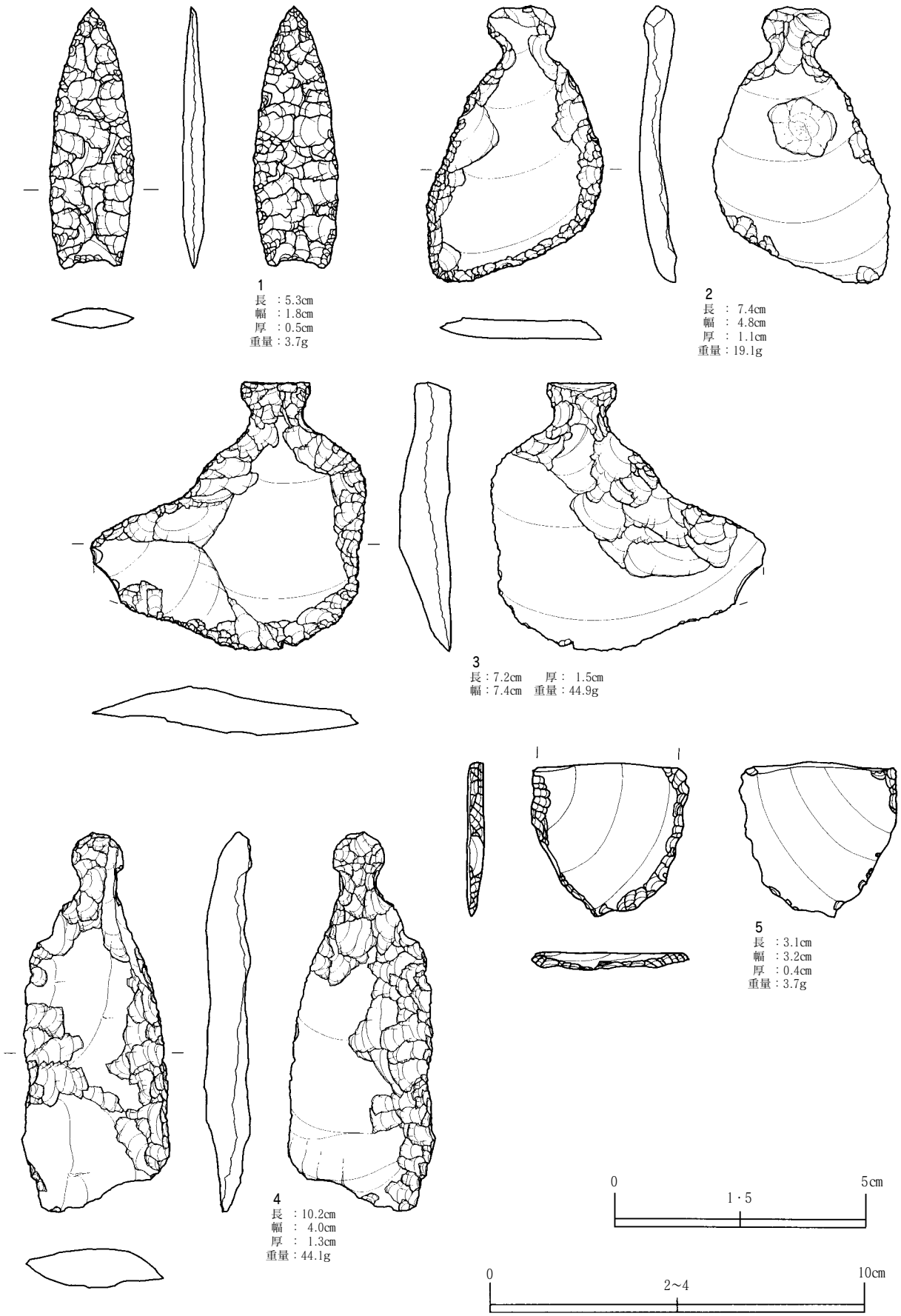
ＳＫＦ32
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、炭化物微量
2　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック多量
3　灰黄褐色土（10YR5/2）しまり中、粘性強、炭化物多量、焼土粒少量、地山粒少量
4　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量



ＳＫＦ35
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり中、粘性強、炭化物少量
2　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
3　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強、炭化物微量
4　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強



第10図　ＳＫＦ27・32・35平面図・断面図　ＳＫＦ35出土遺物（１）



第11図　ＳＫＦ35出土遺物（２）

《位置と確認》LO45グリッド。Ｖ層で円形プランを確認。

《規模と平面形》口径は1.8×1.54mの不整円形で深さは0.78m、底径は1.59×1.32mの不整円形。

《重複》なし

《覆土》４層に分層した。３・４層は地山が厚く埋まっているため人為堆積とし、それ以外は自然堆積と判断した。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は西側が少しオーバーハングしているものの、それ以外はほぼ垂直に立ち上がっている。

《出土遺物》（第10・11図）縄文土器片３点、石鏃１点、石匙３点、削器１点、剥片１点が出土。第10図３は深鉢形土器の口縁に近い胴部で、太い撚糸文が平行して押圧されている。第10図４・５は深鉢形土器の胴部で、網目状撚糸文が施文されている。第11図１は槍型の石鏃で基部にも調整を加え、少し抉られた形状を呈する。第11図２は石匙で裏側のつまみ下に調整を加え窪ませ、指の据わりがいいようになっている。第11図３は縦・横に刃部をつくった石匙で、持ち手部分を調整している。第11図４は縦型の石匙で刃部に使用による微少な欠損が確認された。第11図５は削器で両側が刃部として調整されている。

⑤ＳＫＦ36（第12図、図版3・21・24）

《位置と確認》LO46・47グリッド。Ｖ層で確認。SN15下の遺構の有無を確認するためサブトレンチを設定したところ、トレンチ断面にフラスコ状の立ち上がりを確認した。

《規模と平面形》口径1.57×1.29mの楕円形で、深さは0.7mである。底径は1.96×1.85mの円形。

《重複》SKF34とSN15に切られる。（旧）　SKF36→SKF34→SN15　（新）

《覆土》６層に分層した。人為堆積で埋まったと思われる。

《壁・底面》底面は平坦で、壁はフラスコ状でかなり中に入り込んでいる。

《出土遺物》縄文土器片３点、石鏃３点、石匙２点、剥片１点。第12図１は深鉢形土器の外反する口縁部で木目状撚糸文が施文されている。第12図２は深鉢形土器の胴部で網目状撚糸文が施文されている。１・２とも円筒下層ｄ式に比定される。第12図３は深鉢形土器の胴部でLR縄文が横位回転施文されている。第12図４・５は大型の石鏃で基部に抉りが入っている。第12図６は石錐とも考えられたが、摩滅痕が無いことから石鏃とした。第12図７は三日月型の石匙で全面に調整が加えられている。第12図８も石匙でつまみの軸線に対し45°の角度に刃がつけられている斜め型のタイプである。

⑥ＳＫＦ39（第13・14図、図版４・22・24）

《位置と確認》LS46・47グリッド。Ｖ層で確認。

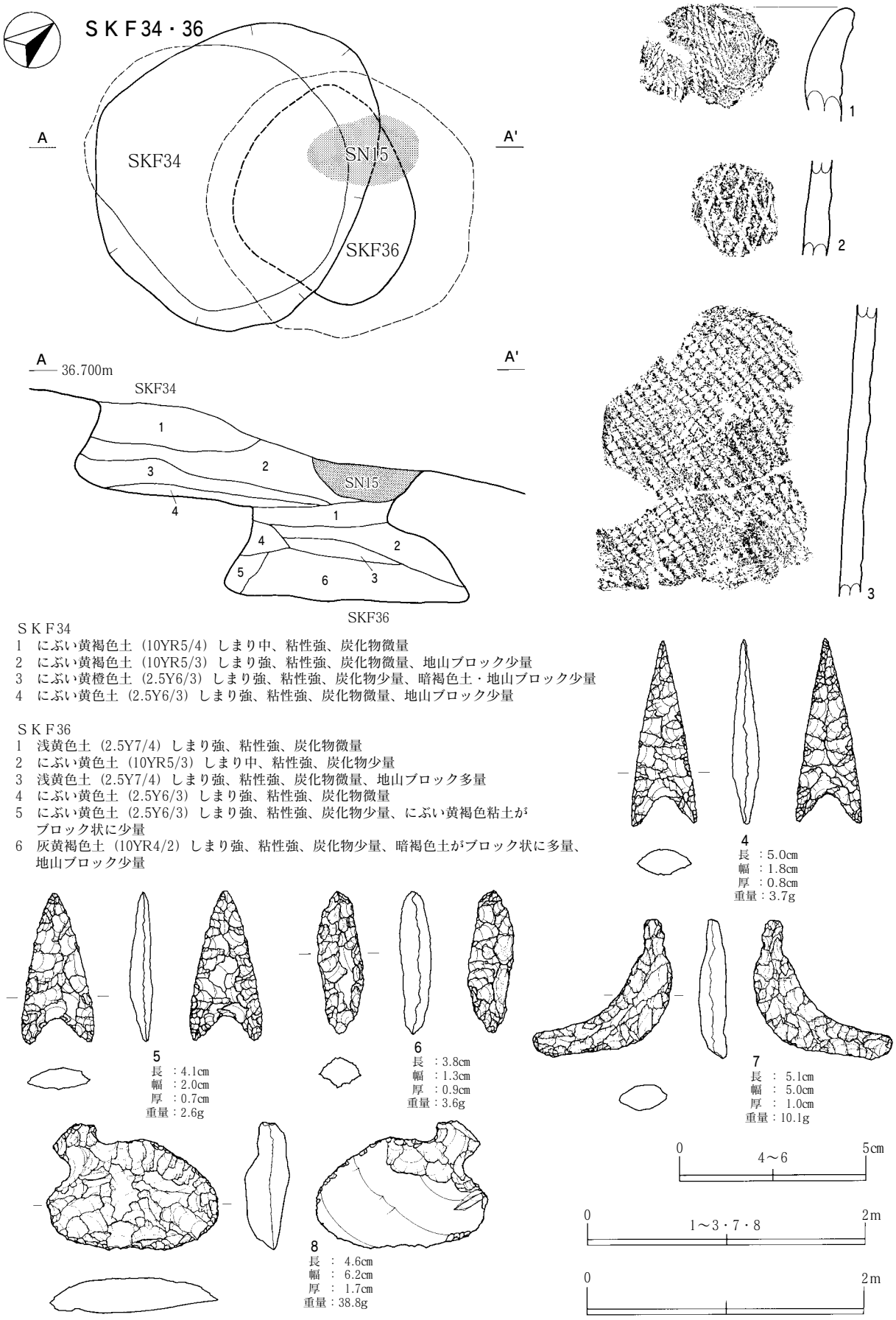
《規模と平面形》ほぼ同じ場所にSKF77が構築されているため規模は不明であるが、図面からは、直径は少なくとも1.5m以上で、深さは１m以上になると考えられる。

《重複》SKF77と重複する。SKF39よりSKF77が新しい。SKF82にも切られている可能性がある。

《覆土》SKF77と重複しているため、1層のみ確認できた。

《壁・底面》底面はSKF77のものと区別が付かず不明である。壁はフラスコ状を呈し、開口部はテラス状に浅く張り出している。

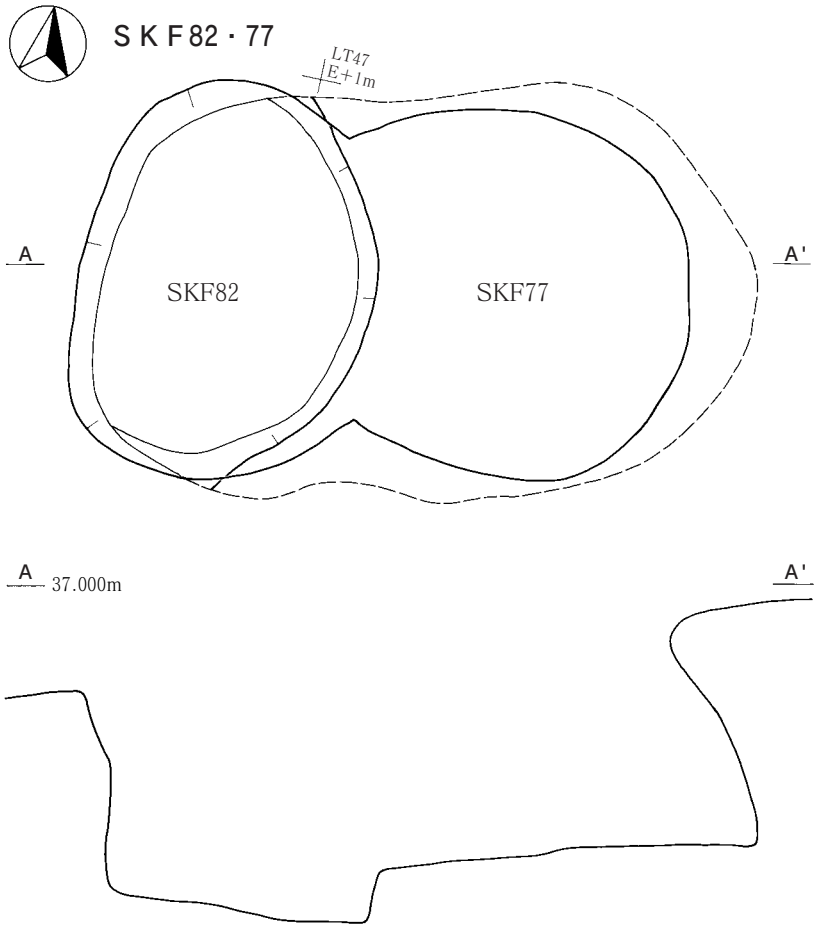
《出土遺物》（第14図）縄文土器片８点、石篦１点。第14図１と２は深鉢形土器の口縁部で、口唇部に縦に縄文が押圧され、突起部に渦文が施文されている。また、口唇下に鋸歯状の模様が半裁竹管で施文さ



ＳＫＦ34
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり中、粘性強、炭化物微量
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
3　にぶい黄橙色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、暗褐色土・地山ブロック少量
4　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量

ＳＫＦ36
1　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強、炭化物微量
2　にぶい黄色土（10YR5/3）しまり中、粘性強、炭化物少量
3　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック多量
4　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物微量
5　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、にぶい黄褐色粘土がブロック状に少量
6　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強、粘性強、炭化物少量、暗褐色土がブロック状に多量、地山ブロック少量

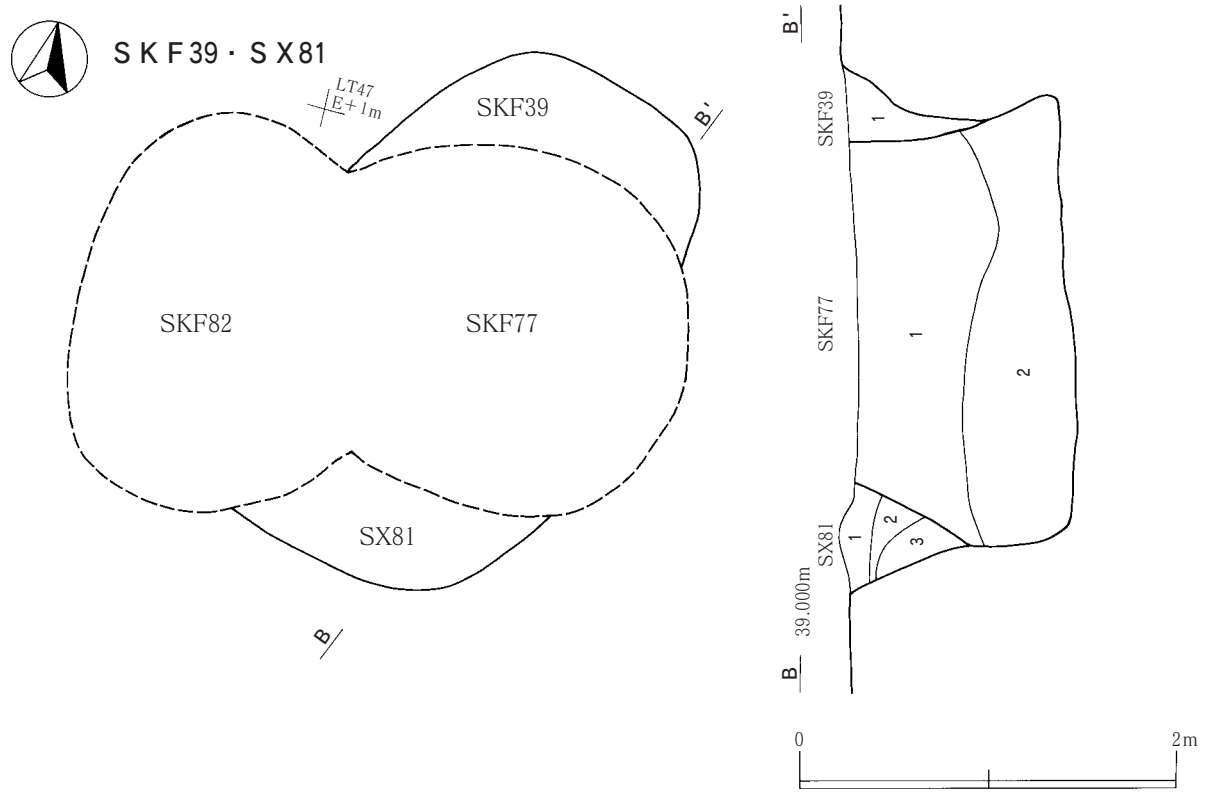
第12図　ＳＫＦ34・36平面図・断面図　ＳＫＦ36出土遺物



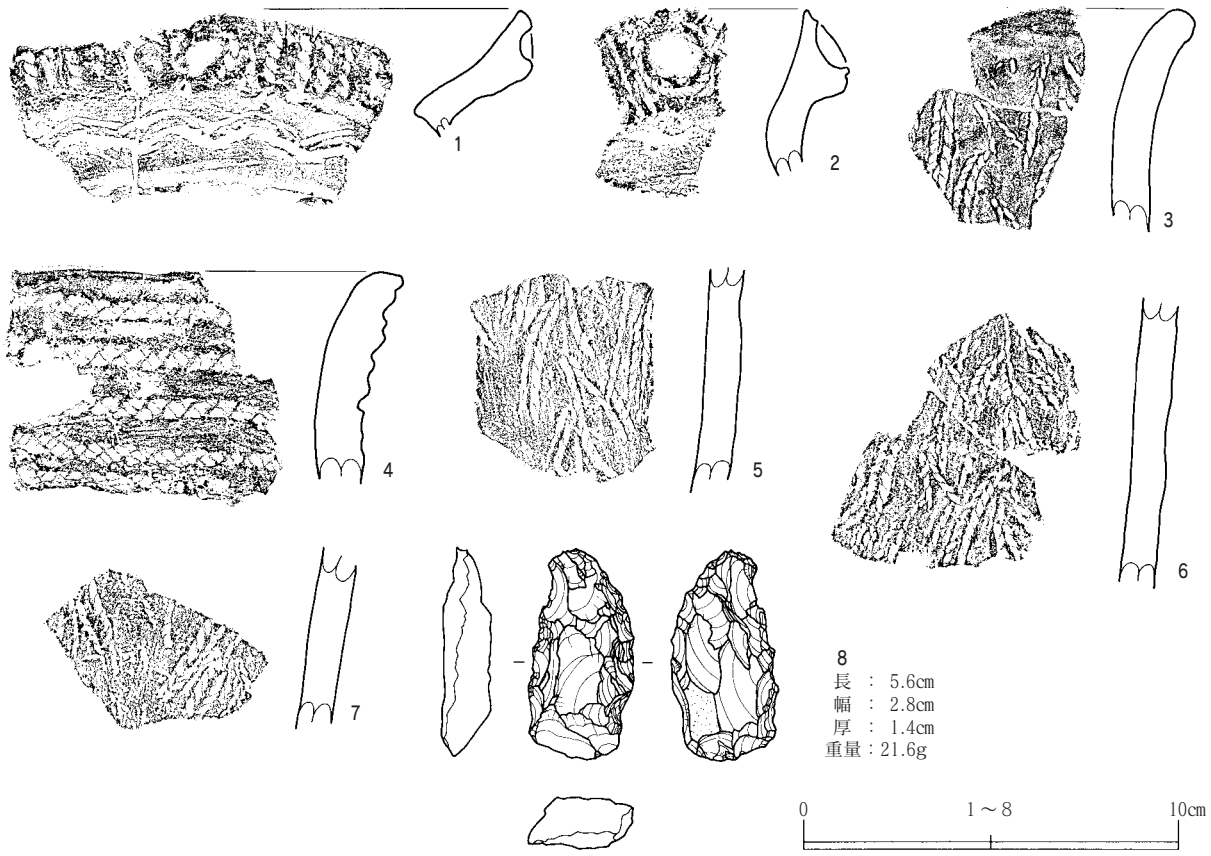
ＳＫＦ39
1　褐色土（10YR4/6）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量

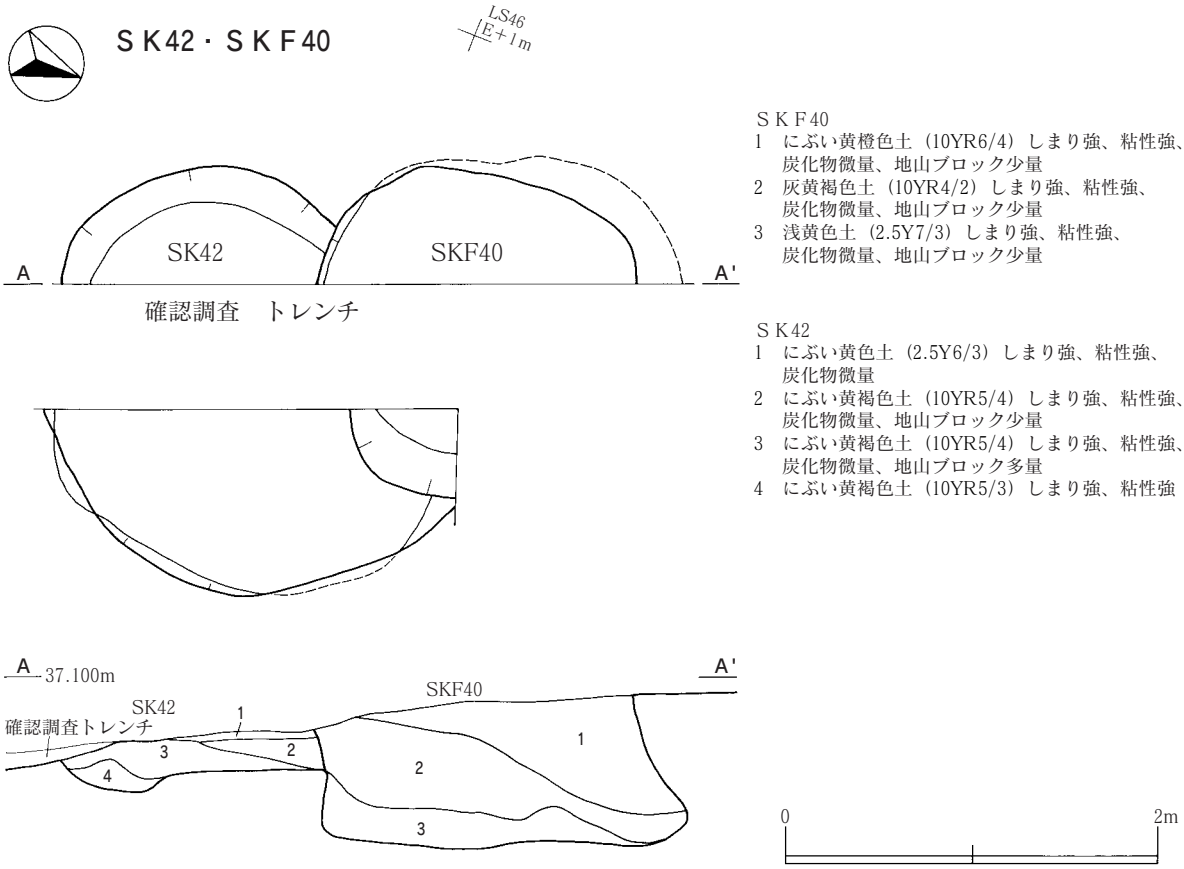
ＳＫＦ77
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、灰黄褐色粘土少量
2　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量

ＳＸ81
1　褐色土（10YR4/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック微量
2　褐色土（10YR4/6）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
3　褐色土（10YR4/6）しまり強、粘性強、炭化物少量、径3～4cmの地山ブロック少量



第13図　ＳＫＦ39・77・82　ＳＸ81平面図・断面図





ＳＫＦ40
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
2　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
3　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量

ＳＫ42
1　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物微量
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック多量
4　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強

第14図　ＳＫＦ39出土遺物　ＳＫＦ40　ＳＫ42平面図・断面図

れている。第14図３は深鉢形土器の口縁部で木目状撚糸文が施文されている。第14図４は深鉢形土器の口縁部で６条の縄文が横位に押圧されている。器面はよく研磨されている。円筒下層ｄ式に比定される。第14図５～７は深鉢形土器の胴部で木目状撚糸文が縦位に施文されている。第14図８は小型の石篦で基部に刃部調整が確認できる。片面調整である。

⑦ＳＫＦ40（第14図）

《位置と確認》LR45・46グリッド。Ｖ層で確認。確認調査の１トレンチを深く掘り下げ、その断面においてSK42とともに確認した。トレンチで遺構の半分を失ってしまい、平面的にプランを検出できなかった。

《規模と平面形》口径は1.84mの円形で深さ0.81m、底径は1.8mの円形である。

《重複》SK42と重複する。SKF40が新しい。

《覆土》３層に分層した。全体的に地山ブロックの混入があり、人為堆積と判断した。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状である。

《出土遺物》剥片。

⑧ＳＫＦ44（第15図、図版５・22・24）

《位置と確認》LQ44・45、LR44・45グリッド。確認調査の１トレンチの断面で検出。Ｖ層で検出したがもう少し上面で確認できた。

《規模と平面形》口径は1.67×1.34mの不整円形で、深さは1.2m、底径は2.06×1.83mの不整円形である。

《重複》なし

《覆土》３層に分層した。人為堆積と思われる。１層に数個の礫を確認した。

《壁・底面》底面は平坦で、壁はフラスコ状を呈する。また、床面の中央に径0.41m、深さ0.32mのピットが掘り込まれていた。上部構造を支える柱、あるいは梯子を立てたピットと考えられる。

《出土遺物》縄文土器片１点、石篦１点、剥片。第15図３は直径３㎜の半裁竹管を使った平行沈線文が櫛状に施文されている。第15図２は小型の石篦と判断した。上部が欠損している。

⑨ＳＫＦ55（第15図、図版21・24）

《位置と確認》LT45グリッド。Ｖ層上面で確認。

《規模と平面形》口径は1.36×1.26mの円形で深さは0.88m、底径は1.86×1.72mの楕円形である。

《重複》なし

《覆土》３層に分層した。ほとんどが地山主体の土で、人為堆積と判断した。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状を呈する。

《出土遺物》縄文土器片１点。剥片。

⑩ＳＫＦ60（第16図、図版24）

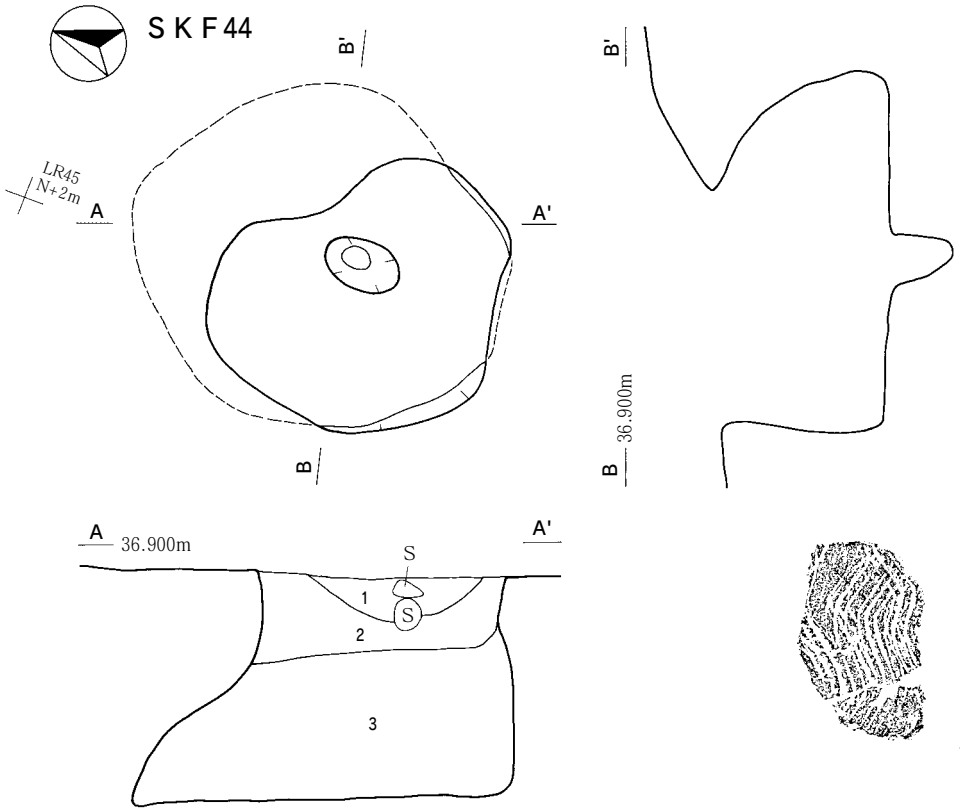
《位置と確認》LS47・48グリッド。Ｖ層上面で確認。

《規模と平面形》口径は2.14×1.72mの楕円形で深さ1.24m、底径は1.58×1.28mの楕円形である。

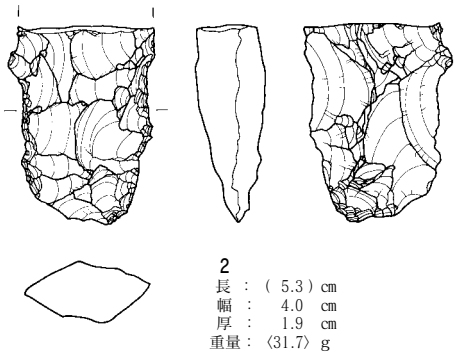
《重複》なし

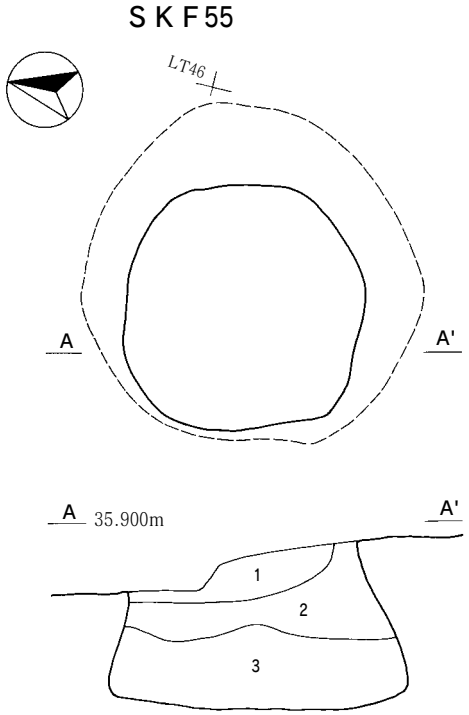
《覆土》６層に分層した。１・２・３層には土器片が混入していた。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、北側の壁際にピット状の落ち込みが１か所ある。ピットは径0.42×

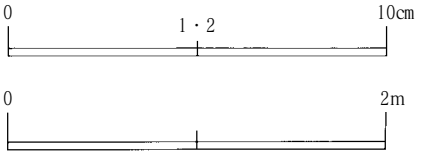


ＳＫＦ44
1　褐色土（10YR4/4）しまり中、粘性強
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、焼土少量
3　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、粘性強、炭化物微量、にぶい黄褐色土多量





ＳＫＦ55
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、
　暗褐色土がブロック状に少量
2　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、
　地山ブロック少量
3　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまりやや強、粘性強、炭化物少量



第15図　ＳＫＦ44・55平面図・断面図　ＳＫＦ44出土遺物

0.32m、深さは床面から0.18mとなっている。壁は急角度で立ち上がっており、現状ではフラスコ状になっていないが、崩落により口頸部が広がったものと判断した。６層は崩落土の可能性もあるが、礫が多く入っていることから、人為的堆積と判断した。

《出土遺物》縄文土器片、石匙1点、凹石１点、剥片。第16図１は縦型の石匙で片側に調整を加えて刃部を作っている。第16図２は楕円形を呈する凹石で、両面に３個の敲打痕が残る。また礫の周縁全体に磨った痕跡も確認できる。

⑪ＳＫＦ61（第16図、図版５）

《位置と確認》LS45・46グリッド。Ｖ層で確認。

《規模と平面形》口径は2.19×2.01mの円形で深さは1.58m、底径は2.27×1.92mの不整円形である。

《重複》SX80、SN66と重複する。　　（旧）SKF61→SN66→SX80（新）

《覆土》６層に分層した。全体的に地山ブロックが混入しており、人為堆積の可能性が高い。

《壁・床面》床面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状を呈する。

《出土遺物》縄文土器片。剥片石器。

⑫ＳＫＦ62（第17図、図版４）

《位置と確認》LS45グリッド。Ｖ層で検出。プランは確認できたが、大型の円形プランが３つ連なっているものとしては確認できなかった。３つ並んでいるのは断面で確認した。また、本来の掘削面はより高い面であると思われる。

《規模と平面形》口径2.42×1.68mの長楕円形で深さは1.22m。底径は1.98×1.95mの円形である。

《重複》SKF69、SKF68と重複する。　　（旧）SKF69→SKF62→SKF68（新）

《覆土》９層に分層した。２層と９層は地山を主体としており、人為堆積と判断した。７層は炭化物の混入が目立つため、人為堆積の可能性がある。他は自然堆積と思われる。

《壁・床面》床面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状になっている。

《出土遺物》縄文土器。剥片。

⑬ＳＫＦ67（第17図、図版24）

《位置と確認》LS45、LT45グリッド。Ｖ層で確認したが、確認できるまで少し掘りすぎた。

《規模と平面形》口径1.98×1.67mの不整円形で、深さは1.7m。底径2.5×2.16mである。

《重複》SKF68と重複する。SKF67はSKF68より新しい。

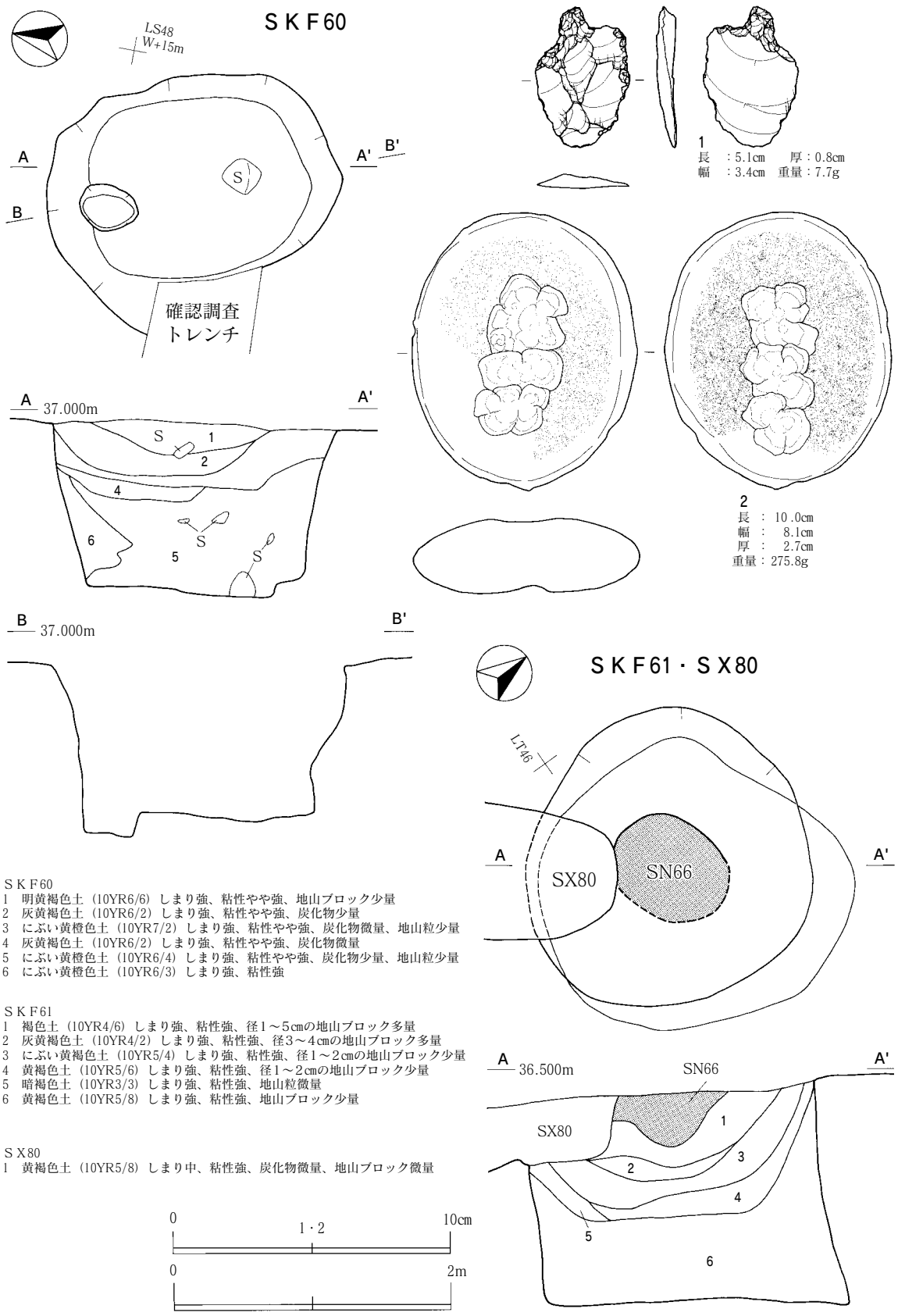
《覆土》７層に分層した。地山ブロックが多く入っており、人為堆積と判断した。

《壁・床面》床面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状である。

《出土遺物》（第18図）縄文土器片、石鏃２点、石箆１点、削器１点、掻器１点、石錘１点。第18図１は基部が抉れた石鏃で、先端部と基部の片側が欠損している。第18図２も涙型の石鏃で先端部が欠損している。第18図３は辺縁部全体の両面に調整を加えた石箆と判断した。第18図４は薄い剥片の下部と側部片面に調整を加え、刃部を作っており削器と分類した。第18図５は基部と側縁に連続した調整があり、厚さもあることから掻器とした。第18図６は礫を対角線に打ち欠いて作った石錘と思われる。

⑭ＳＫＦ68（第17・18図、図版４）

《位置と確認》LS45グリッド。Ｖ層で検出。プランは確認できたが、大型の円形プランが３つ連なっているものとしては確認できなかった。３つ並んでいるのは断面で確認した。また、本来の確認面はより



ＳＫＦ60
1　明黄褐色土（10YR6/6）しまり強、粘性やや強、地山ブロック少量
2　灰黄褐色土（10YR6/2）しまり強、粘性やや強、炭化物少量
3　にぶい黄橙色土（10YR7/2）しまり強、粘性やや強、炭化物微量、地山粒少量
4　灰黄褐色土（10YR6/2）しまり強、粘性やや強、炭化物微量
5　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性やや強、炭化物少量、地山粒少量
6　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり強、粘性強

ＳＫＦ61
1　褐色土（10YR4/6）しまり強、粘性強、径１～５cmの地山ブロック多量
2　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強、粘性強、径３～４cmの地山ブロック多量
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、径１～２cmの地山ブロック少量
4　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、粘性強、径１～２cmの地山ブロック少量
5　暗褐色土（10YR3/3）しまり強、粘性強、地山粒微量
6　黄褐色土（10YR5/8）しまり強、粘性強、地山ブロック少量

ＳＸ80
1　黄褐色土（10YR5/8）しまり中、粘性強、炭化物微量、地山ブロック微量

第16図　ＳＫＦ60・61　ＳＸ80平面図・断面図　ＳＫＦ60出土遺物

高い面であると思われる。

《規模と平面形》口径1.88×1.23mの長楕円形で、深さは1.17m。底径2.08×1.91mの不整円形である。

《重複》SKF62、SKF67と重複する。　　（旧）SKF62→SKF68→SKF67（新）

《覆土》９層に分層した。新しいフラスコ状土坑を作る際の排土で、古いフラスコ状土坑を埋めたため、このような堆積状況になったものと判断した。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状となっている。

《出土遺物》縄文土器片。剥片。

⑮ＳＫＦ69（第17・18図、図版４・24）

《位置と確認》LR45、LS45グリッド。Ｖ層で確認。本来であれば、0.4mほど高い面で検出されるものを、掘りすぎたため、SKF62と同じ高さになっている。

《規模と平面形》口径2.16×1.88mの円形で、深さは0.29m。底径は2.06×1.94mである。

《重複》SKF62と重複する。SKF69はSKF62より古い。完掘時に南側の壁際にピットを２基検出。フラスコとの新旧関係や、ピット間の新旧関係は不明である。フラスコ検出時には見つからなかったため、フラスコに伴うものと思われる。４つのフラスコ状土坑の新旧関係は、（旧）SKF69→SKF62→SKF68→SKF67（新）である。

《覆土》掘りすぎで上部を失っているが、残存する覆土は２層に分層された。人為堆積と考えた。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状となっている。北側の壁だけが掘り過ぎから免れ、オーバーハングしていたため、フラスコ状土坑と判断した。

《柱穴》直径がそれぞれ0.3mと0.28mで、床面からの深さは0.26mと0.19mとなっている。

《出土遺物》（第18図）縄文土器片１点、石匙１点、剥片。第18図７は縦型の石匙でつまみの軸線に平行に刃部を作っている。

⑯ＳＫＦ77（第13図、図版４）

《位置と確認》LS46グリッド。Ｖ層で確認。

《規模と平面形》SKF39とほぼ重なり、かつSX81とも重なっているため、正確な規模は不明である。断面図では、直径が1.2m、深さが1.15mとなっている。

《重複》SKF39とSX81を切ることから、SKF77はSKF39とSX81より新しい。しかし、SKF39とSX81の新旧は不明。

《覆土》２層に分層した。人為堆積と思われる。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状を呈する。

《出土遺物》なし

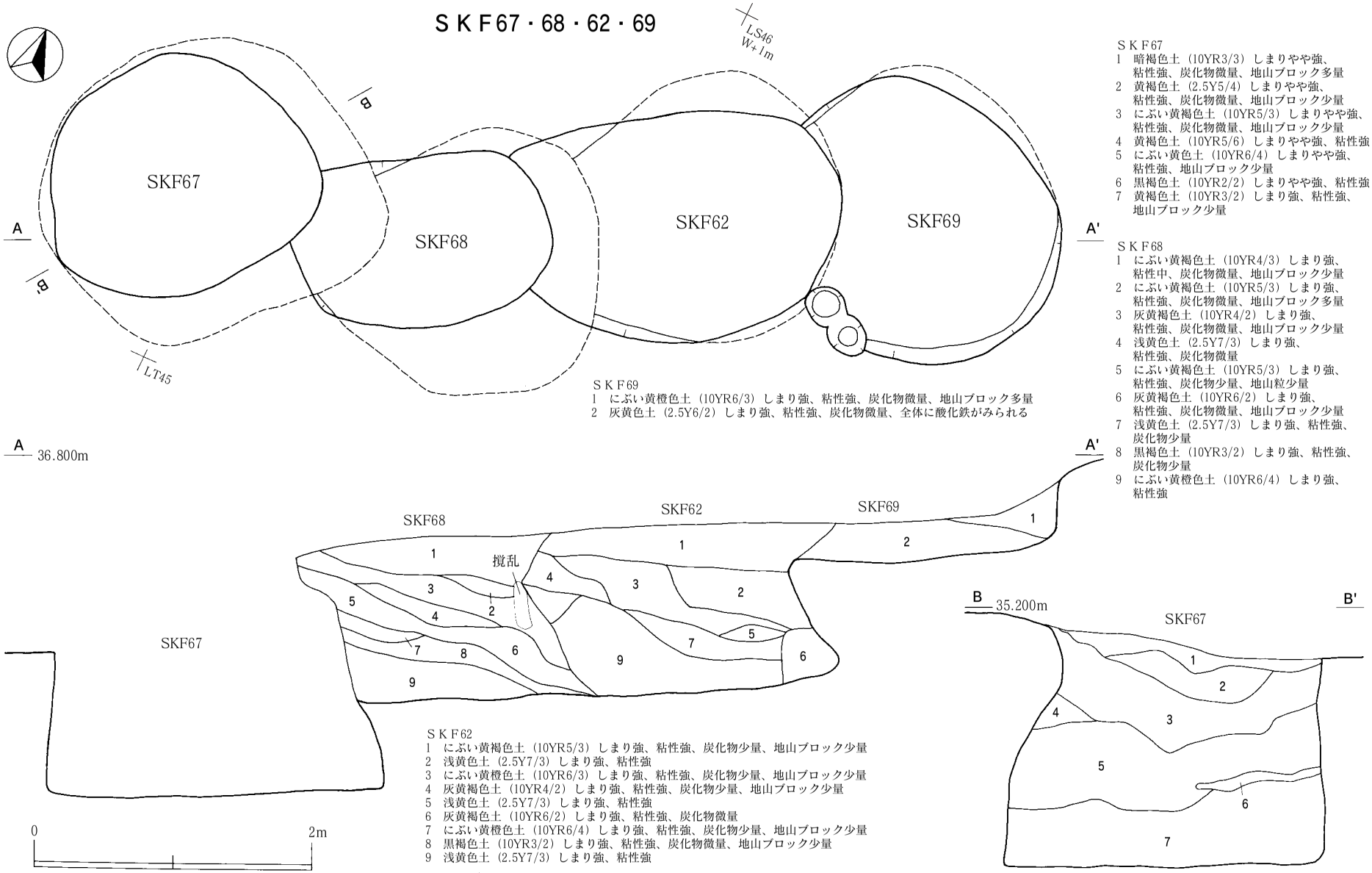
⑰ＳＫＦ82（第13図）

《位置と確認》LS46グリッド。Ｖ層。SKF39・77を掘り進めたところ、西側に拡張できたため、結果的に別のフラスコであることがわかった。

《規模と平面形》口径2.08m、深さ1.22mで、平面形は楕円形。

《重複》SKF77と重複する。SKF82が新しい。

《覆土》SKF82にかかる断面を記録しなかったため詳しい覆土は不明であるが、人為堆積であることは確認できた。



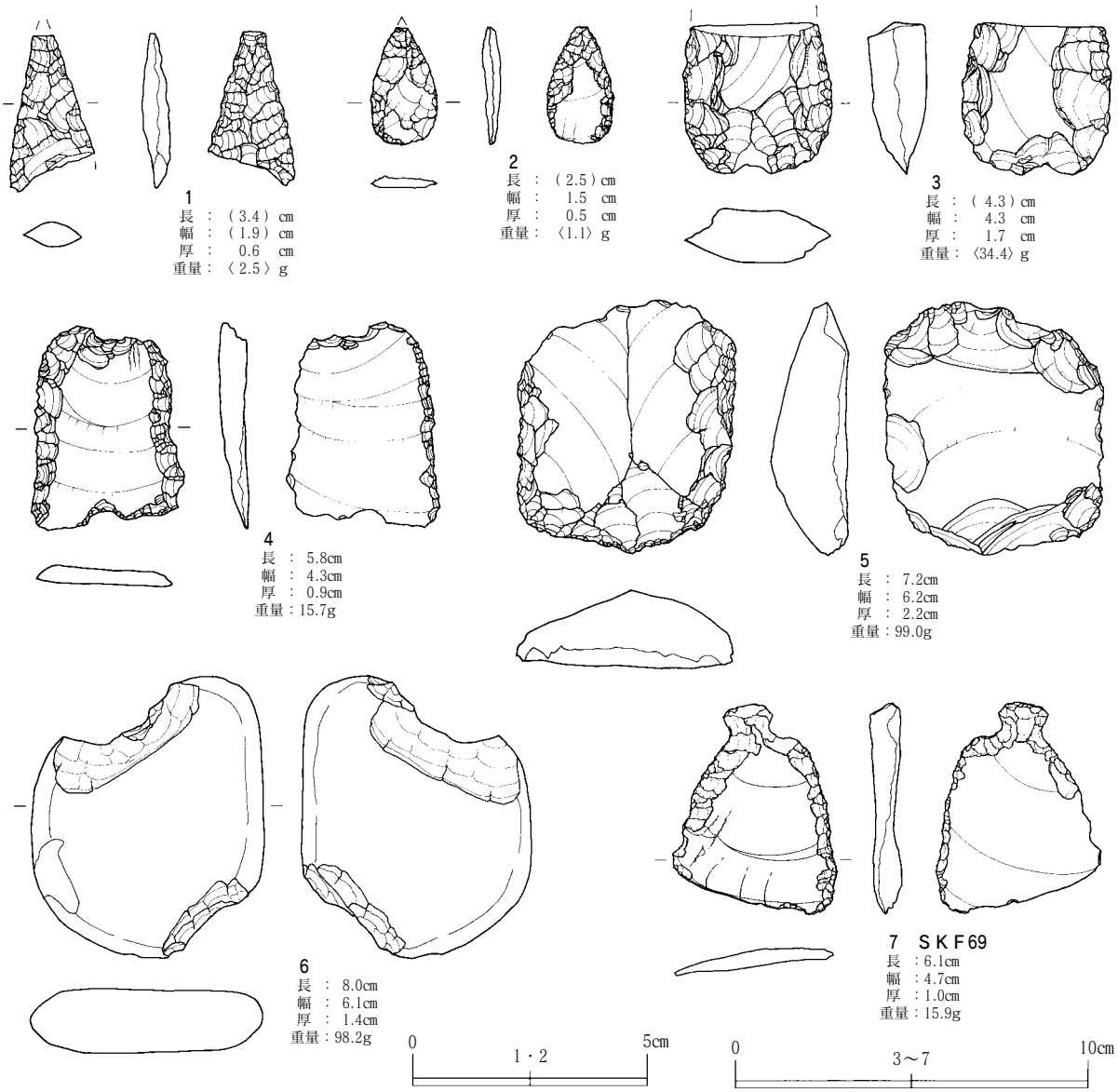
ＳＫＦ67
1　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック多量
2　黄褐色土（2.5Y5/4）しまりやや強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
3　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりやや強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
4　黄褐色土（10YR5/6）しまりやや強、粘性強
5　にぶい黄色土（10YR6/4）しまりやや強、粘性強、地山ブロック少量
6　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強、粘性強
7　黄褐色土（10YR3/2）しまり強、粘性強、地山ブロック少量

ＳＫＦ68
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強、粘性中、炭化物微量、地山ブロック少量
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック多量
3　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
4　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強、炭化物微量
5　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山粒少量
6　灰黄褐色土（10YR6/2）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
7　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強、炭化物少量
8　黒褐色土（10YR3/2）しまり強、粘性強、炭化物少量
9　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強

ＳＫＦ69
1　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック多量
2　灰黄色土（2.5Y6/2）しまり強、粘性強、炭化物微量、全体に酸化鉄がみられる

ＳＫＦ62
1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
2　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強
3　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
4　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
5　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強
6　灰黄褐色土（10YR6/2）しまり強、粘性強、炭化物微量
7　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量
8　黒褐色土（10YR3/2）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック少量
9　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強

第17図　ＳＫＦ62・67・68・69平面図・断面図



第18図　ＳＫＦ67・69出土遺物

《壁・床面》床面は東側に緩く傾斜し、壁は急に立ち上がる。SKF77よりも床が0.3ｍほど低い。
《出土遺物》なし

（２）焼土遺構

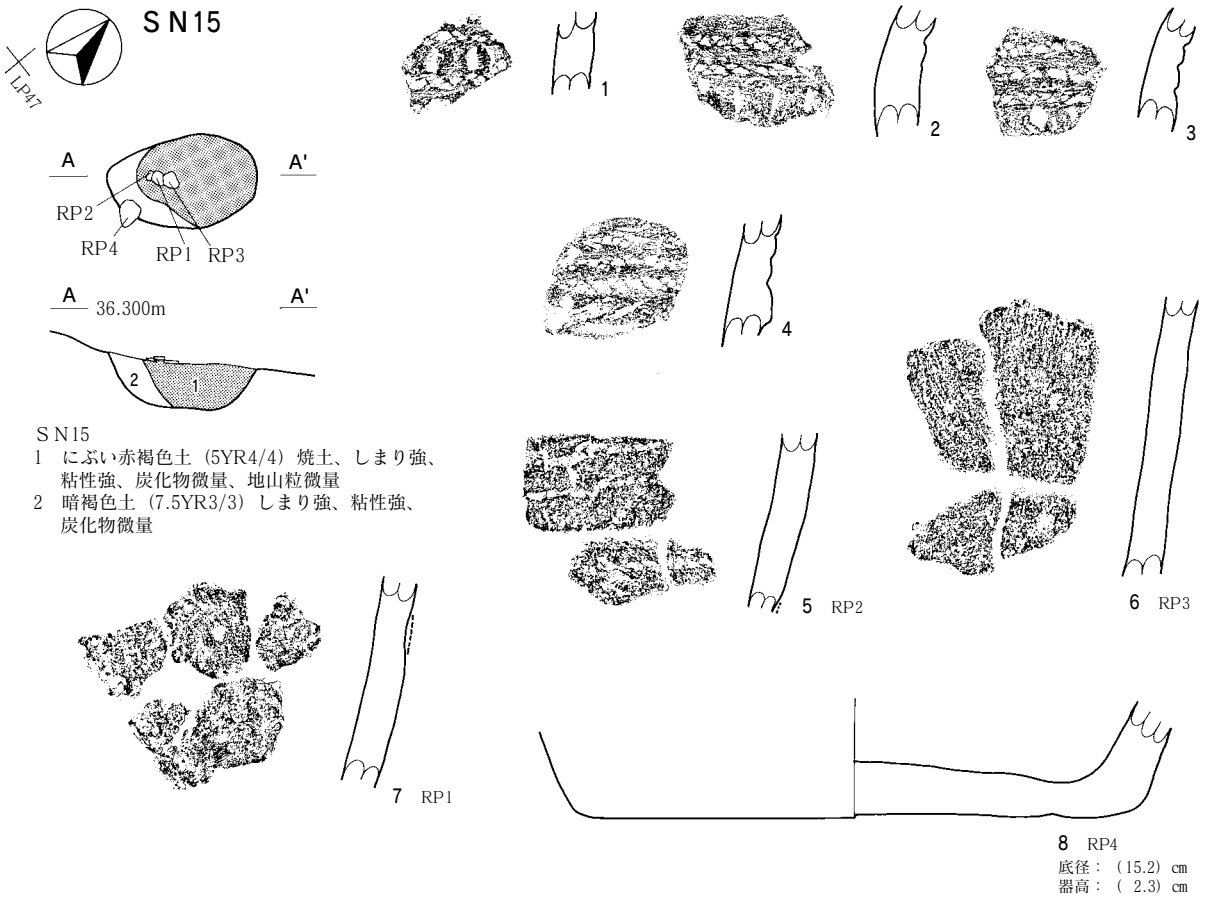
①ＳＮ15（第19図、図版22）
《位置と確認》LO47グリッド。Ⅲ層で赤色プランと縄文土器４点を検出した。
《規模と平面形》長軸（北東－南西）0.79m、短軸（北西－南東）0.5m、深さ0.24m。平面形は楕円形である。
《重複》SKF34・SKF36と重複する。SKF34･SKF36を堀り込むことからそれらより新しい遺構である。
《覆土》２層に分層した。炭化物混じりの焼土層と、焼土のない粘土層に分けられた。被熱のみと考えていたが、①焼土層が厚い、②炭化物や地山粒が混じる、③土器が覆土より見つかったことから、穴を掘ってそこに焼土を投げ込んだものと判断した。
《壁・底面》底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
《出土遺物》縄文土器片８点、剥片。第19図１～８は同一個体で押圧縄文による平行沈線の中に半裁竹管での刺突文が施文されている。

②ＳＮ43（第19図）
《位置と確認》LT46グリッド。Ⅴ層上面で確認。
《規模と平面形》長軸（東西）1.52m、短軸（南北）0.98m、確認面より0.12ｍの厚さまで赤変する。
《重複》なし
《出土遺物》なし

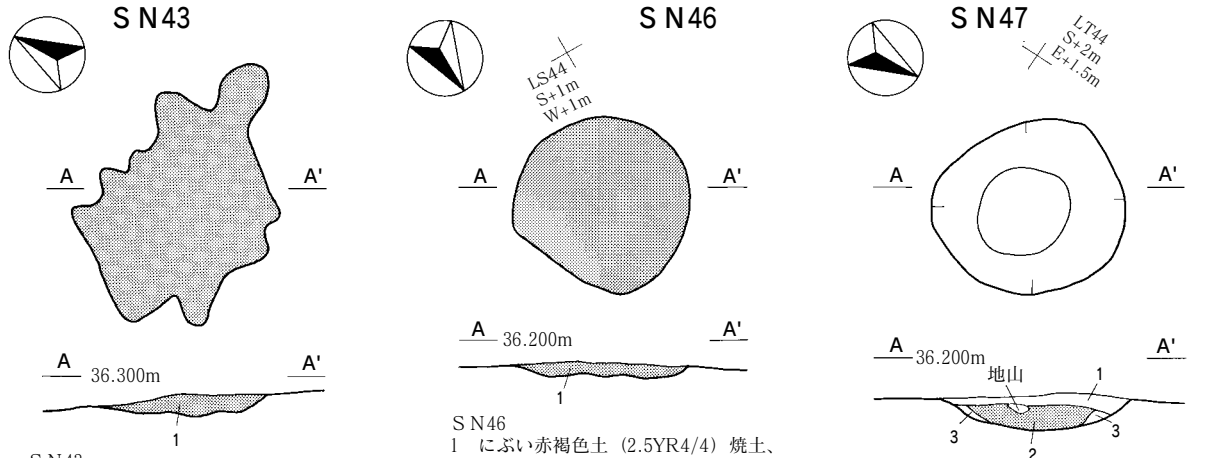
③ＳＮ46（第19図）
《位置と確認》LS43・44グリッド。Ⅴ層上面で確認。
《規模と平面形》長軸（東西）0.96m、短軸（南北）0.92m、確認面から0.07ｍの厚さまで赤変する。平面形は円形。
《重複》なし
《出土遺物》剥片１点。

④ＳＮ47（第19図、図版９）
《位置と確認》LS43グリッド。Ⅴ層上面で確認。
《規模と平面形》長軸（北西－南東）1.03m、短軸（北東－南西）0.9m、深さ0.19m。平面形は円形である。
《重複》なし
《覆土》３層に分層した。２層が地山ブロック混じりの焼土層で、穴に投げ込まれたものと考えた。
《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
《出土遺物》剥片２点。

⑤ＳＮ49（第19図）
《位置と確認》LN45グリッド。Ⅴ層上面で確認。
《規模と平面形》長軸（北西－南東）0.28m、短軸（北東－南西）0.24m、確認面から0.06ｍの深さまで赤変する。平面形は円形である。



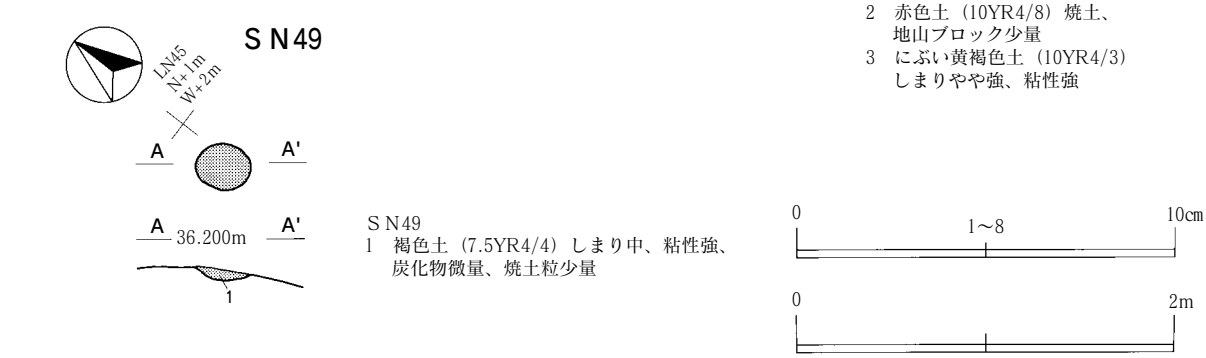
ＳＮ15
1　にぶい赤褐色土（5YR4/4）焼土、しまり強、粘性強、炭化物微量、地山粒微量
2　暗褐色土（7.5YR3/3）しまり強、粘性強、炭化物微量



ＳＮ43
1　赤褐色（5YR3/6）しまり中、粘性強、炭化物微量

ＳＮ46
1　にぶい赤褐色土（2.5YR4/4）焼土、しまりやや強、粘性中

ＳＮ47
1　褐色土（7.5YR4/4）しまりやや強、粘性やや強
2　赤色土（10YR4/8）焼土、地山ブロック少量
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりやや強、粘性強



ＳＮ49
1　褐色土（7.5YR4/4）しまり中、粘性強、炭化物微量、焼土粒少量

第19図　ＳＮ15・43・46・47・49平面図・断面図　ＳＮ15出土遺物

《重複》なし

《出土遺物》なし

⑥ＳＮ56（第20図）

《位置と確認》LT48グリッド。Ｖ層上面で確認。

《規模と平面形》長軸（北東－南西）1.75m、短軸（北西－南東）1.02m、確認面から0.07ｍの深さまで赤変する。平面形は不整形である。

《重複》なし

《出土遺物》なし

⑦ＳＮ57（第20図）

《位置と確認》LT47・48グリッド。Ｖ層上面で確認。

《規模と平面形》長軸（東西）1.59m、短軸（南北）1.2m、確認面から0.1ｍの深さまで赤変する。平面形は不整形である。

《重複》なし

《出土遺物》なし

⑧ＳＮ59（第20図）

《位置と確認》LS47グリッド。Ｖ層上面で確認。

《規模と平面形》長軸（南北）0.8m、短軸（東西）0.58m、確認面から0.09ｍの深さまで赤変する。

《重複》なし

《出土遺物》なし

⑨ＳＮ64（第20図）

《位置と確認》LT49グリッド。Ｖ層上面で確認。

《規模と平面形》長軸（南北）1.32m、短軸（東西）0.9m、確認面から0.09ｍの深さまで赤変する。平面形は楕円形である。

《重複》なし

《出土遺物》なし

⑩ＳＮ66（第20図）

《位置と確認》LS46グリッド。SKF61の断面で確認した。

《規模と平面形》長軸（北東－南西）0.81m、短軸は不明。

《重複》SX80と重複するが、SX80より古い。

《覆土》４層に分層した。１～３層は窪みへの自然堆積で、４層は焼土粒を含み被熱を受けた層である。

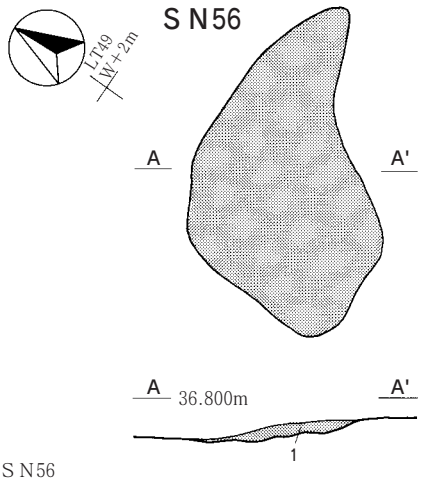
《壁・底面》底面は丸く窪み、壁は緩やかに立ち上がる。床面より0.04～0.08mほどの深さで被熱を受け赤変している。

《出土遺物》なし

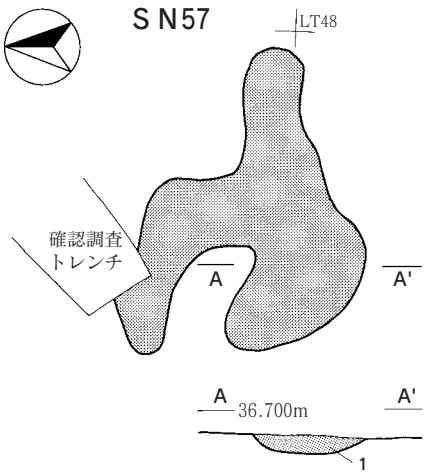
⑪ＳＮ74（第20図）

《位置と確認》LT48・49グリッド。Ｖ層上面で確認した。

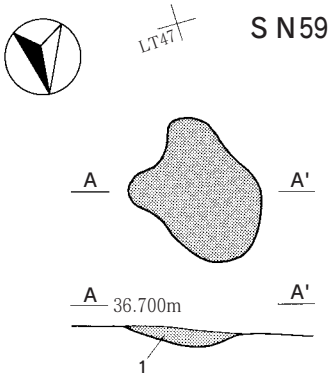
《規模と平面形》長軸（北東－南西）1.32m、短軸（北西－南東）0.95m、確認面より0.12ｍの深さまで赤変する。平面形は楕円形である。



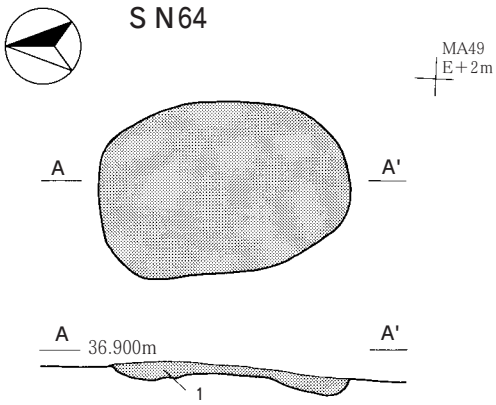
S N56
1　黒褐色土（7.5YR3/2）しまり中、粘性中、炭化物微量



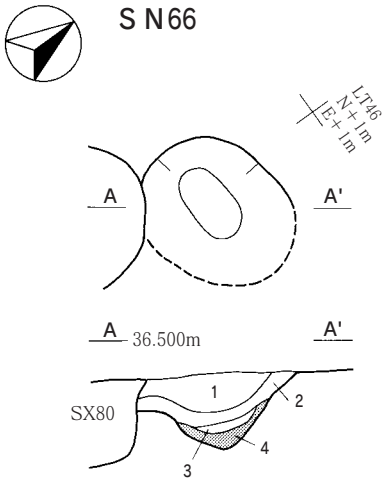
S N57
1　暗赤褐色土（5YR3/6）しまり中、粘性中、炭化物微量



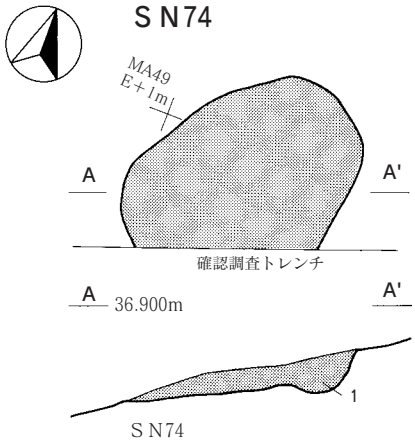
S N59
1　暗赤褐色土（5YR3/6）しまり中、粘性強、炭化物微量



S N64
1　明赤褐色土（2.5YR5/6）焼土



S N66
1　褐色土（10YR4/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山ブロック微量
2　黒褐色土（10YR3/2）しまり強、粘性強、炭化物多量、褐色土少量
3　褐色土（7.5YR4/4）しまり強、粘性強
4　黒色土（7.5YR2/1）しまり強、粘性強、焼土粒微量含む



S N74
1　明赤褐色土（2.5YR5/6）焼土

第20図　S N56・57・59・64・66・74平面図・断面図

《重複》なし
《出土遺物》なし

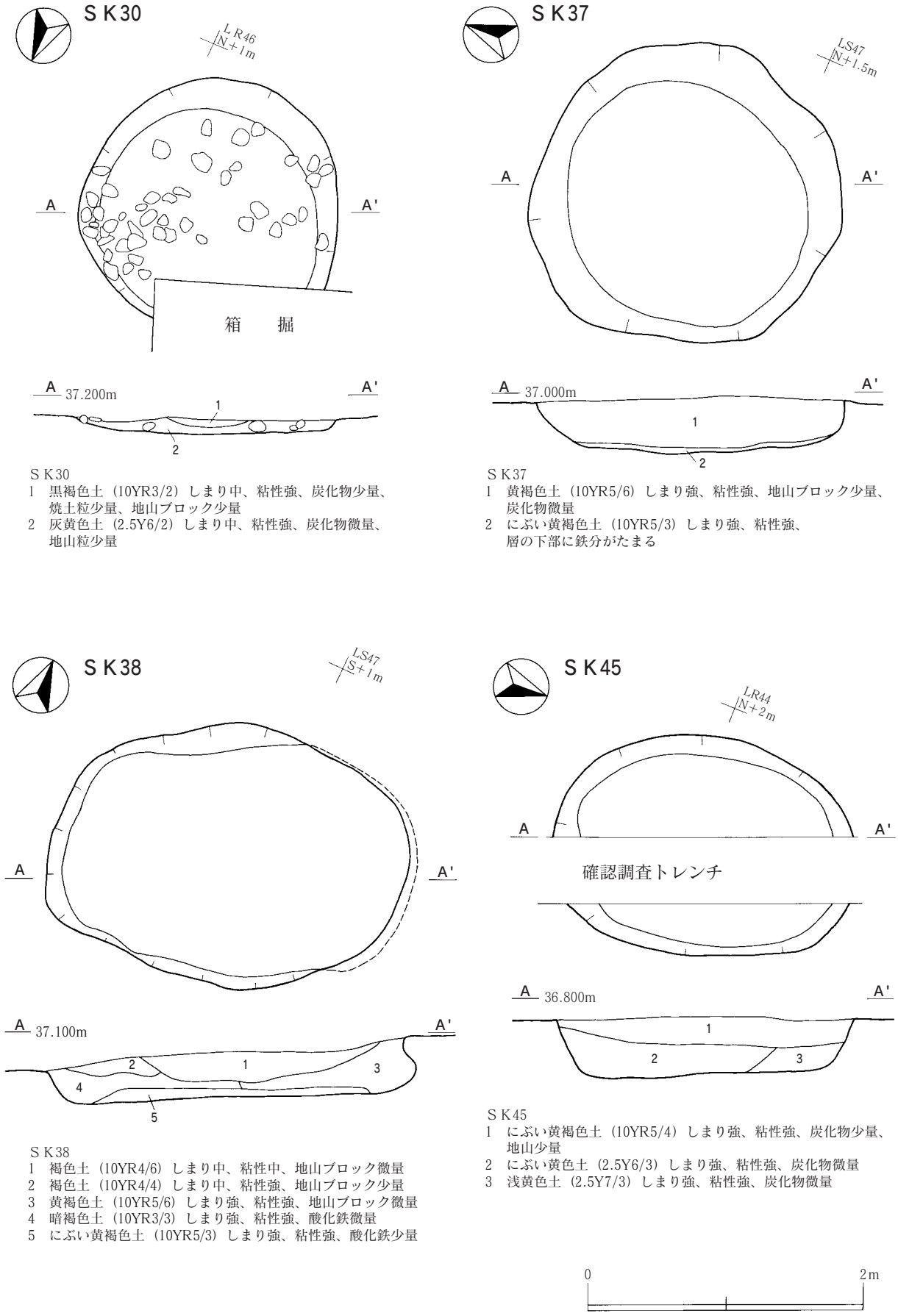
（３）土坑

①ＳＫ30（第21図、図版７）
《位置と確認》LQ46、LR46グリッド。Ｖ層上面で確認。拳大の礫および炭化物を含む円形プランを検出した。
《規模と平面形》直径1.88m、深さは0.12m。平面形は円形である。焼けた礫がまとまって見つかる。
《重複》なし
《覆土》２層に分層した。１層には焼土粒や炭化物のほか、焼けたクルミのような植物遺体が含まれていた。２層は地山に近似した粘土層で、底面から出土した礫はすべてこの層に含まれていた。
《壁・底面》底面は平坦、断面形は浅い皿状。礫のほとんどが被熱の痕跡を残していたのに対し、底面には焼けた痕跡が見られなかった。集石炉の可能性も考えられるが、焼けて使わなくなった石を捨てたとも考えられる。
《出土遺物》縄文土器片２点。剥片２点。

②ＳＫ37（第21図、図版８）
《位置と確認》LR46・47、LS46・47グリッド。Ｖ層上面で確認。
《規模と平面形》長軸（北西－南東）2.25m、短軸（北東－南西）2.15m、深さ0.4m。平面形は円形である。
《重複》なし
《覆土》２層に分層した。１層は人為堆積と思われる。
《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
《出土遺物》なし

③ＳＫ38（第21図、図版８）
《位置と確認》LR46、LS46グリッド。Ｖ層上面で確認。
《規模と平面形》長軸（北東－南西）2.63m、短軸（北西－南東）1.91m、深さ0.36m。平面形は楕円形である。
《重複》なし
《覆土》５層に分層した。地山ブロックが混入しており、人為的堆積の可能性が高いが、はっきりしない。
《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は一部フラスコ状になっているが、それ以外は緩やかに立ち上がる。
《出土遺物》縄文土器片２点、剥片１点。

④ＳＫ42（第14図、図版８）
《位置と確認》LR45・46グリッド。Ｖ層で確認したが、はじめは断面でも確認できないほどの難しい覆土のため掘りすぎてしまった。
《規模と平面形》長軸（南北）2.47m、短軸（東西）2.02m、深さ0.27m。平面形は円形である。
《重複》SKF40と重複する。SK42がSKF40より古い。
《覆土》４層に分層した。３・４層に拳大の自然礫が多量に混入していた。
《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。



ＳＫ30
1　黒褐色土（10YR3/2）しまり中、粘性強、炭化物少量、焼土粒少量、地山ブロック少量
2　灰黄色土（2.5Y6/2）しまり中、粘性強、炭化物微量、地山粒少量

ＳＫ37
1　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、粘性強、地山ブロック少量、炭化物微量
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、層の下部に鉄分がたまる

ＳＫ38
1　褐色土（10YR4/6）しまり中、粘性中、地山ブロック微量
2　褐色土（10YR4/4）しまり中、粘性強、地山ブロック少量
3　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、粘性強、地山ブロック微量
4　暗褐色土（10YR3/3）しまり強、粘性強、酸化鉄微量
5　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、酸化鉄少量

ＳＫ45
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強、炭化物少量、地山少量
2　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまり強、粘性強、炭化物微量
3　浅黄色土（2.5Y7/3）しまり強、粘性強、炭化物微量

第21図　ＳＫ30・37・38・45平面図・断面図

《出土遺物》剥片２点。

⑤ＳＫ45（第21図）

《位置と確認》LQ44グリッド。Ⅴ層上面で確認。確認調査の１トレンチにかかっていたが、覆土と地山が似ていて最初は遺構と確認できなかった。

《規模と平面形》長軸（南北）2.16m、短軸（東西）1.58m、深さは0.41m。平面形は楕円形である。

《重複》なし

《覆土》３層に分層した。人為堆積と判断した。

《壁・底面》底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》なし

⑥ＳＫ48（第22図）

《位置と確認》LP43、LQ43グリッド。Ⅳ層で確認。

《規模と平面形》長軸（東西）1.88m、短軸（南北）1.72mの楕円形、深さは0.14mである。南側が調査区外に少し伸びている。

《重複》なし。

《覆土》３層に分層した。自然堆積と判断した。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》縄文土器片１点。

⑦ＳＫ53（第22図）

《位置と確認》LP43・44グリッド。Ⅳ層で確認。

《規模と平面形》調査区南側の境界にかかるため、半分ほどしか形状は分からない。掘った部分では、径1.13mあり、深さは0.21mだった。おそらく楕円形の土坑であろう。

《重複》なし

《覆土》炭化物混じりの単層。人為堆積層と判断した。

《壁・底面》底面は中央がやや窪み、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》縄文土器片１点。

⑧ＳＫ54（第22図）

《位置と確認》LP45グリッド。Ⅴ層で確認。

《規模と平面形》長軸（南北）1.05m、短軸（東西）1.03mの円形で、深さ0.41mである。《重複》な

《覆土》２層に分層した。２層に拳大の自然礫が多量に埋まっていたため、人為的に埋めたものと判断した。

《壁・底面》底面は中央がやや窪み、壁は急に立ち上がっている。

《出土遺物》なし

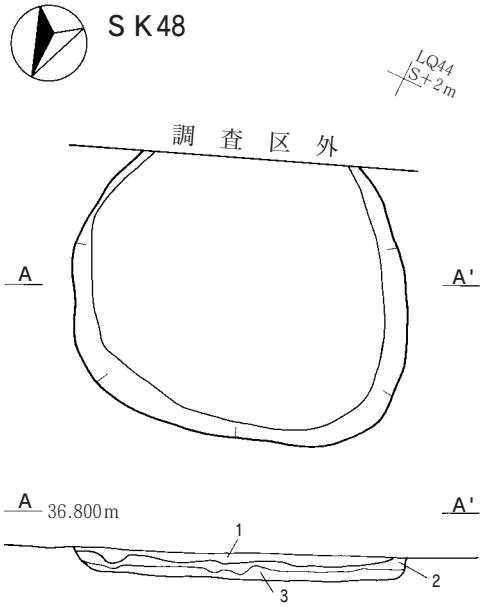
⑨ＳＫ76（第22図）

《位置と確認》MA50グリッド。Ⅴ層上面で確認。

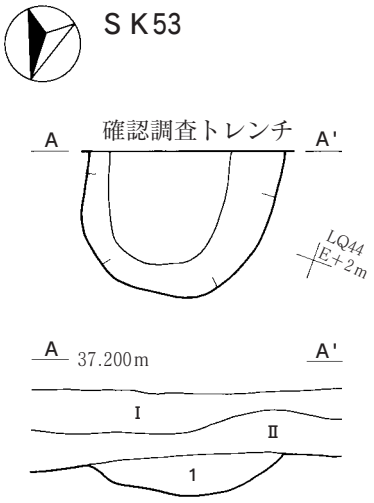
《規模と平面形》長軸（南北）1.28m、短軸（東西）１m、深さ0.64m。平面形は不整円形。

《重複》なし

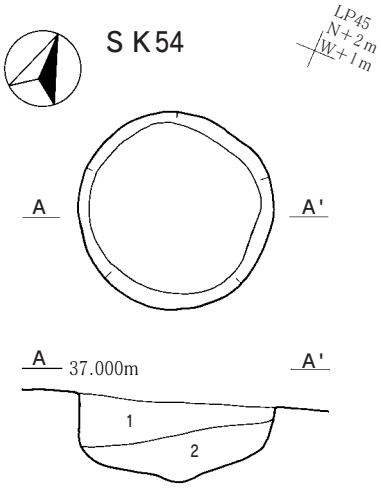
《覆土》３層に分層した。人為堆積と判断した。



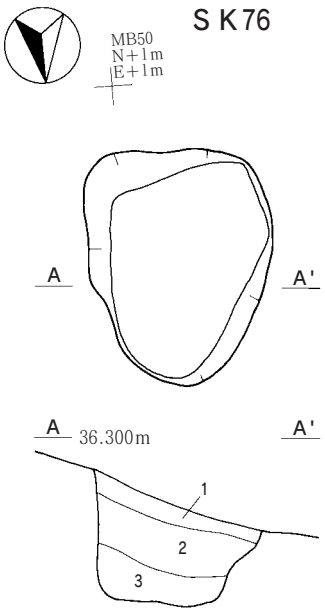
ＳＫ48
1　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強、粘性強、
　　地山ブロック少量
2　明褐色土（7.5YR5/8）しまり強、粘性強、
　　黒褐色土ブロック少量
3　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、
　　黒褐色土ブロック少量



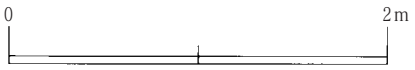
ＳＫ53
1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、
　　炭化物微量、明褐色土粒微量



ＳＫ54
1　明黄褐色土（10YR6/6）しまり強、粘性やや強、炭化物少量
2　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性強、拳大の礫多量



ＳＫ76
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり中、粘性強、
　　地山ブロック少量
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
　　しまりやや強、粘性強、炭化物微量
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりやや強、
　　粘性強、炭化物少量、地山ブロック少量



第22図　ＳＫ48・53・54・76平面図・断面図

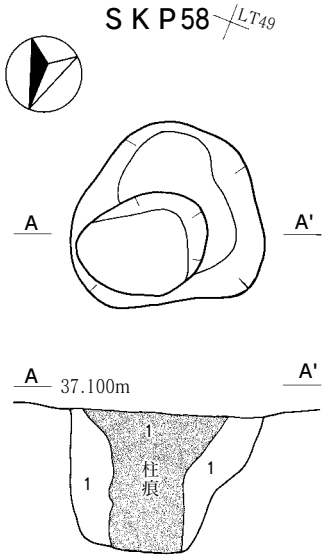
《壁・底面》底面には凹凸があり、壁は急に立ち上がっている。
《出土遺物》剥片１点。

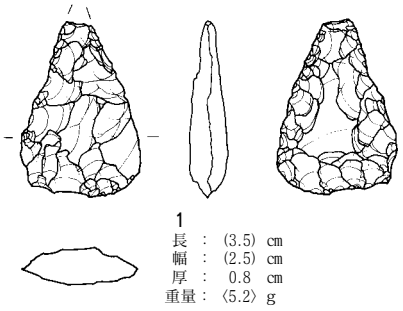
（４）性格不明遺構

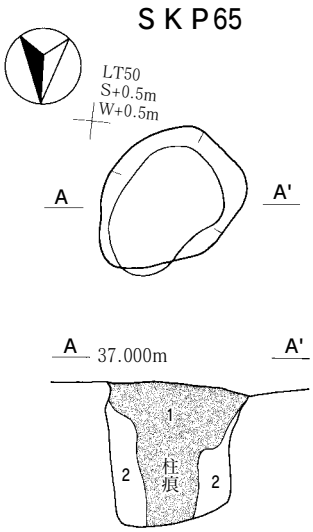
①ＳＸ80（第16図）
《位置と確認》LS45グリッド。Ｖ層上面で確認。
《規模と平面形》平面的に遺構を把握できなかったため、遺構の全容は不明だが、楕円形であったと考えられる。また断面図から、少なくとも長軸は１m以上になると思われる。
《重複》SN66と重複する。新旧関係を整理すると、SKF61→SN66→SX80の順で作られている。
《覆土》単層で人為的に埋め戻した土と思われる。
《壁・底面》把握できた部分では、底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。
《出土遺物》なし
②ＳＸ81（第13図）
《位置と確認》LS46グリッド。平面では検出できず、SKF39・77にかかる断面で確認した。
《規模と平面形》SKF77に堀込まれ、大半を失っているため規模は不明。
《重複》SKF77と重複する。SKF77に堀り込まれていることからSKF77より古い。
《覆土》３層に分層した。
《壁・底面》底面は失われており不明。壁は緩やかに立ち上がっており、壁の形状からある程度の深さをもつ遺構であったと考えられる。周辺の遺構からフラスコ状土坑の可能性がある。

（５）柱穴列

①ＳＫＰ71・ＳＫＰ65・ＳＫＰ58・ＳＫＰ70（第23・24図、図版10・11・24、第３表）
　調査区南東のゆるい傾斜地に５基の柱穴様ピットを検出した。遺物はSKP58・77から出土した。調査区北側の４基は並ぶことから柱穴列とし、それ以外は表にまとめた。
《位置と確認》LS48～LT50グリッド。Ｖ層上面で確認。
《規模と平面形》全長8.54mで、北西－南東の方向に４基の柱穴が並び、方向は尾根が延びる向きとほぼ一致する。柱穴の間隔は、北から1.52m、2.12m、2.3mである。直径は0.64m、0.86m、1.08m、0.56m、深さは0.72m、0.76m、0.74m、0.3mで、SKP70の規模が目立って小さく、他は同規模である。柱穴の形状は略円形と楕円形で、SKP58は内部に段差がついたようになっている。柱抜き取り痕と判断した。
《覆土》４基とも覆土が近似しており、同じ時期に掘られたものと思われる。SKP58とSKP65には柱痕も認められた。
《遺物》SKP58から縄文土器片、石鏃1点、剥片石器が出土。SKP71からは縄文土器片、剥片石器が出土した。第23図１は、石鏃で先端部が欠損している。無茎で基部が平らな石鏃である。
《所見》SKP58は径0.3mくらい、SKP65は径0.25mくらいの丸太材が据えられていたものと思われる。穴の深さから、高さも結構あったものと判断される。周囲をよく観察し、掘立柱建物跡とならないか確認したが、他に柱跡は確認できなかった。

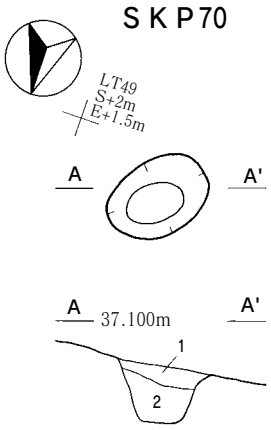


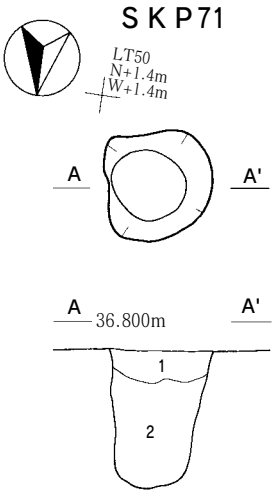


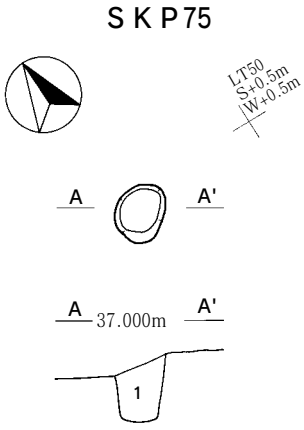


ＳＫＰ58
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり中、粘性強、黒褐色土がブロック状に少量、炭化物少量
2　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強、粘性強、炭化物微量

ＳＫＰ65
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり中、粘性強、炭化物少量、地山粒少量
2　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強、粘性強、炭化物微量



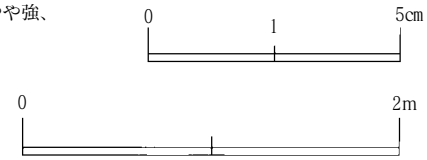




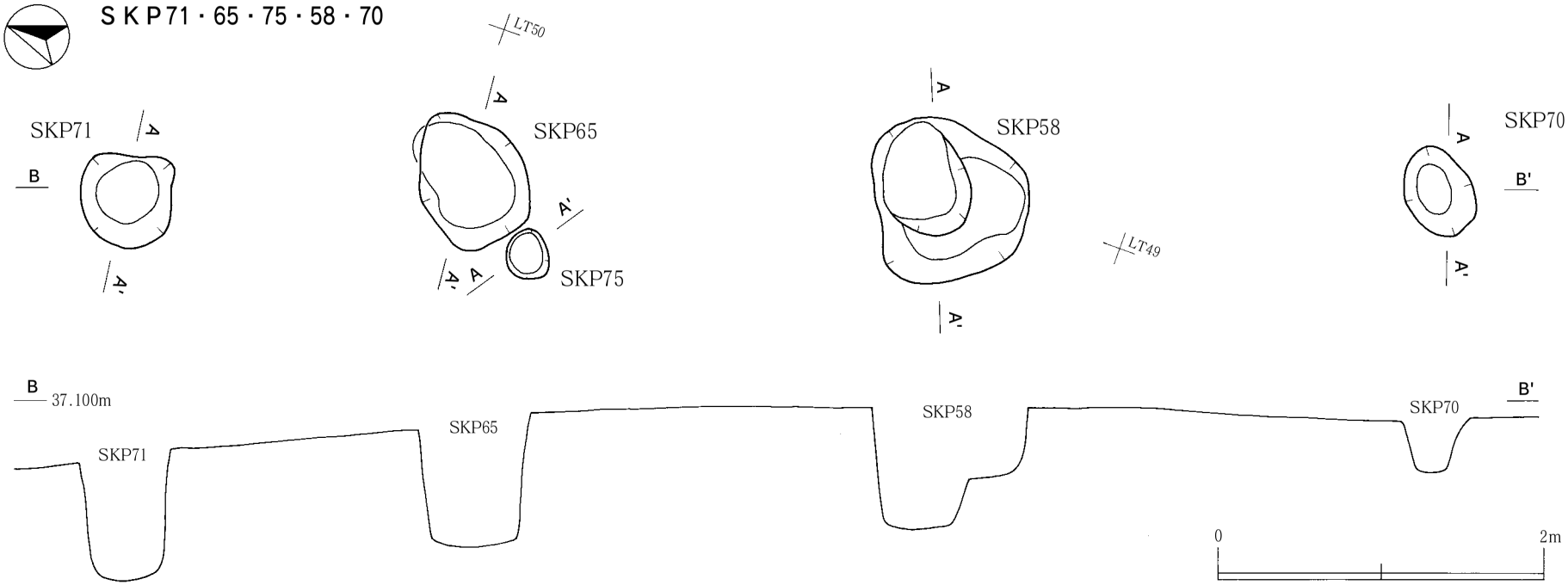
ＳＫＰ70
1　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強、粘性やや強
2　明黄褐色土（10YR6/6）しまり強、粘性やや強、炭化物少量、黒褐色土がブロック状に多量

ＳＫＰ71
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強、粘性やや強、地山ブロック少量
2　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強、粘性強、炭化物少量、黒褐色土が斑状に混入

ＳＫＰ75
1　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量



第23図　ＳＫＰ58・65・70・71・75平面図・断面図　ＳＫＰ58出土遺物



第24図　ＳＫＰ58・65・70・71・75平面図・エレベーション図

第3表　柱穴様ピット計測一覧

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ(cm)			底面の標高(m)
			長径	短径	深さ	
18	LN.LO45	円形	34	32	25	35.98
19	LN46	円形	27	25	44	35.57
22	LN45.46	楕円形	24	18	13	35.66
26	LQ45	楕円形	31	18	12	36.96
29	LN45	円形	24	22	32	35.52
33	LQ43	楕円形	42	30	18	36.08
51	LN45	円形	19	18	15	35.74
58	LS49	楕円形	108	92	74	36.21
65	LT49	楕円形	86	66	76	36.11
70	LS48	楕円形	56	40	32	36.56
71	LT50	円形	64	56	73	35.92
75	LT49	円形	32	27	34	36.56

第３節　縄文時代中期の遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

①ＳＩ03（第25図、図版12）

《位置と確認》LP44・LQ44グリッド。Ⅲ層で確認。

《規模と平面形》北西部分を確認調査の２トレンチで切られているため推定すると、長軸（北西－南東）3.8m、短軸（北東－南西）1.7mの円形で、深さ0.2mである。

《重複》なし

《覆土》２層に分層した。

《壁・床面》床面・壁ともはっきりせず、ベルト断面での観察から推定した。

《柱穴》４基検出した。直径は0.22～0.32m、深さは0.24～0.3mである。いずれもプランはほとんど確認できず、わずかな土色の違いと締まりの強弱で柱穴を探したため明確に柱穴とは言い難い。

《炉》土器埋設部と燃焼部をもつ複式炉である。規模は、土器埋設部と燃焼部を合わせ長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.26mとなっている。燃焼部は礫で囲まれ、礫は馬蹄形に並ぶ。前庭部に相当する部分は検出されなかった。炉の軸線方向Ｓ－88°－Ｗ

〈土器埋設部〉深鉢形土器が２個ほぼ正位に埋設されており、２個とも底部が無く、口縁部もかなり欠損していた。床面からの掘り込みの深さは18cmである。土器埋設部が２基あるが、当初１基だけで、土器埋設部を残して、礫を動かし、新たな複式炉を構築したものと推定した。

〈燃焼部〉使用されている礫は赤く焼けているところもあるが、全体的に被熱範囲が少ない。埋設土器周辺の土にも焼けた痕跡が認められたが、多量の焼土は検出されなかった。燃焼部の中央部で焼土塊が少量検出された。

《出土遺物》炉内土器が２個体出土したが、２個体とも底を欠く。被熱によりかなりひびが広がり、もろい状態で、慎重に取り上げたが多くが小破片となり、洗浄時にも細片化して接合できなかった。時代を特定できる決め手はないが、周囲の検出状況から縄文時代中期の土器と思われる。

②ＳＩ04（第26・27図、図版13・20・23・25）

《位置と確認》LS46・47、LT46・47グリッド。Ⅲ層上面で確認。

《規模と平面形》長軸（北西－南東）3.86m、短軸（北東－南西）3.63mの円形で、深さは0.18m。

《重複》SX11と重複し、SI04が新しい。

《覆土》２層に分層した。

《壁・床面》床面は地形と同じように西に緩く傾く。壁は緩やかに立ち上がる。

《柱穴》４基検出した。直径は0.18～0.26mで、深さは0.16～0.24mである。

《炉》土器埋設部と燃焼部をもつ複式炉である。規模は、長軸1.7m、短軸0.78m、深さ0.26mとなっている。埋設土器と燃焼部がそれぞれ礫で囲まれ、礫は長楕円形に並ぶ。前庭部に相当する部分は検出されなかった。炉の軸線方向　Ｎ－６°－Ｅ

〈土器埋設部〉鉢形土器が正位に埋設されている。掘り込みの深さは床面より0.28mである。

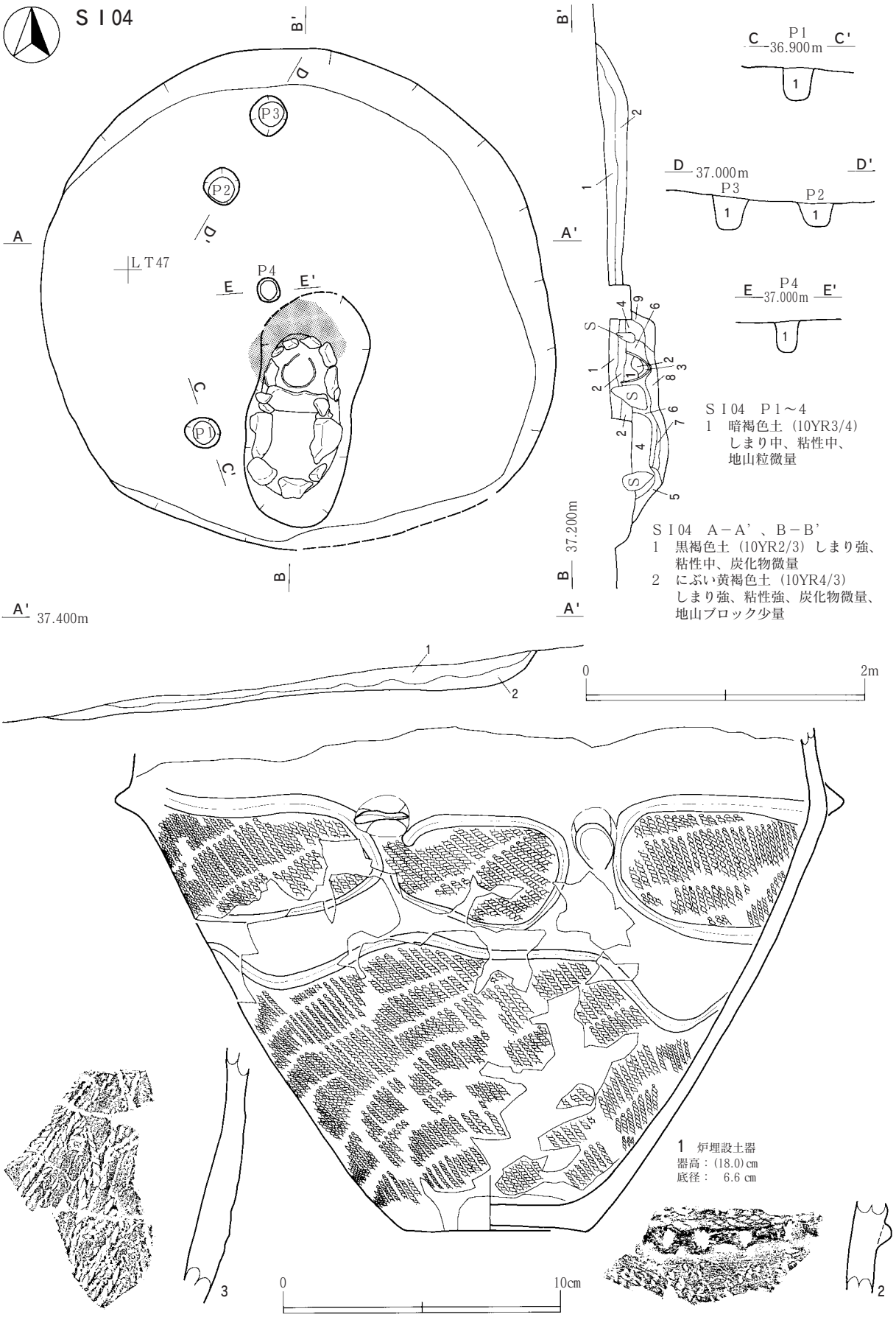
〈燃焼部〉長楕円形に20～25cmの礫が配置されている。使用されている礫は赤く焼けており、かなり

竪穴住居跡
ＳＩ03　Ａ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’

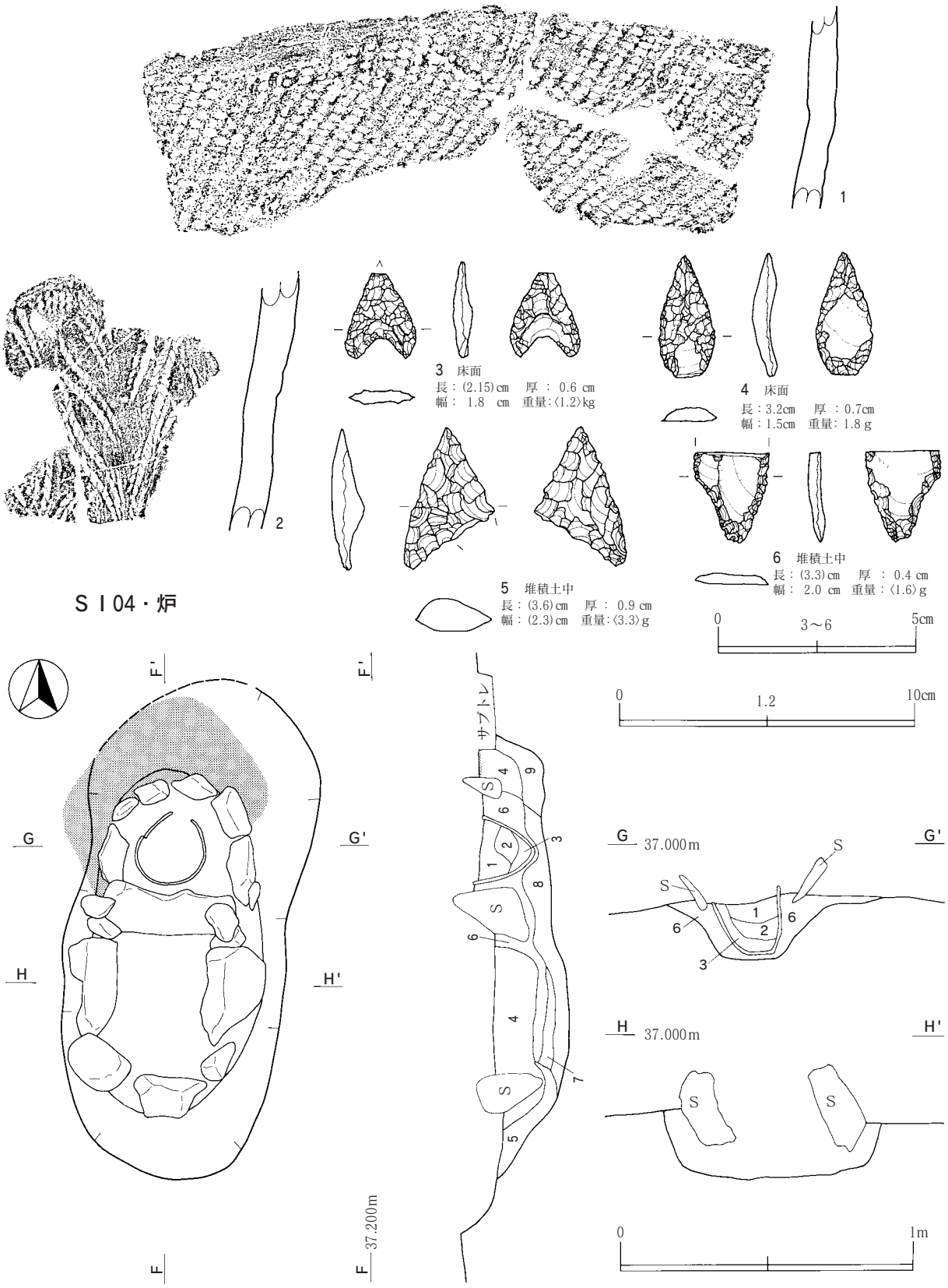
1　オリーブ褐色土（2.5Y4/3）しまり強、粘性強
2　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強
3　オリーブ褐色土（2.5Y4/4）しまり強、粘性強、地山ブロック少量（P3の注記）
4　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）しまり強、粘性強、径2～3㎜のオリーブ褐色土が少量
5　褐色土（10YR4/4）しまりやや強、粘性強、地山ブロック少量
6　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）しまり強、粘性強

ＳＩ03　炉
1　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強、粘性強、炭化物微量、地山粒多量
2　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強、粘性中、炭化物多量、地山粒少量、礫少量
3　にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまりやや強、粘性強、明褐色土粒少量
4　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強、粘性強、地山粒少量
5　浅黄色土（2.5Y7/3）しまりやや強、粘性強、黄褐色土ブロック多量
6　褐色土（10YR4/4）しまりやや強、粘性強、地山ブロック少量
7　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強、粘性強、炭化物少量、焼土粒微量
8　暗赤褐色土（2.5Y3/6）焼土
9　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強、粘性強
10　褐色土（10YR4/4）しまりやや強、粘性強、焼土粒微量
11　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強、粘性強、炭化物少量、焼土粒微量
12　黒色土（10YR2/1）しまりやや強、粘性やや強、炭化物多量、焼土粒少量
13　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強、粘性強
14　浅黄色土（2.5Y7/3）しまりやや強、粘性強、黄褐色土ブロック多量
15　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強、粘性強、地山粒20%
16　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強、粘性強、地山粒少量

第25図　ＳＩ03平面図・断面図　ＳＩ03炉跡平面図・断面図



第26図　ＳＩ04平面図・断面図・出土遺物



ＳＩ04　炉
1．暗褐色土（10YR3/4）しまり強、粘性強、炭化物微量、地山粒少量
2．黒褐色土（10YR3/2）しまり中、粘性中、粘土ブロック多量
3．黒褐色土（10YR2/3）しまり強、粘性中、炭化物少量
4．暗褐色土（10YR3/4）しまり中、粘性中、炭化物微量
5．褐色土（10YR4/4）しまり強、粘性強、
6．黒褐色土（10YR2/3）しまり中、粘性中、炭化物微量、地山粒微量
7．暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中、地山粒微量
8．暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中、炭化物微量、焼土少量
9．黒褐色土（10YR2/3）しまり中、粘性中、炭化物微量、地山粒微量

第27図　ＳＩ04炉跡平面図・断面図・出土遺物

被熱を受けている。しかし燃焼部床面に土が焼けた痕跡は確認出来なかった。

《出土遺物》埋設土器のほかに縄文土器片４点、石鏃３点、石匙１点、削器１点、剥片。第26図１の埋設土器は鉢形土器で、入り組み横Ｓ字状区画文が施文されている。区画内に縄文が横位回転施文されている。縄文中期末葉の大木10式土器に比定される。第26図２は口縁部付近の破片で指頭圧痕で飾られた隆帯が巡る。第26図３は胴部破片で木目状撚糸文が施文されている。第27図１は深鉢形土器の口縁に近い胴部でLR縄文が横位回転施文されている。第27図２も深鉢形土器の胴部で木目状撚糸文が押圧されている。第27図３は凹基無茎の石鏃である。第27図４は涙型の石鏃で、無茎平基族に分類される。27図５はハート型の石鏃で、基部が片方欠損している。凹基無茎鏃に分類される。第27図６は削器で両面に調整を加え刃部をつくっている。石鏃にしなかったのは刃部に若干摩滅が観察されたためである。

③ＳＩ05（第28図、図版14・21）

《位置と確認》LP46、LQ46グリッド。Ⅲ層で黒褐色の円形プランと、その中心に埋設土器を確認。

《規模と平面形》長軸（北西－南東）1.84m、短軸（北東－南西）1.59mの円形で、深さは0.12mである。

《重複》なし

《覆土》埋設土器の覆土も含めて３層に分けられた。土器の中は多量の炭化物のほか、地山粒も少量認められた。２層は土器埋設の掘形に相当すると思われる。

《壁・床面》床面は地形と同じように東に緩く傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。

《炉》埋設土器を挟むように２個の礫が置かれていた。礫はこの他には無く、この礫や周辺の土にも焼けた痕跡は無かった。竪穴住居跡の一部として精査したが明確な竪穴やピットが見つからず、また焼土も無かった。第28図１の埋設土器は縄文時代中期の深鉢形土器であると思われるが、被熱による破損が著しく図示したところまでしか復元できなかった。

《出土遺物》埋設土器１点のほか、土器片４点、石核１点、剥片石器１点が出土した。

④ＳＩ07（第28図、図版15・25）

《位置と確認》LQ48、LR48グリッド。Ⅲ層までの掘り下げで、炉の石囲部を確認。竪穴の円形プランは不明確であった。

《規模と平面形》重機の通行で北側を失っているが、現況で長軸（北東－南西）3.23m、短軸（北西－南東）2.45mの長楕円形で、確認面からの深さは0.05mである。

《重複》なし

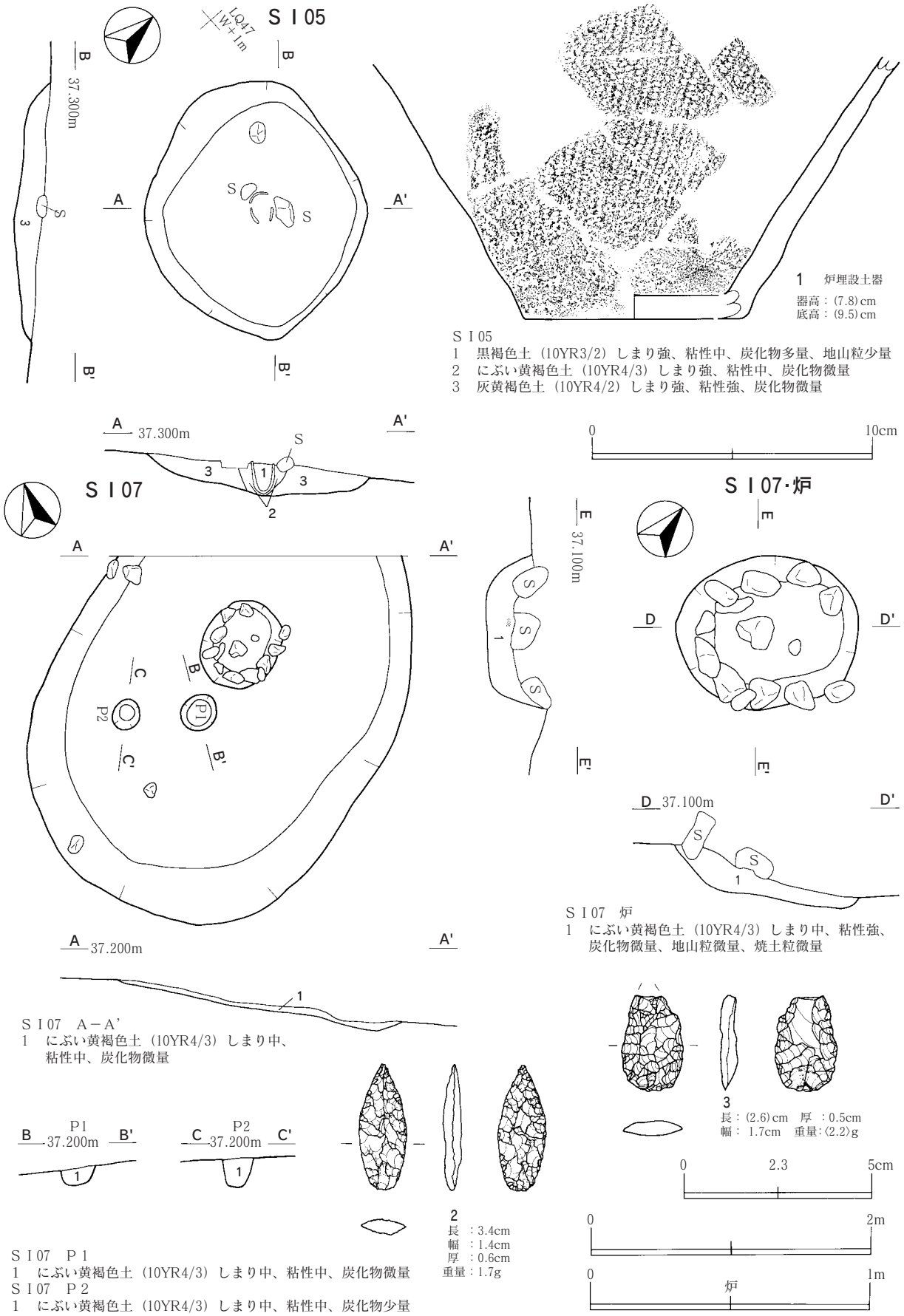
《覆土》炭化物混じりの単層。粗掘りで掘りすぎたため、あまり覆土が残らなかった。

《壁・床面》壁はわずかに立ち上がりが認められ、床面は地形と同様、東側に緩く傾斜している。石囲部周辺の床面が硬くしまっていた。

《柱穴》２基検出した。覆土は単層で炭化物が少量混じる。Ｐ１が直径0.27ｍで深さが0.14ｍ、Ｐ２が直径0.22ｍで深さが0.22ｍである。

《炉》炉の規模は長軸1.29m、短軸1.1m、深さ0.26m。径10㎝大の焼けた礫が馬蹄形に並び、中央にも動かされた礫が残る。礫を配置するための掘形も認められ、掘形の埋土には焼土が混入していた。床面からの掘込みの深さは0.25ｍである。複式炉と思われるが炉の軸線ははっきりしない。

《出土遺物》縄文土器片少量。小さな破片のため図化できなかった。石鏃は２点出土。第28図２は円基鏃で、長さ4.5㎝で基部が少し丸みを帯びている。第28図３は平基鏃で基部から3.5㎝のところで欠損し



第28図　ＳＩ05・ＳＩ07平面図・断面図　ＳＩ07炉跡平面図・断面図・出土遺物

ている。このほかに剥片２点が出土した。

⑤ＳＩ23（第29～32図、図版16・19・20・25）

《位置と確認》LT49・50、MA49・50グリッド。Ⅲ層上面で検出。

《規模と平面形》長軸（北東－南西）4.12m、短軸（北西－南東）3.88mの楕円形で、深さは0.14mである。

《重複》なし

《覆土》複式炉を除いた住居の覆土は、炭化物・焼土ブロックが混じる暗褐色土の単層であった。

《壁・床面》床面は西に緩く傾斜し、東側に残存する壁は緩やかに立ち上がる。東側の床面には炭化物や焼土ブロックが広がっていた。

《柱穴》かなり時間をかけて精査したが検出できなかった。

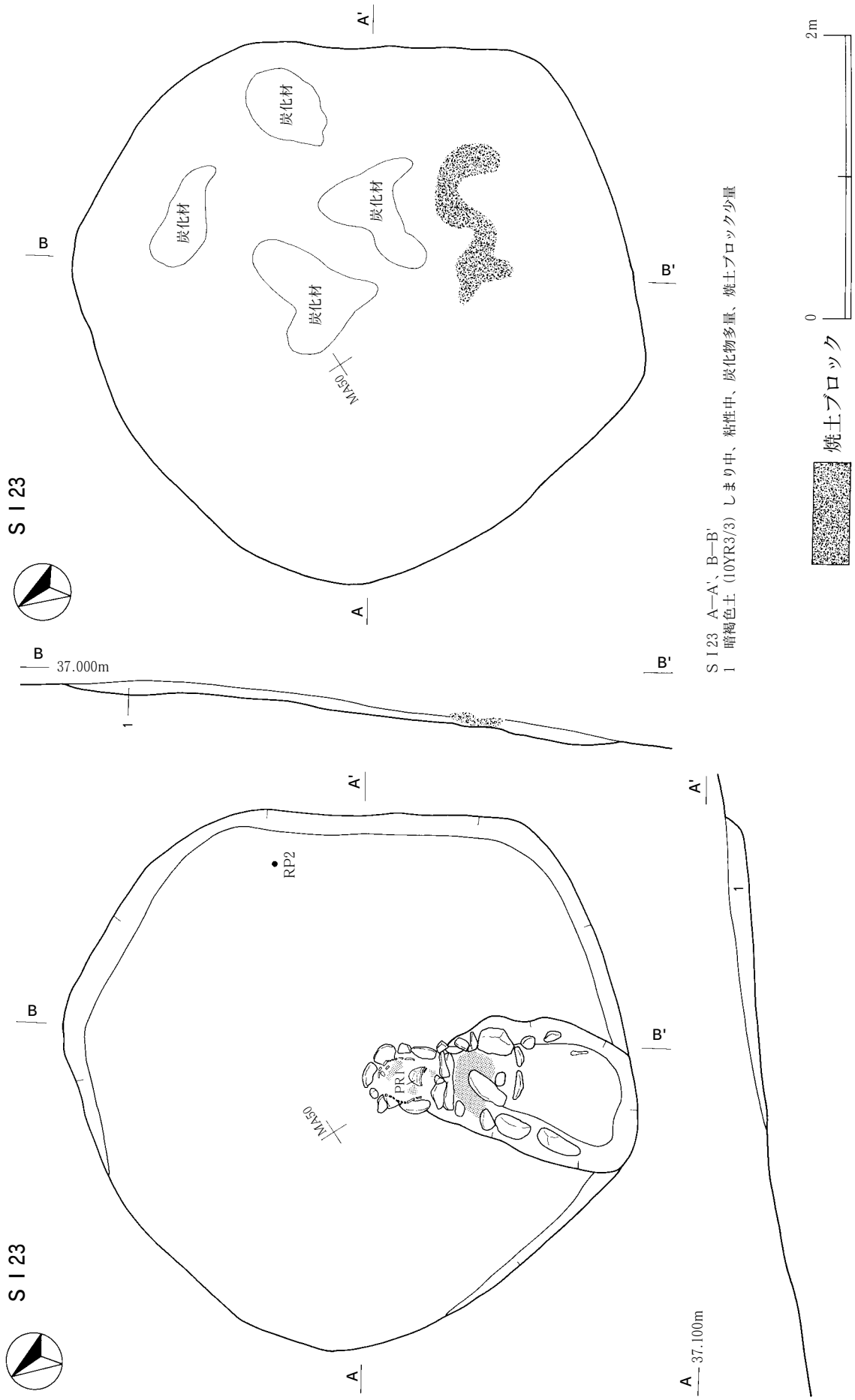
《炉》土器埋設部、燃焼部、前庭部で構成された複式炉である。規模は長軸1.98m、短軸0.98mで、住居の南西側に位置する。土器埋設部では、礫が埋設土器を囲むように置かれ、前庭部の外側にも撥型に広がっている。燃焼部には大きな焼土塊が堆積している他、炉の袖石と思われる石が置かれていた。前庭部は若干窪み、固くしまっていた。炉の軸線方向はN－35°－Eである。

〈土器埋設部〉埋設土器は南西方向にやや傾いて埋設されている。掘り込みの深さは床面より0.60mである。また埋設土器の中に小型の深鉢形土器が炭化物層の上にかぶさるように斜位に出土した。

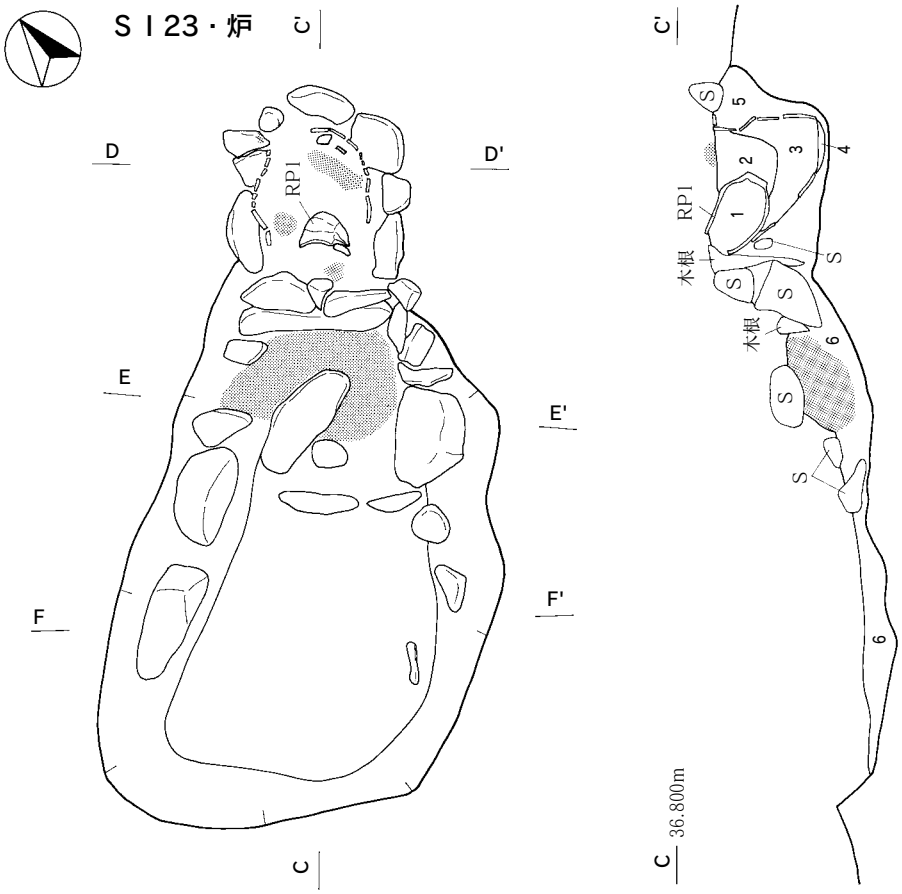
〈燃焼部〉馬蹄形に長さ20㎝～50㎝の礫が配置されている。炉の中央に置かれた長さ50㎝の礫は動かされたものと判断したが、その他の礫は原位置を保っていると思われる。配置されている礫は赤く焼けており、かなり被熱を受けている。しかし燃焼部床面に土が焼けた痕跡は確認出来なかった。礫を数回再利用していた可能性もある。

《出土遺物》（第31・32図）埋設土器１点、小型の深鉢形土器１点、縄文土器片30点、石皿１点、剥片石器が出土した。

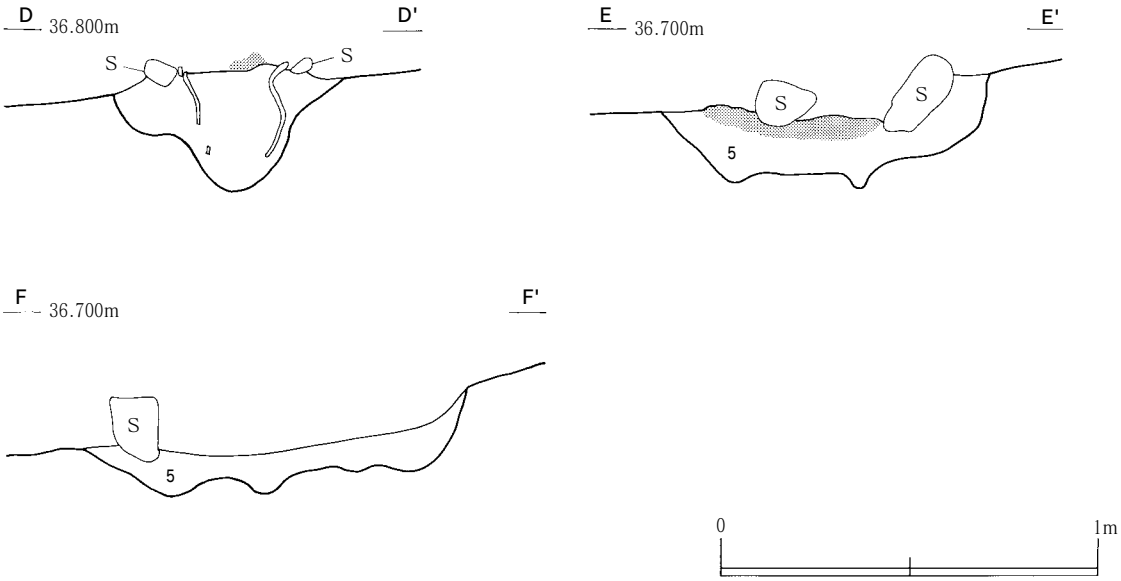
第31図１の埋設土器は深鉢形土器で、口縁部が大きく外に広がり、胴部は壺状に外に張り出している。胴部下部から底部にかけては欠失している。文様構成は入り組み横S字状区画文で、区画内に縄文が斜位に充填されている。縄文時代中期末葉の大木10式に比定される。第31図２は小型の深鉢形土器で、ほぼ完形で埋設土器の中から出土した。口縁部から底部にかけて比較的なめらかな曲線を描くスマートな形を呈する。文様構成は埋設土器と同じ入り組み横Ｓ字状区画文で、区画内に縄文が斜位に回転施文されている。大木10式に比定される。第32図１の土器片は深鉢形土器の口縁に近い胴部と、底部に近い胴部である。LR縄文が器面全体に横位回転施文されている。第32図２の石皿は脚が付いたものである。



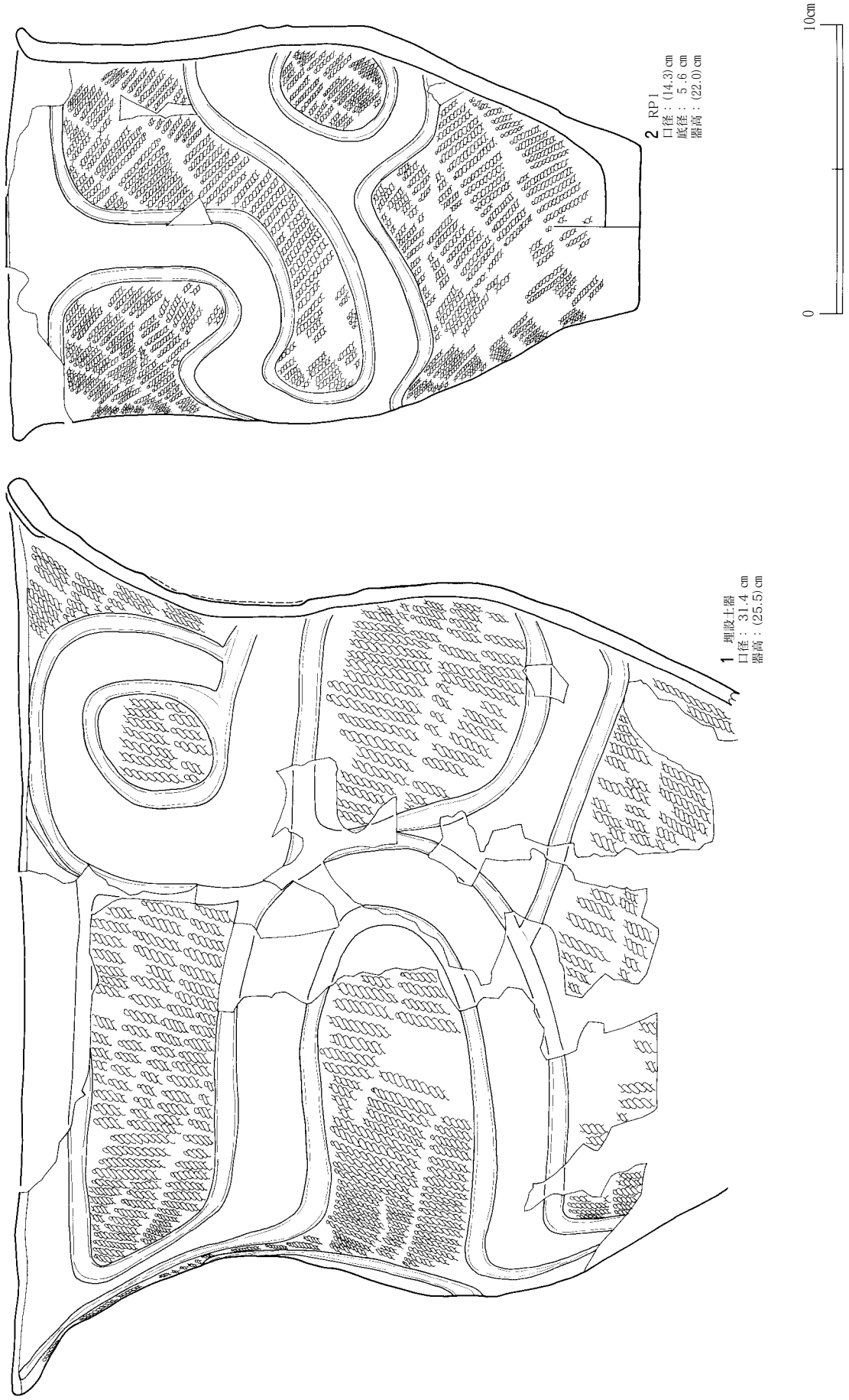
第29図　ＳＩ23平面図・断面図・焼土ブロック範囲図



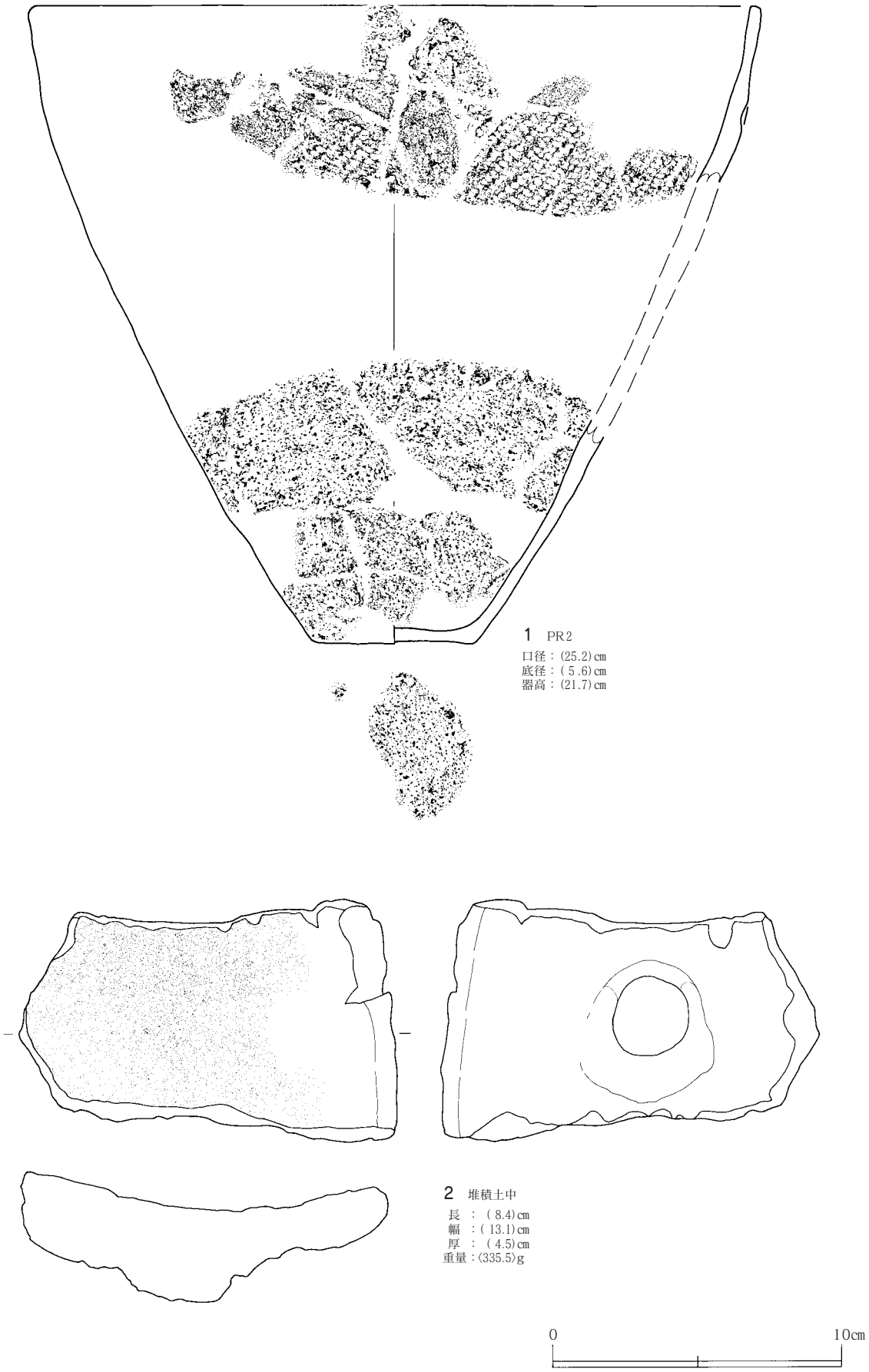
ＳＩ23　炉
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中、炭化物微量、焼土ブロック微量
2　黒褐色土（10YR2/3）しまり中、粘性中、炭化物少量、焼土ブロック少量
3　黒色土（10YR2/1）しまり弱、粘性弱、焼土ブロック少量（炭化物層）
4　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり中、粘性中、炭化物微量
5　暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中、炭化物微量
6　黒褐色土（10YR2/3）しまり弱、粘性弱、焼土ブロック多量
　焼土ブロック　暗赤褐色土（2.5YR3/6）



第30図　ＳＩ23炉跡平面図・断面図



第31図　ＳＩ23出土遺物（１）



第32図　ＳＩ23出土遺物（２）

（２）土坑

①ＳＫ02（第33図）

《位置と確認》LQ44グリッド。Ⅲ層上面で円形の褐色土プランを確認できた。

《規模と平面形》長軸（西－東）1.52m、短軸（北－南）1.24m、深さ0.45m。平面形は円形である。

《重複》なし

《覆土》３層に分層した。２層に炭化物が少量確認できた。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

《出土遺物》剥片１点。

②ＳＫ10（第33図、図版23・25）

《位置と確認》LR46・47グリッド。確認調査の１トレンチと３トレンチが交差するトレンチ断面で竪穴状の遺構を確認した。平面形を確認するため全体をⅢ層まで掘り下げたところ、Ⅲ層にやや近似したにぶい黄褐色の円形プランを検出した。

《規模と平面形》長軸（北西－南東）3.38m、短軸（北東－南西）2.96m、深さ0.58m。平面形は円形である。

《重複》なし

《覆土》にぶい黄褐色土の単層である。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》縄文土器片が３点、石匙１点出土した。第33図１の土器片はトレンチと遺構の境から出土したもので縄文前期の遺物と思われるが、周辺に前期の遺構が多いことから、本遺構内に流入したものと判断した。隆帯上位に半裁竹管で刺突し、隆帯上に刻みが施されている。口縁部側上位には、もう一条の隆帯が想定される。第33図２の石匙は縦型で、片側に調整を加え刃部を作っている。使用痕は確認できなかった。

③ＳＫ11（第33図）

《位置と確認》LS47グリッド。Ⅲ層で検出。

《規模と平面形》長軸（北西－南東）1.9m、短軸（北東－南西）1.08m、深さ0.19m。平面形は隅丸長方形である。

《重複》SI04と重複する。SI04より古い遺構であるが、中期と推定した。

《覆土》３層に分層した。２層は焼土粒で、３層が炭化物層となっている。穴を掘って火を焚いた跡と思われる。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、被熱で赤変している部分もある。壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》なし

④ＳＫ13（第34図）

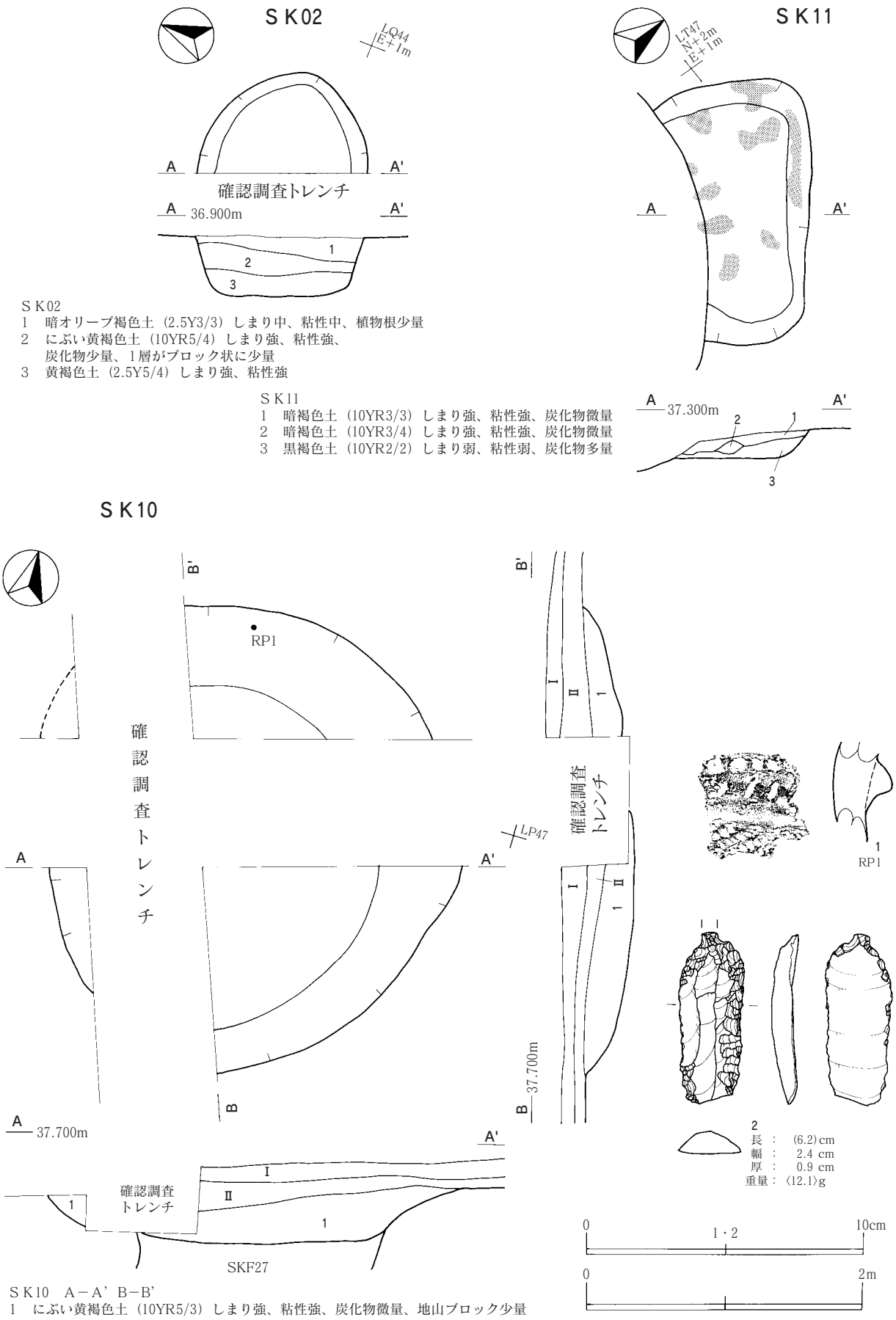
《位置と確認》LP43、LQ43グリッド。Ⅲ層で検出。

《規模と平面形》長軸（東西）1.98m、短軸（南北）1.78mの不整円形で、深さは0.18m。遺構の一部が調査区外に延びている。

《重複》なし

《覆土》４層に分層した。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。



第33図　ＳＫ02・10・11平面図・断面図　ＳＫ10出土遺物

《出土遺物》なし

⑤ＳＫ14（第34図）

《位置と確認》LP47グリッド。Ⅲ層で検出。確認調査の３トレンチ断面にかかっていた。

《規模と平面形》残っていた部分で、径0.76m、深さ0.27m。平面形は円形であったと考えられる。

《重複》なし

《覆土》炭化物・地山粒混じりの単層。埋め戻された土と考えた。

《壁・底面》地形と同じように底面は傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》なし

⑥ＳＫ16（第34図）

《位置と確認》LS48、LT48グリッド。Ⅲ層。炭化物混じりの円形の褐色プランを検出した。

《規模と平面形》長軸（南北）2.22m、短軸（東西）1.98m、深さは0.26m。平面形は円形である。

《重複》なし

《覆土》４層。１・２層に炭化物の混入が目立つ。また２層上面が固くしまっていた。

《壁・底面》底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、全体的に浅いⅢ状となっている。遺構の一部が倒木痕で撹乱されている。

《出土遺物》縄文土器片１点。剥片１点。

⑦ＳＫ24（第34図）

《位置と確認》LP47グリッド。Ⅴ層で確認したがⅡ・Ⅲ・Ⅳ層が無く、削平された可能性がある。確認調査３トレンチ断面にかかっていた。

《規模と平面形》残っていた部分で、径0.66m、深さ0.28m。平面形は楕円形であったと考えられる。

《重複》なし

《覆土》炭化物・地山粒混じりの単層。

《壁・底面》地形と同じように底面はやや傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》なし

⑧ＳＫ25（第34図）

《位置と確認》LR45グリッド。Ⅲ層上面で褐色プランを確認。

《規模と平面形》長軸（北東－南西）2.08m、短軸（北西－南東）1.26m、深さ0.26m。平面形は不整円形である。

《重複》なし

《覆土》４層に分層した。全体的に炭化物が混入し、特に３層への混入が著しかった。

《壁・底面》底面は南側に緩く傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。また南側の底面で焼けた痕跡が確認された。覆土の炭化物はこの遺構での燃焼に由来するものと考えた。

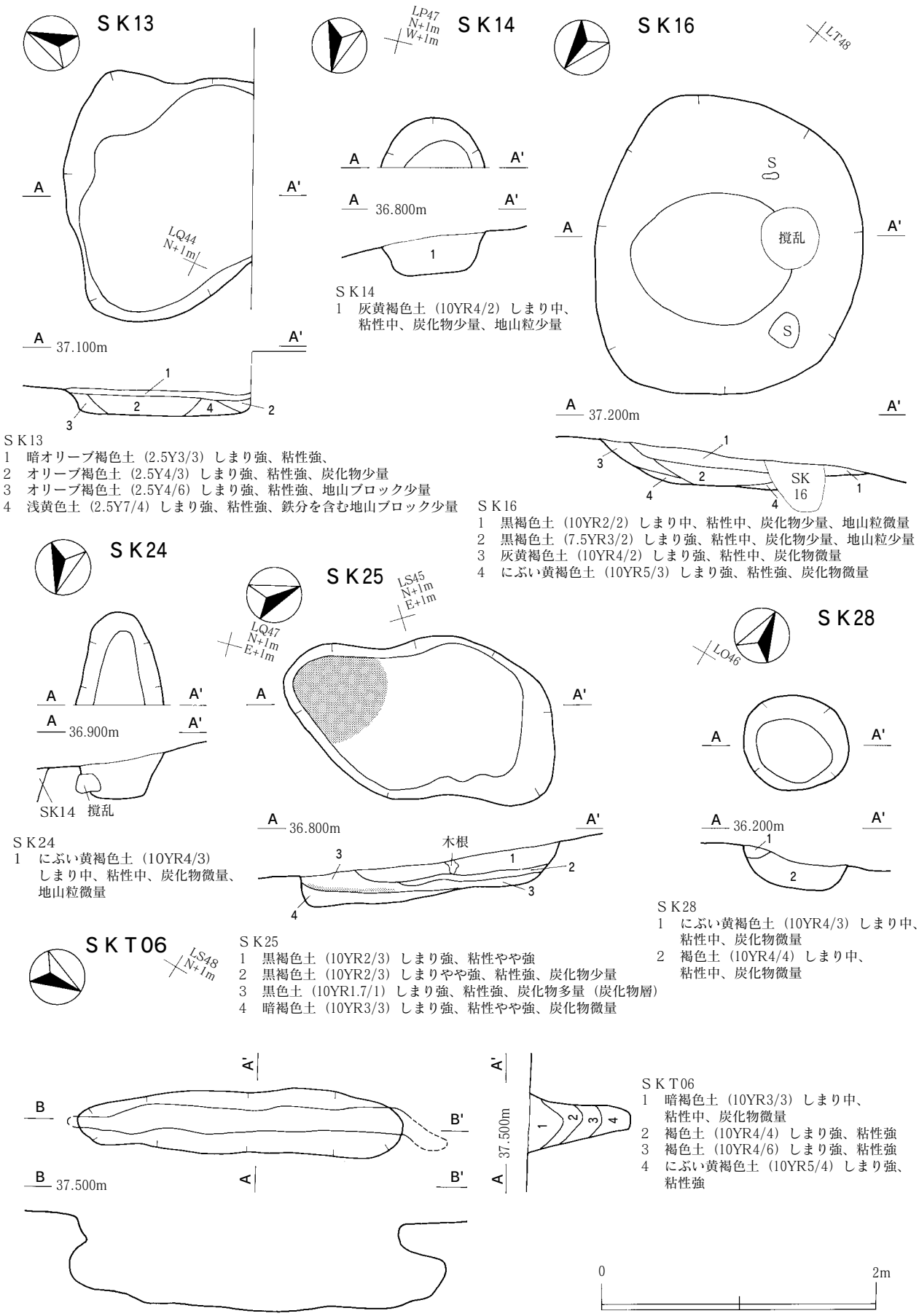
《出土遺物》縄文土器片１点。

⑨ＳＫ28（第34図）

《位置と確認》LN45グリッド。Ⅲ層上面で褐色プランを確認。

《規模と平面形》長軸（東西）0.78m、短軸（南北）0.69m、深さは0.2m。平面形は円形である。

《重複》なし



ＳＫ13
1　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）しまり強、粘性強、
2　オリーブ褐色土（2.5Y4/3）しまり強、粘性強、炭化物少量
3　オリーブ褐色土（2.5Y4/6）しまり強、粘性強、地山ブロック少量
4　浅黄色土（2.5Y7/4）しまり強、粘性強、鉄分を含む地山ブロック少量

ＳＫ14
1　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり中、粘性中、炭化物少量、地山粒少量

ＳＫ16
1　黒褐色土（10YR2/2）しまり中、粘性中、炭化物少量、地山粒微量
2　黒褐色土（7.5YR3/2）しまり強、粘性中、炭化物少量、地山粒少量
3　灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強、粘性中、炭化物微量
4　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり強、粘性強、炭化物微量

ＳＫ24
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり中、粘性中、炭化物微量、地山粒微量

ＳＫ25
1　黒褐色土（10YR2/3）しまり強、粘性やや強
2　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強、粘性強、炭化物少量
3　黒色土（10YR1.7/1）しまり強、粘性強、炭化物多量（炭化物層）
4　暗褐色土（10YR3/3）しまり強、粘性やや強、炭化物微量

ＳＫ28
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり中、粘性中、炭化物微量
2　褐色土（10YR4/4）しまり中、粘性中、炭化物微量

ＳＫＴ06
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中、炭化物微量
2　褐色土（10YR4/4）しまり強、粘性強
3　褐色土（10YR4/6）しまり強、粘性強
4　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強、粘性強

0　2m

第34図　ＳＫ13・14・16・24・25・28　ＳＫＴ06平面図・断面図

《覆土》２層に分層した。人為的に埋め戻したものと考えた。
《壁・底面》底面はやや丸く窪み、壁は緩やかに立ち上がる。
《出土遺物》なし

（３）焼土遺構

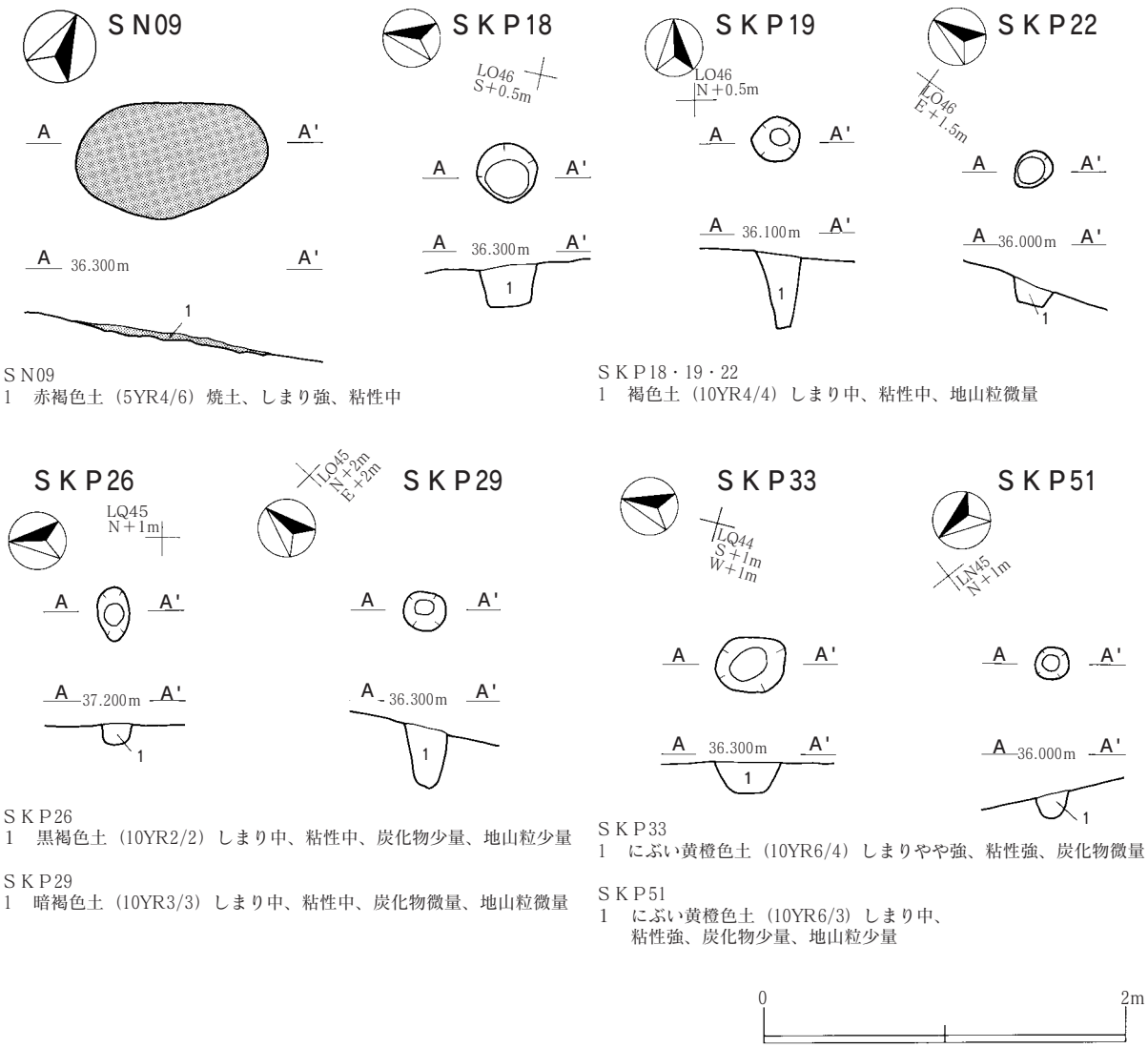
①ＳＮ09（第35図）
《位置と確認》LP46グリッド。Ⅲ層で赤色プランを検出。
《規模と平面形》長軸（北東－南西）1.05m、短軸（北西－南東）0.64m、確認面から0.04ｍ～0.06ｍの厚さで赤変し、しまりが強い。平面形は楕円形である。
《重複》なし
《出土遺物》なし

（４）陥し穴（第34図、図版18）

①ＳＫＴ06
《位置と確認》LR48グリッド。Ⅲ層。
《規模と平面形》開口部は長軸（北西－南東）2.36m、短軸（北東－南西）0.47m、深さ0.73m。床面は長軸（北西ー南東）2.58m、短軸（北－南西）0.2m。
《重複》なし
《覆土》４層に分層した。
《壁・底面》底面は中央がやや窪んでおり、壁は長軸方向にオーバーハングした袋状となっている。
《出土遺物》縄文土器片。剥片。

（５）柱穴様ピット　ＳＫＰ18・19・22・26・29・33・51（第35図、第３表）

調査区東側の緩やかな斜面部を中心に７基検出した。掘立柱建物跡になりそうな配列ではないため一覧表（第３表）に記載した。全てのピットはⅢ層上面で、褐色プランで確認できたことから、縄文中期の遺構と判断した。



ＳＮ09
1　赤褐色土（5YR4/6）焼土、しまり強、粘性中

ＳＫＰ18・19・22
1　褐色土（10YR4/4）しまり中、粘性中、地山粒微量

ＳＫＰ26
1　黒褐色土（10YR2/2）しまり中、粘性中、炭化物少量、地山粒少量

ＳＫＰ29
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中、炭化物微量、地山粒微量

ＳＫＰ33
1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまりやや強、粘性強、炭化物微量

ＳＫＰ51
1　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまり中、
　粘性強、炭化物少量、地山粒少量

第35図　ＳＮ09　ＳＫＰ18・19・22・26・29・33・51平面図・断面図

第４表　竪穴住居跡柱穴観察表

ピット	平面形	大きさ			底面の標高
		長径	短径	深さ	
ＳＩ03					
Ｐ１	〔円形〕	34	(24)	30	36.62
Ｐ２	楕円形	22	18	12	36.68
Ｐ３	円形	26	24	10	36.62
Ｐ４	円形	24	21	13	36.64
ＳＩ04					
Ｐ１	楕円形	27	22	26	36.52
Ｐ２	円形	26	25	20	36.60
Ｐ３	円形	30	26	22	36.58
Ｐ４	円形	19	18	23	36.60
ＳＩ07					
Ｐ１	円形	28	25	14	36.89
Ｐ２	円形	23	21	22	36.87

〔　〕内の平面形は推定形　　（　）内の数値は残存値

第４節　遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から縄文時代前期の特徴を持つと思われる土器と石鏃・石匙・石槍などの石器が出土した。その総量は中型コンテナ（18㍑）換算で16箱（土器８箱、石器８箱）である。

石器は調査区全体から出土しているが、土器は西側の斜面部からかなりまとまって出土しており、斜面が捨て場になっていたものと思われる。しかし、調査の終わり頃に竪穴住居跡の下からフラスコ状土坑を多数検出し、斜面部に十分な調査時間を割くことが出来ず、グリッド一括での取り上げとなってしまった。

図示した遺物の出土地点等については、第５表と第６表にまとめた。なお表中の「１－10」等の記載は、遺物が挿図１の10に図示されていることを示す。

2　土器（第36～39図、図版25～30）

遺構外で出土した土器の器種はほとんど深鉢形土器であるため、１を除き器種は省略する。１は小型の深鉢でキャリパー状の器形を呈し、体肩部は球状に張り出している。口縁端部が急に外反し４つの頂部をもつ波状口縁で、波状口縁部下に３個１対の円形刺突文が配置され、口縁に平行するように撚糸圧痕文が２条施文されている。胴部にはＬＲ縄文が横位回転施文されている。遺構外では唯一形がはっきりした土器である。２と３は波状口縁部に棒状工具による円形刺突痕のある土器である。４と５は口縁部に半裁竹管文を施文している。４は口縁の形状に沿って波形に２条一単位の刺突文、５は口縁に平行に一条の刺突文がみられる。６も口縁部の破片で、大形の波状口縁でキャリパー状に外反している。口縁部に縦方向撚糸が押圧され、頸部に半裁竹管を使った爪形文を平行に２段施文している。爪形文の上下と間には撚糸文を巡らしている。大木６式に比定される。７は口縁部に細い撚糸が３条平行に押圧されている。８も口縁部にやや太い撚糸が３条平行に押圧されている。９は外反が著しい口縁でLR縄文を縦位回転施文しており、内面部が磨かれている。10は櫛歯状工具で縦位に平行沈線を施文したあと、木目状撚糸文を施文している。11は口唇部に半裁竹管で条痕文を平行に施文し、その下位には斜め方向に施文している。12は隆帯上に２条の撚糸文を平行して押圧し、上位に斜め方向の撚文が施文されている。13から20は胴部で単軸絡条体を縦位回転して、木目状撚糸紋を施文している。21と22は胴部でLRとRLを結束した原体を縦に転がした羽状縄文である。大木６式に比定される。23と24は胴部で２条１単位の単軸絡条体が施文されている。25～27は胴部でLの原体を使った結節回転文が横位に施文されている。綾絡縄文とも呼ばれている。器壁はいずれも薄いが、硬く焼成も良い。大木６式に比定される。28は単軸絡条体を縦方向に回転した撚糸文と思われるが、縄がゆるんでいるのかはっきりしない。29から40までは半裁竹管を使ったと思われる櫛目状の文様が胴部全体に施文されている土器である。41は底部の破片で、内側のほぼ中央部にドングリ状のものを斜めにさし込んでできた窪みがある。深さは1.3㎝で焼成前にくぼみをつけたものと思われる。

2　石器（第40～53図、図版30～36）

家ノ前遺跡では、遺構外から中型コンテナ（18㍑）換算で８箱の石器が出土した。その内訳は石鏃

68点、石槍６点、石匙27点、石錐８点、石箆10点、掻器９点、削器10点、磨石４点、敲石１点、石錘２点、打製石斧１点、凹石１点、剥片その他が約500点である。これらの多くは調査区南側の平坦部とそれに続く西側斜面部から出土した。東側斜面部では出土量が少ない。出土層はⅡ層及びⅢ層であるが、時代の特定は難しい。周辺での検出遺構は縄文時代前期と中期であることから、いずれかに帰属するものと思われる。細かい層位や位置の記録をとっていないこともあり、各石器の製作・使用された時期は不明である。以下、器種ごとに説明する。用途が重複するものもあるが、使用度が高いと判断した優先順位で掲載した。

(１)石鏃（第40～43図１～61、図版30・31）

出土した68点中61点を図示した。長軸６㎝未満の尖頭器を石鏃とした。基部の形状により次のように分類した。分類は、鈴木道之助「図録　石器入門辞典－縄文－」（柏書房刊）の分類法を参考にした。

Ａ類無茎鏃	１種	凹基	基部がくぼむもの
	２種	平基	基部が平らなもの
Ｂ類有茎鏃	１種	凹基	基部にくぼみがあり、装着のためのつまみのあるもの
	２種	平基	基部が平らで、装着のためのつまみのあるもの
	３種	凸基	基部がふくらんでいて、装着のためのつまみのあるもの
Ｃ類尖・円基鏃	１種	尖基	基部がとがっているもの
	２種	円基	基部が丸みをおびているもの

Ｃ類と石錐の区別については、基本は摩滅痕の有無であるが、これが認められない場合は厚さで分類した。段のない弧状の側縁のものをＣ類とし、断面が角張るものを石鏃とした。

１から７まではＡ類１種の基部がくぼむ石鏃である。１から５までは長さに対して幅があるタイプの石鏃でハート形を呈する。６は比較的抉りが浅く、細身である。７は基部と先端に欠損があるが、抉りがあるなかでは唯一細長い石鏃である。

８から24まではＡ類２種に分類した。基部に若干の丸みを帯びた石鏃もあるが、はっきりした丸みを帯びた石鏃以外は基部が平らなものとして分類した。Ａ類２種で特徴があるものは８である。掻器として分類しようとしたが、刃部に使用痕が確認できず、持ってみた感覚が掻器としては、しっくりこないため石鏃に分類した。基部が平らな石鏃は比較的縦長の形状が特徴的で、矢柄に合わせたのか、基部もすぼまっているタイプが多い。

25～29はＢ類有茎鏃に分類される。若干の違いはあるが、すべてＢ類３種の基部がふくらんでいて装着のためのつまみのあるものに分類した。27は装着部分にあたるつまみが大きい特徴がある。先端部が欠損しているが、使用にともなう欠損と判断した。29は石鏃にしては先端部が尖っていないが、欠損等は確認できなかった。

30～36はＣ類１種の基部が尖っている石鏃に分類した。33は先端部が欠損していて、石錐として使われた可能性もあるが、調整の痕跡や厚さから石鏃に分類した。36も石錐の可能性を考えたが、摩滅痕が無いことから石鏃に分類した。

37～55はＣ類２種の基部が丸みを帯びた石鏃である。40と45は石鏃にしては大型で小型の石槍の可能性もある。この種類の石鏃の特徴は基部に丸みを持たせるために、両面から丁寧な調整を加えていることである。装着する矢柄との関連があると思われる。

56～61は基部が欠損しているため分類からはずした石鏃である。59は石錐の可能性も考えたが、摩滅痕が確認できなかったことから石鏃に分類した。先端も欠損したのか調整したのかはっきりしない。

（２）石槍（第44図62～67、図版32）

出土した６点を図示した。長軸６㎝以上の尖頭器を石槍とした。出土点数が少ないため分類はしていない。

62は先端がとがり、基部が細く、石槍として使用されたのは明らかである。63は先端部が丸みを帯びており、刺す機能の石槍としては疑問も残るが、基部の調整具合から棒に装着したものと考え、石槍に分類した。64も分類にとまどったが先端が細くなっていることから石槍に分類した。66と67は調整痕から使用に伴う欠損品と判断した。

（３）石匙（第45～47図68～92、図版32・33）

つまみを作り出しているものを石匙とした。出土した27点中25点を図示した。

Ａ類　横型石匙・・・つまみの中軸線と刃部とが直交するもの

Ｂ類　縦型石匙・・・つまみの中軸線と刃部とが並行するもの

Ｃ類　斜型石匙・・・つまみの中軸線と刃部とが約45°の角度で交わるもの

以上の３類に分類した。刃部が２つ以上あって重複する場合は、持ってみて主要な刃部と判断したものとつまみの角度で分類した。

68から72はＡ類の横型石匙に分類した。68は刃部が丸みを帯びていて片面の調整である。70は刃部を両面から調整している。71は欠損があるが使用に伴う欠損と判断した。73から88はＢ類の縦型石匙に分類した。刃部の両面に明らかに調整を加えている石匙は73と78と81と85である。89から91はＣ類斜型石匙に分類した。91は刃部に両面調整が加えられて、持ち手部分も握りやすいよう調整されていた。92はつまみ部が欠損しているため分類外としたが、Ｃ類に分類される可能性が高い。単純に点数でみるとＡ類５点、Ｂ類16点、Ｃ類３点、その他１点となり、Ｂ類の石匙がかなり多い。使用目的によってつまみ部分の位置が違っている可能性もあるが、観察からは不明である。

（４）石錐（第48図93～100、図版34）

出土した８点を図示した。先端を刺突具状に尖らせているもので石鏃に比べて断面が角張るものを石錐とした。出土点数が少ないため分類していない。

93と94は有撮石器とよばれるつまみのついた石錐である。いずれも明確な摩滅痕は確認できないため、あまり使用されなかったものか、他の用途があったのかもしれない。95～98は先端部にかすかな摩滅痕が確認されたが、はっきりしたものではなく、使用頻度の低いものと判断した。99は石鏃とも考えたが、先端部に摩滅痕が確認できたため石錐とした。100は先端部が欠損しているが形状から石錐と判断した。

（５）石箆（第49図101～110、図版34）

出土した10点を図示した。全体の形状が箆状を呈し、先端部に刃部を作り出すものを石箆とした。出土点数が少ないことから分類していない。

明らかに両面調整が見られた石箆は102・107・108・109である。平面形は握り手部分が細くなっているものがほとんどであるが、106・107のような短冊形も２点確認できた。

（６）掻器（第50図111～119、図版35）

出土した９点を図示した。剥片の一端に主として片面調整による急斜度の刃部を作り出した石器である。動物の皮についた油を剥ぎ取るための道具である。持ちやすさなのか、裏面が反っているものが多い。刃部にゆるい弧を描くものが多いが、113や118のように直線的な刃部を持つものも確認できた。

（７）削器（第51図120～124、図版35）

出土した10点中６点を図示した。剥片の側縁に連続的な調整によって刃部を作り出した石器で、ものを切ったり、削ったりした道具である。

出土した削器は６点とも２側片に調整が加えられていたが、両面とも刃部と思われる削器は123だけで、あとは手持ち部分の調整と思われる。

（８）磨石（第52図126～129、図版36）

出土した４点を図示した。自然礫の一部分に摩耗痕が見られる一群である。出土点数が少ないため分類はしていない。

両面に磨りの痕跡があったのは127と128である。いずれも楕円形の平面形である。128は両面に敲打痕があった。

（９）敲石（第53図130、図版36）

出土した１点を図示した。自然礫の側縁に敲打痕が認められるものを敲石とした。129は磨ったあと敲石として転用されたものと判断した。

(10) 凹石（第53図131、図版36）

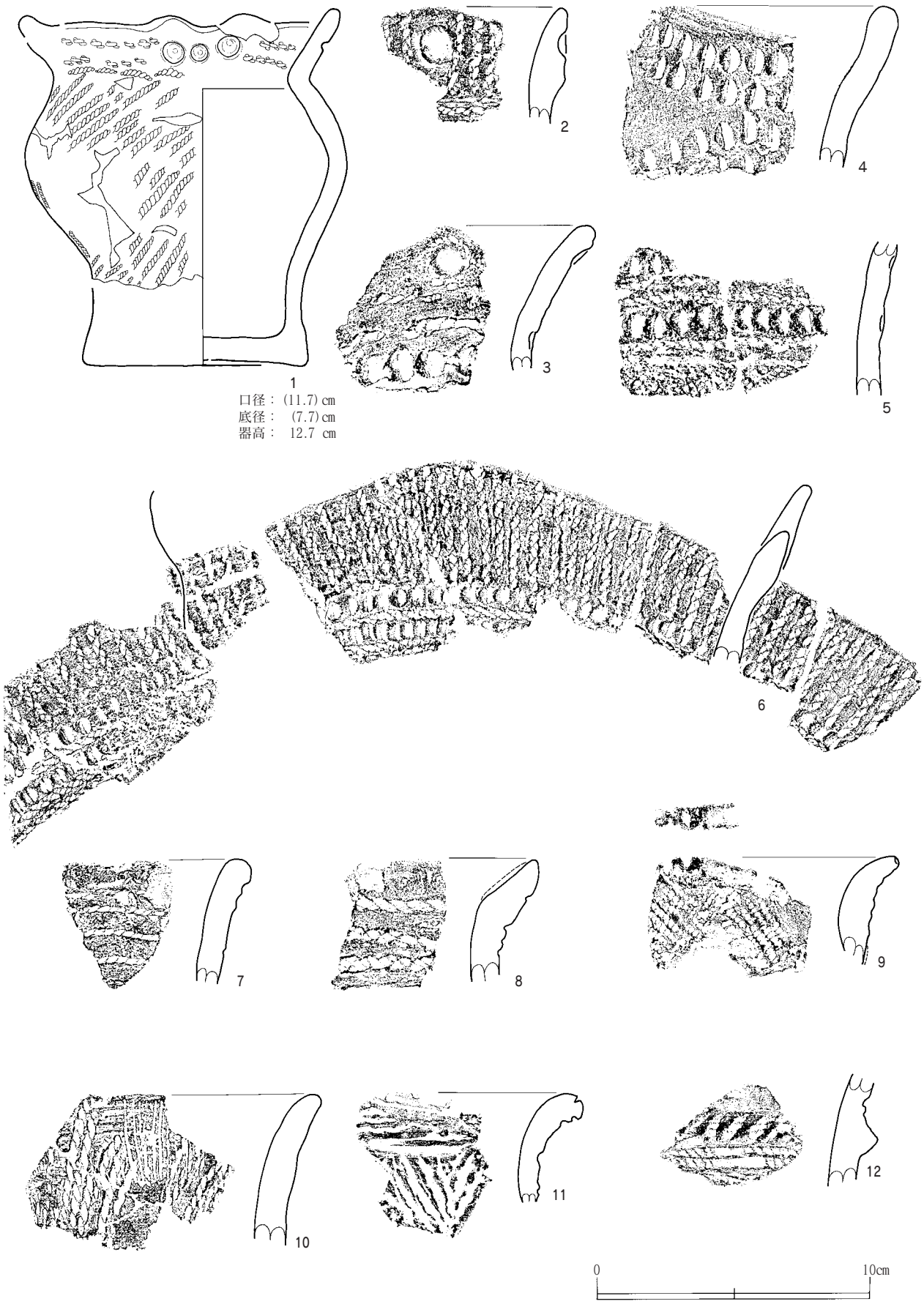
出土した１点を図示した。自然礫の面部分にくぼみの認められるものを凹石とした。131は側辺の１面のみ磨りの痕跡があり、３面にくぼみが確認された。磨り面の一部が敲打痕により削り取られていたことから、磨石としての使用後に凹石に使用されたものと判断した。

(11) 石錘（第53図132～133、図版36）

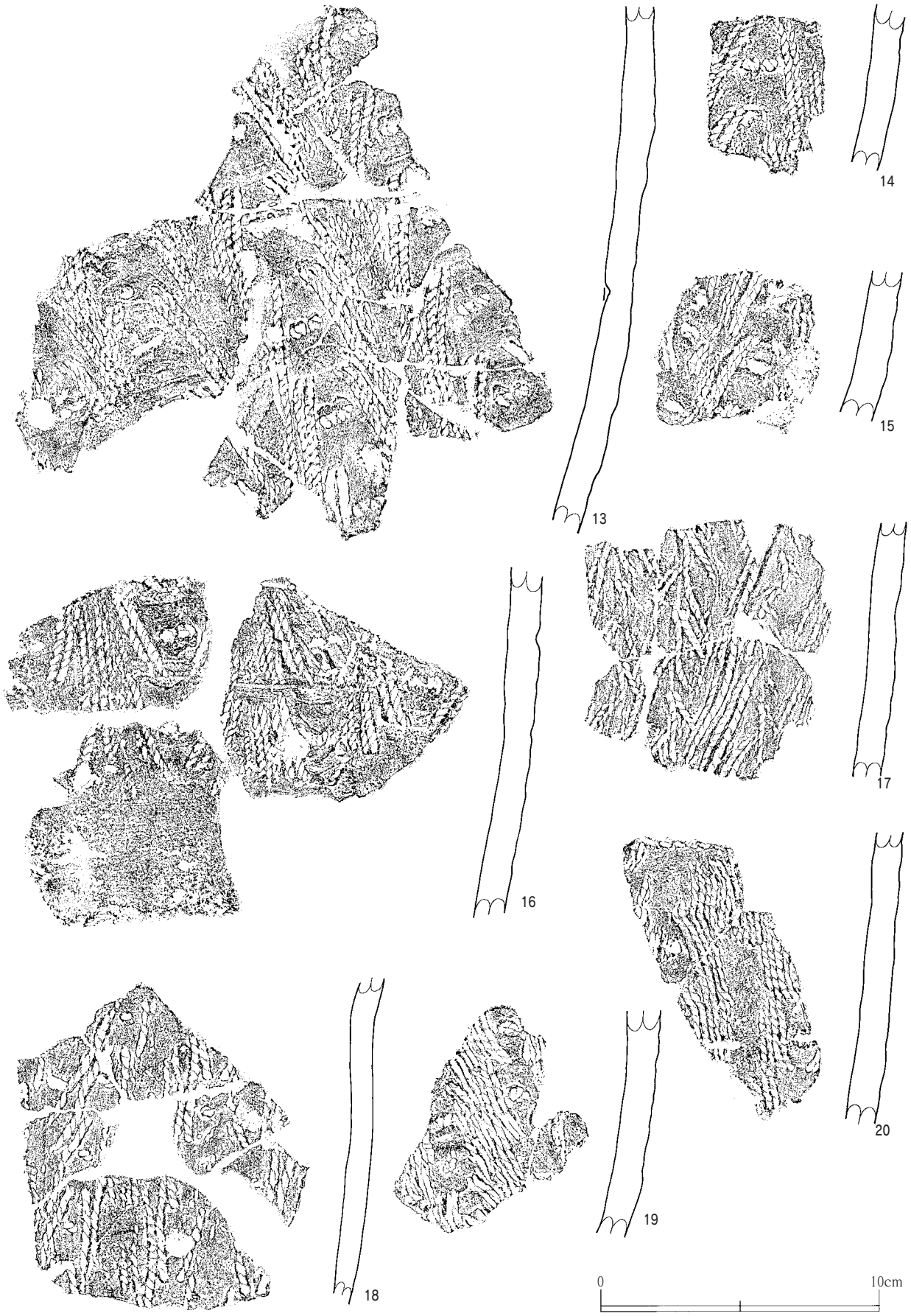
出土した２点を図示した。２点とも扁平な楕円礫の上下端を打ち欠いて作った石錘である。

(12) 打製石斧（第51図125、図版35）

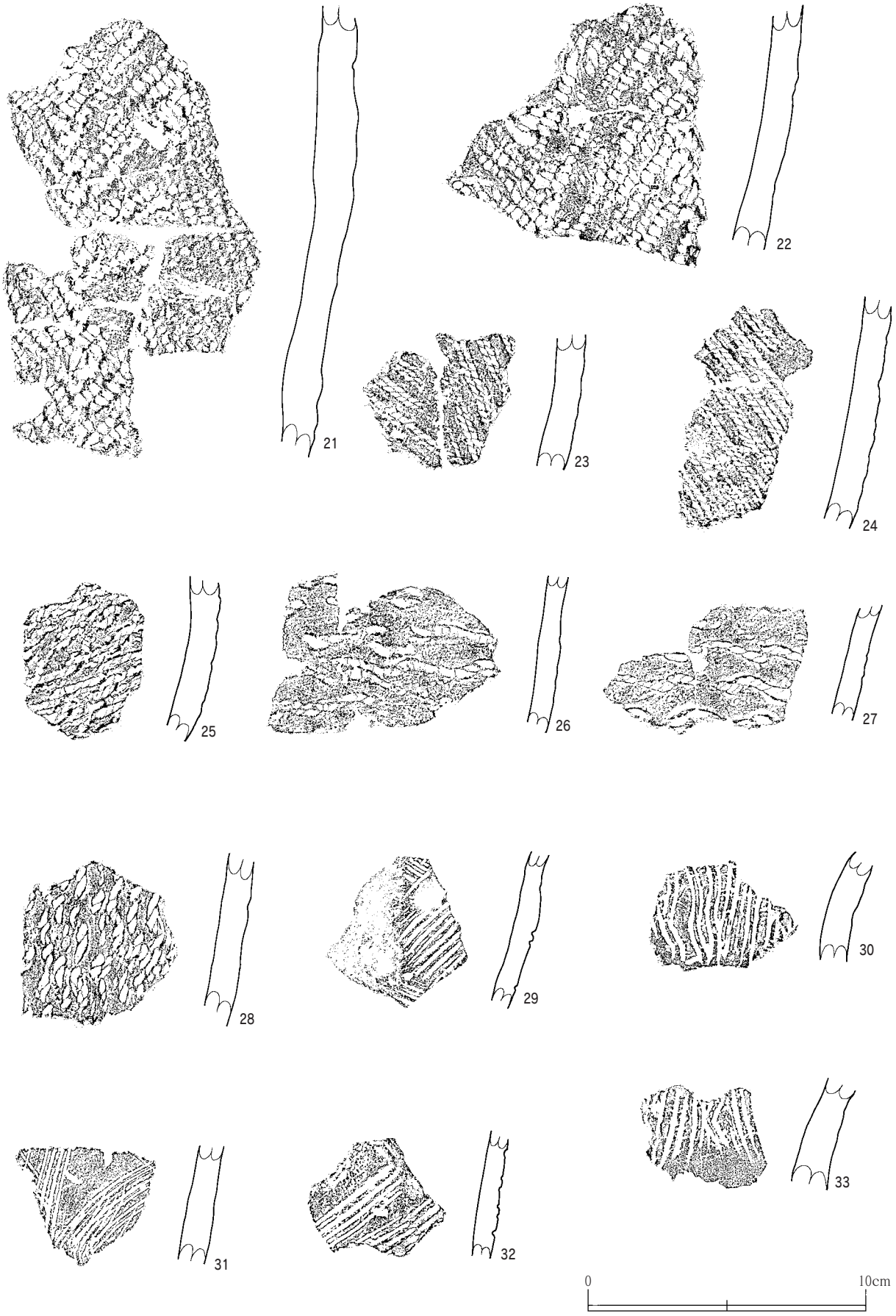
出土した１点を図示した。節理面を残した粗雑な打製石斧である。



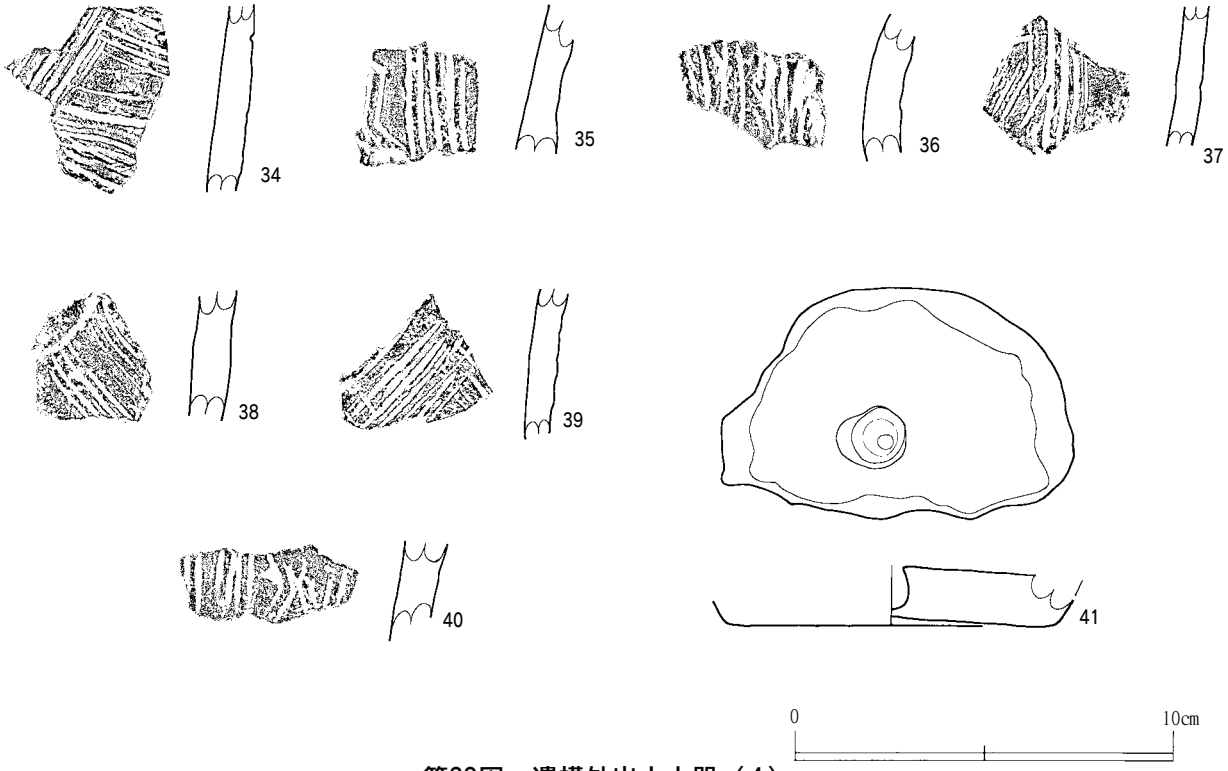
第36図　遺構外出土土器（１）



第37図　遺構外出土土器（２）



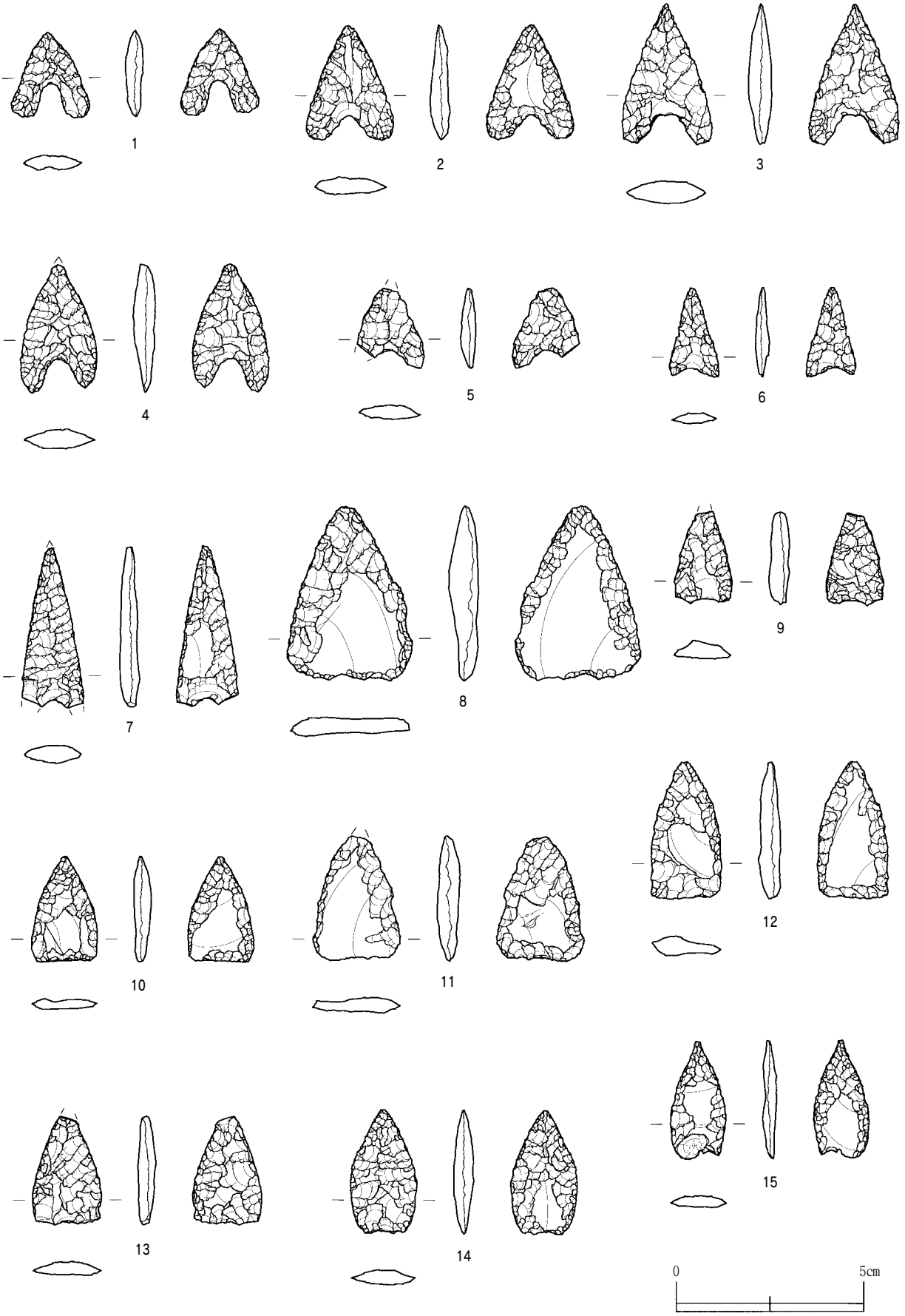
第38図　遺構外出土土器（３）



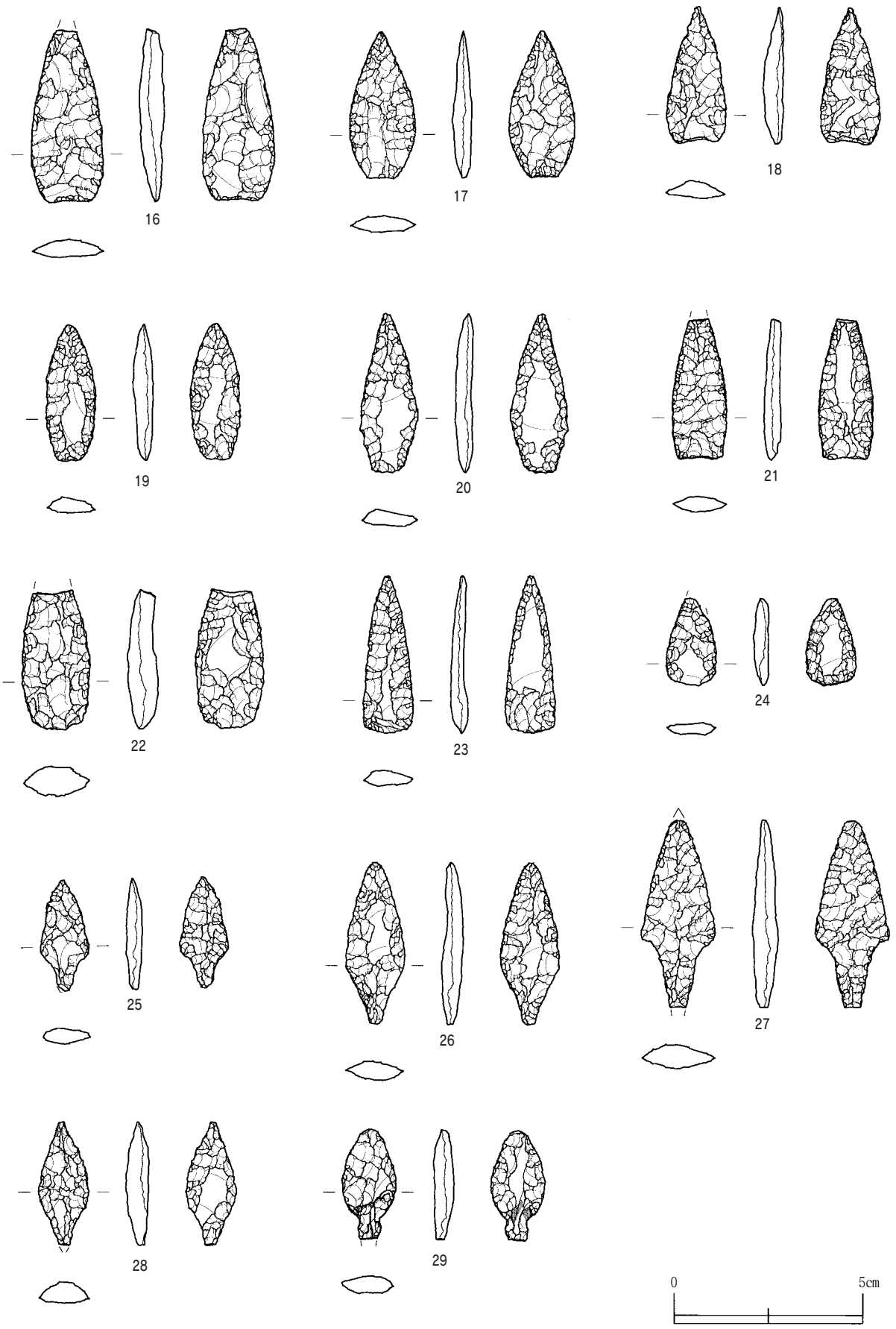
第39図　遺構外出土土器（４）

第５表　遺構外土器観察表

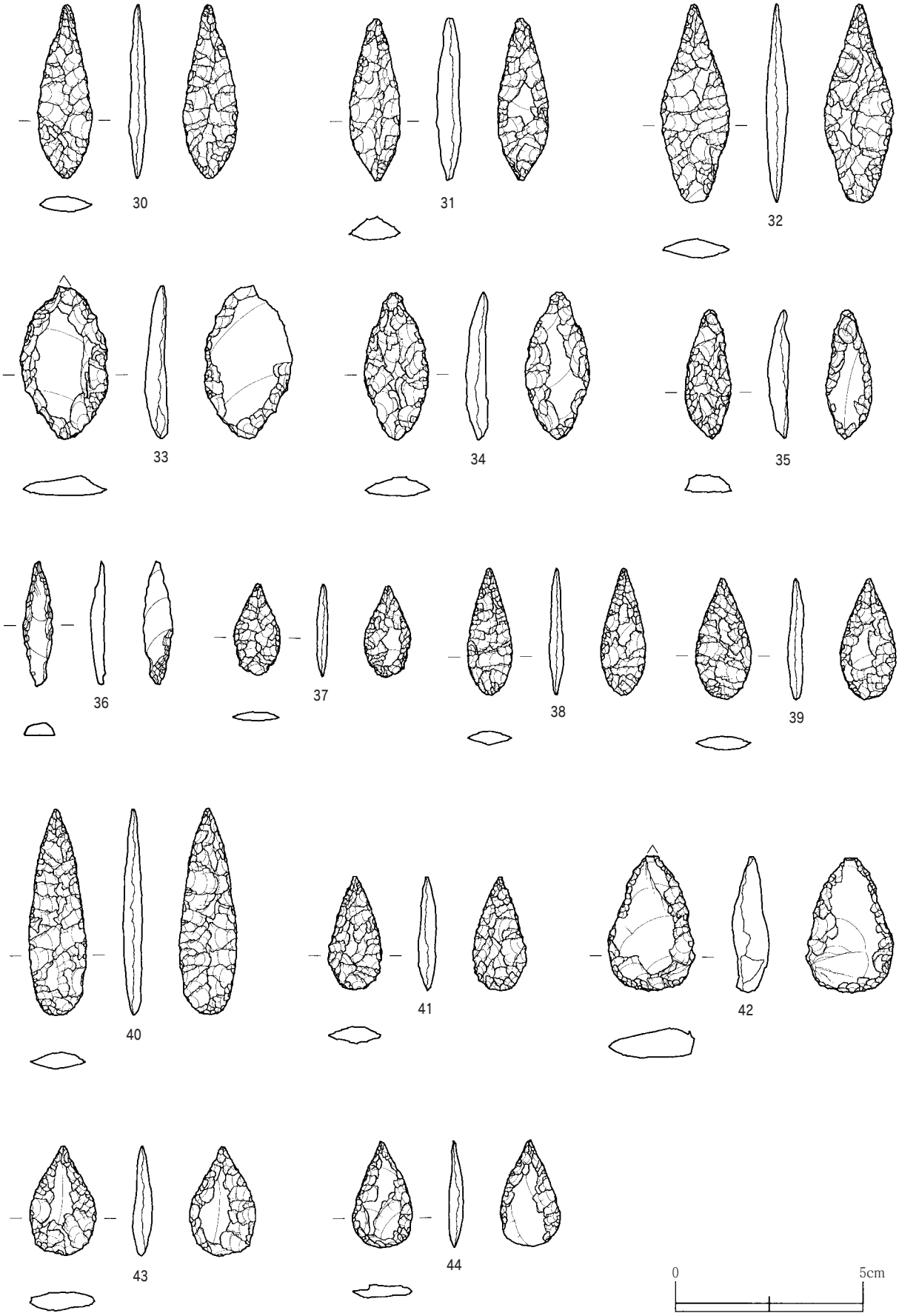
挿図番号	図版ページ	出土地点	器種	部位	外面特徴
36-1	25	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	一個体	キャリパー状、4つの頂部をもつ波状口縁
36-2	26	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	波状口縁部に棒状の工具で刺突
36-3	26	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	波状口縁部に棒状の工具で刺突
36-4	26	LP46Ⅲ層	深鉢形土器	口縁部	口縁部に半裁竹管で施文
36-5	26	MA45Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	口縁部に半裁竹管で施文
36-6	26	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	波状口縁でキャリパー状に外反
36-7	26	MA44Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	口縁部に細い撚糸が3条平行に押圧
36-8	26	MA49Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	口縁部にやや太い撚糸が3条平行に押圧
36-9	26	MA45Ⅲ層	深鉢形土器	口縁部	外反が著しい口縁
36-10	26	MA45Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	櫛歯状工具で縦に施文
36-11	26	MB44Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	口唇部に半裁竹管で施文
36-12	26	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	口縁部	口縁部に平行して隆帯
37-13	27	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-14	27	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-15	27	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-16	27	MA45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-17	28	LS46Ⅲ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-18	28	MA45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-19	28	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
37-20	28	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	木目状撚糸文
38-21	28	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	羽状縄文
38-22	28	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	羽状縄文
38-23	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	2本の撚糸が押圧
38-24	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	2本の撚糸が押圧
38-25	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	綾絡縄文、薄くて、硬く、焼成も良い
38-26	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	綾絡縄文、薄くて、硬く、焼成も良い
38-27	29	MA45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	綾絡縄文、薄くて、硬く、焼成も良い
38-28	29	LT53Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	縄がゆるんでいるかんじの施文
38-29	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
38-30	29	MB44Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
38-31	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
38-32	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
38-33	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-34	29	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-35	30	MB44Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-36	30	MB44Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-37	30	MA45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-38	30	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-39	30	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-40	30	MB44Ⅱ層	深鉢形土器	胴部	半裁竹管を使った櫛目状の文様
39-41	30	MB45Ⅱ層	深鉢形土器	底部	中央部にドングリを刺したような穴



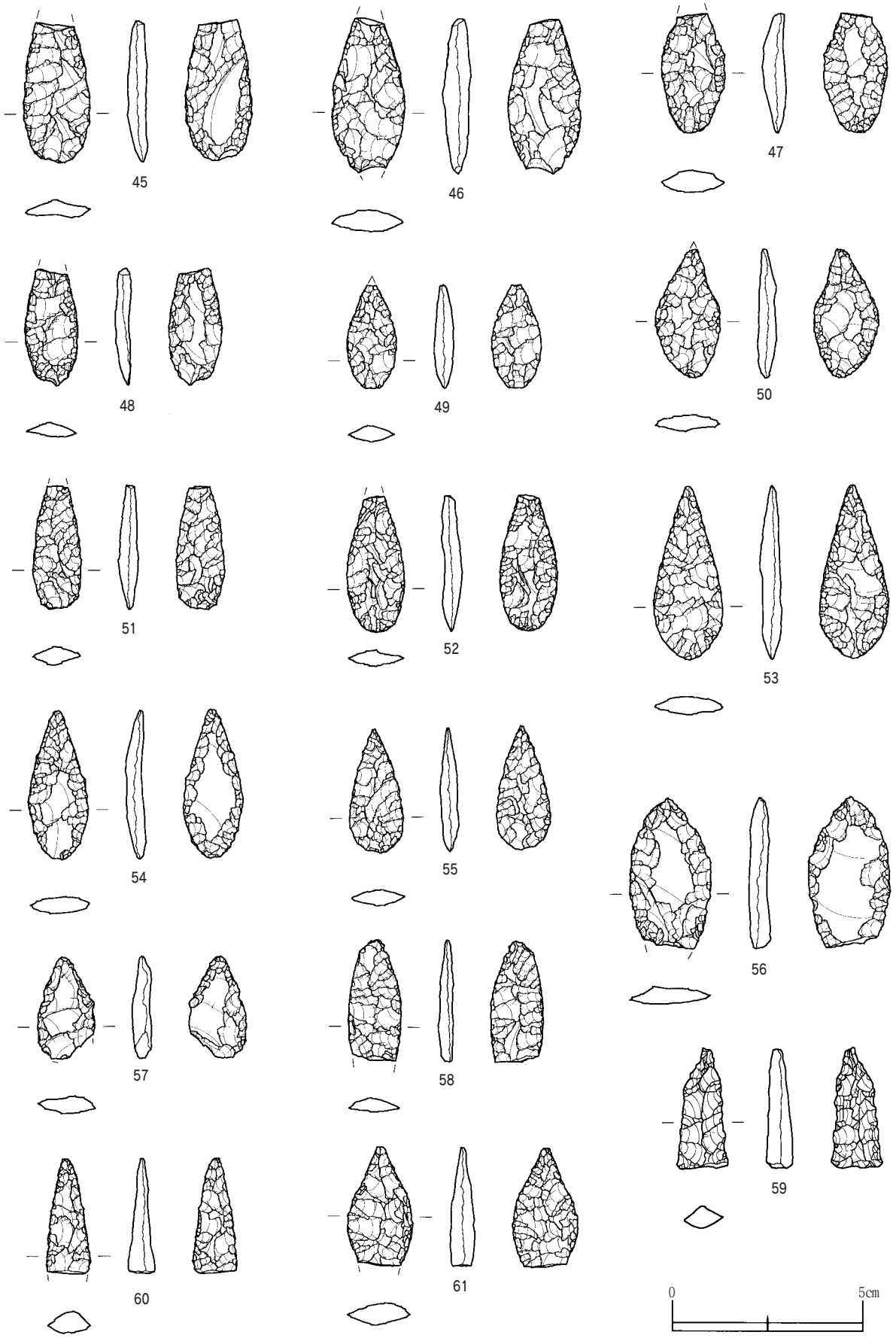
第40図　遺構外出土石器（１）石鏃



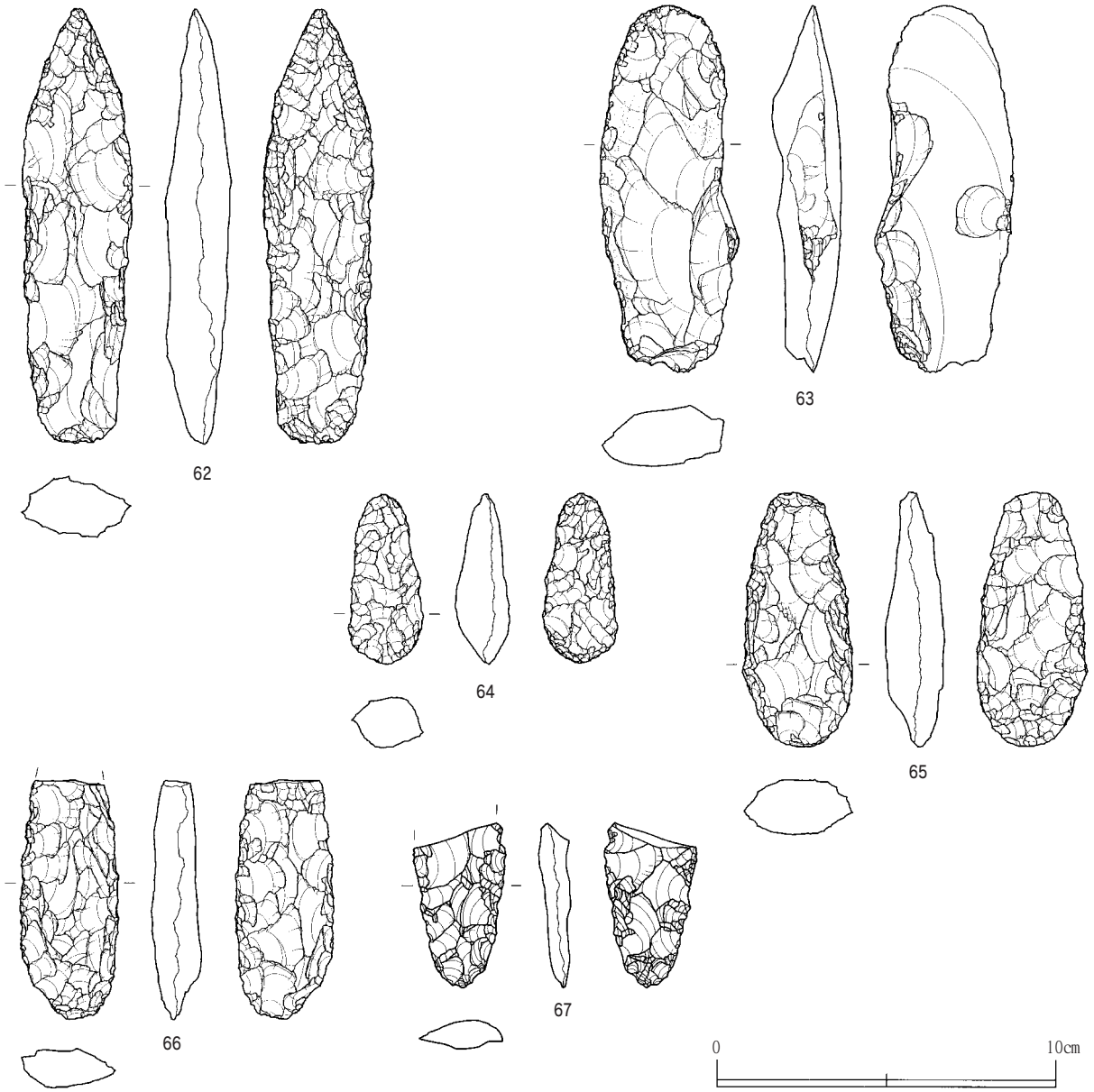
第41図　遺構外出土石器（２）石鏃



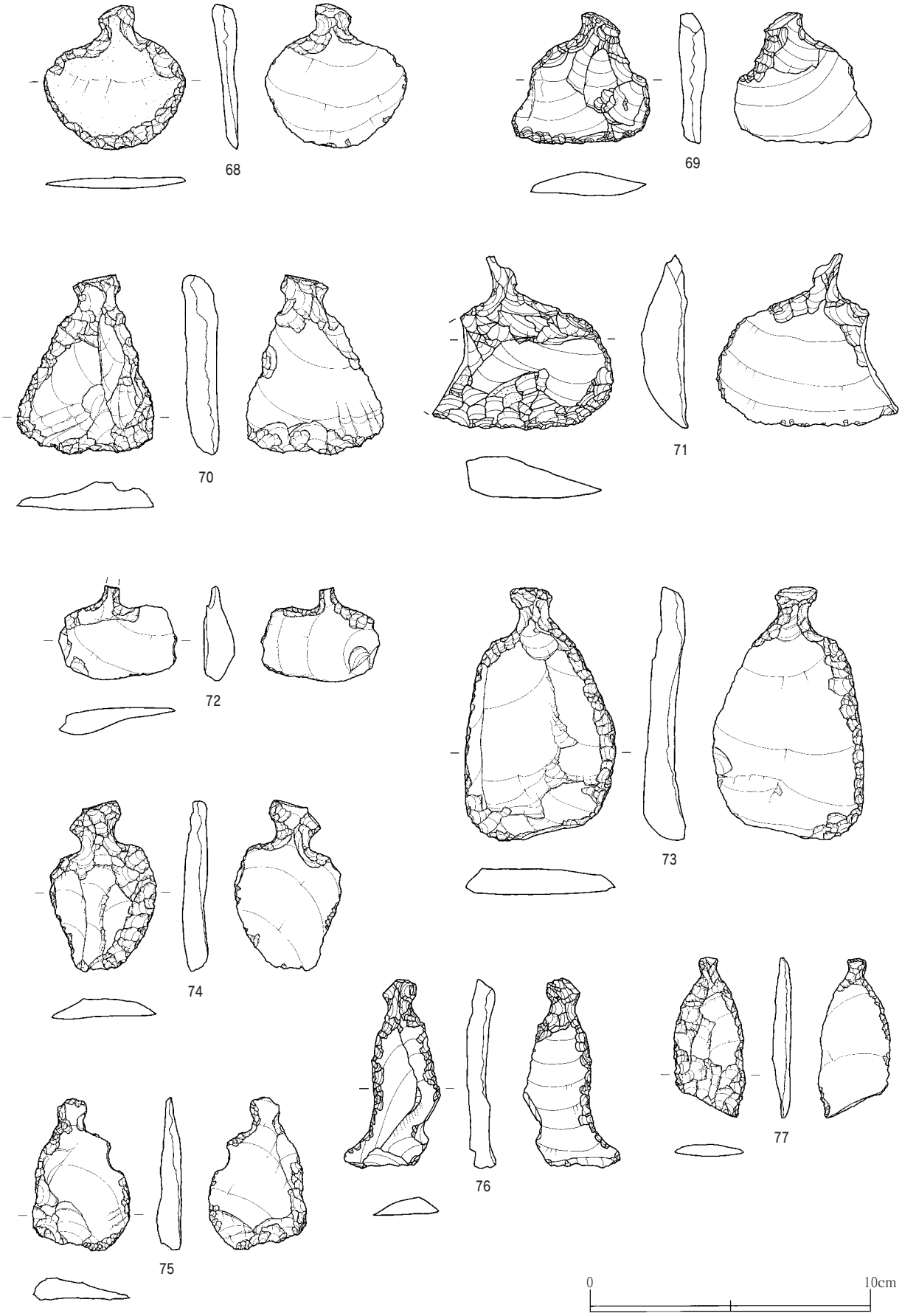
第42図　遺構外出土石器（３）石鏃



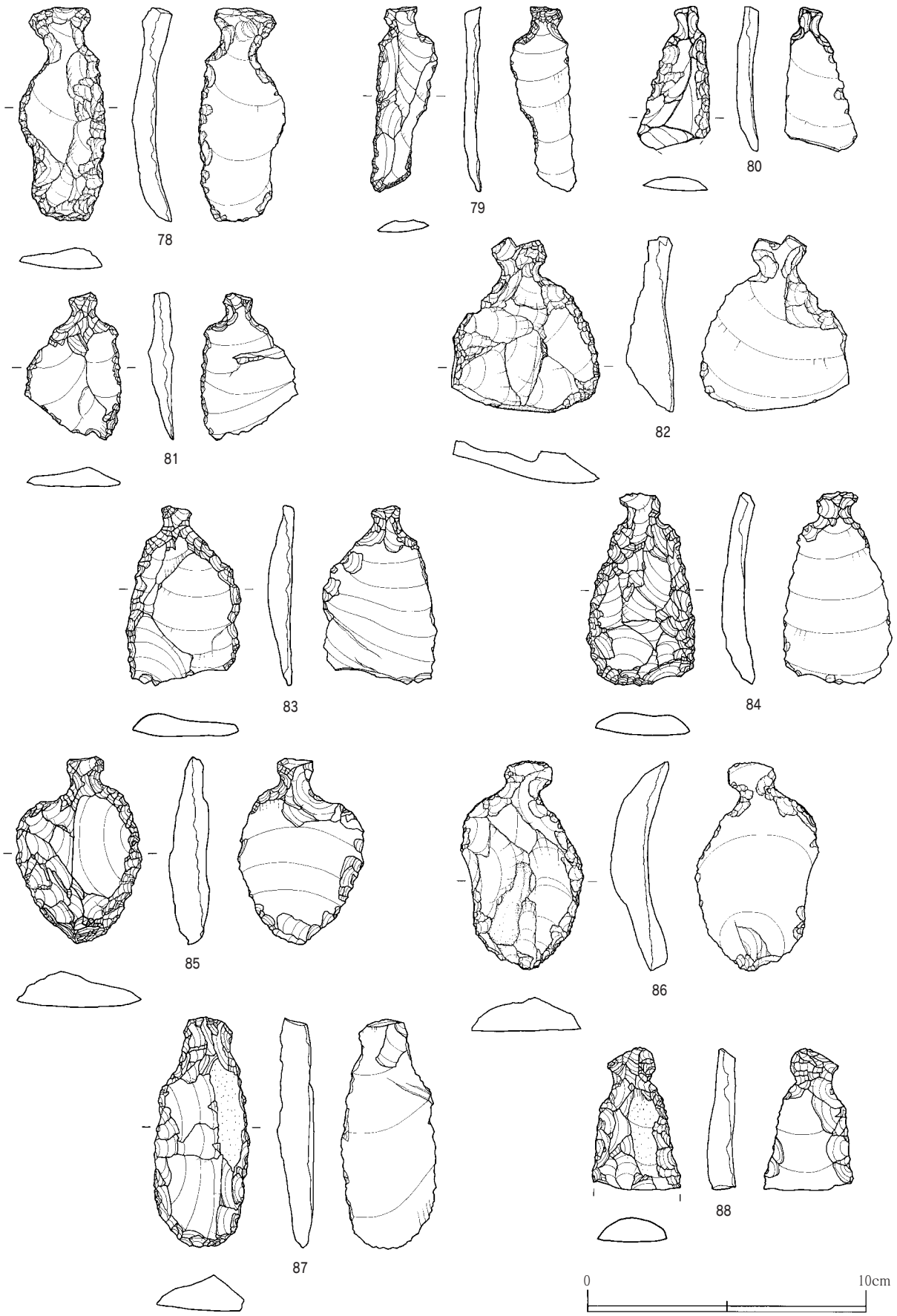
第43図　遺構外出土石器（４）石鏃



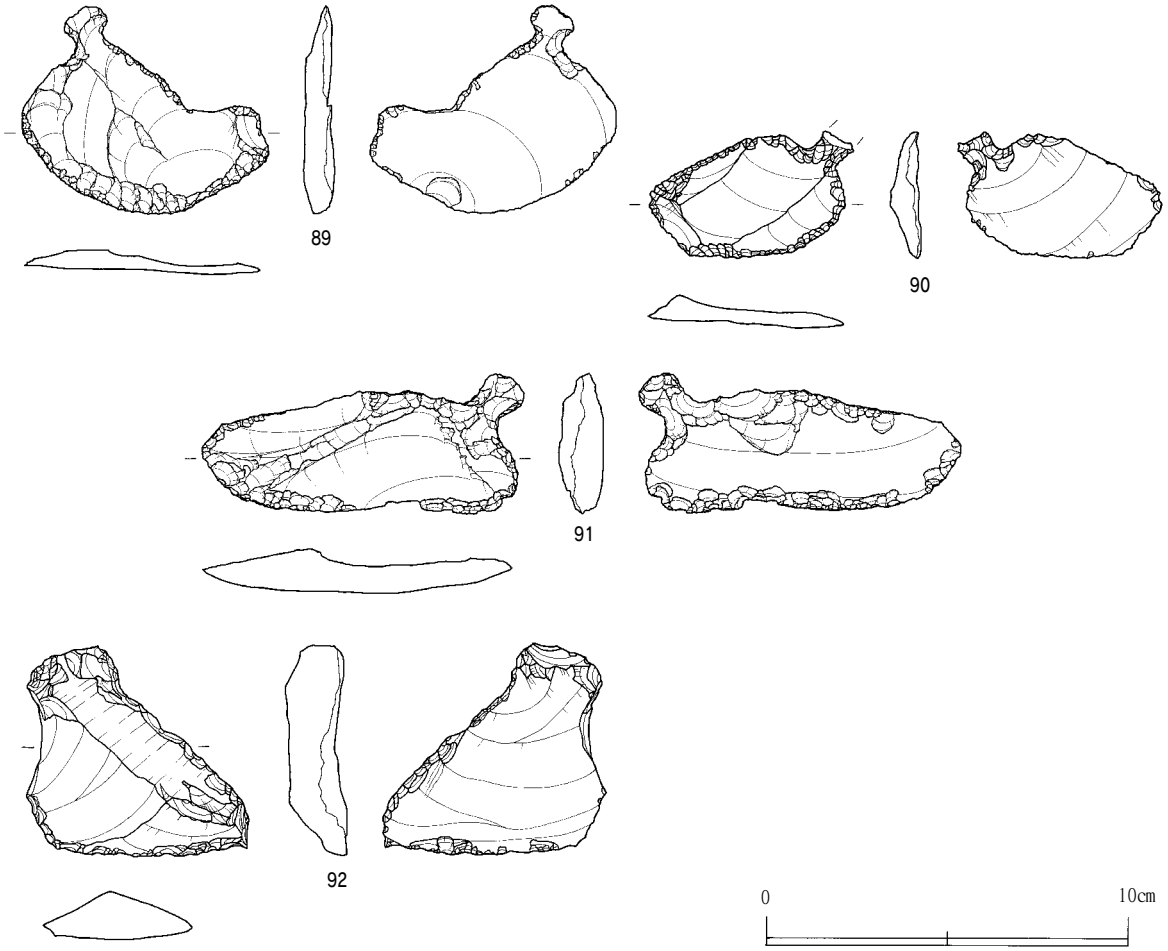
第44図　遺構外出土石器（５）石槍



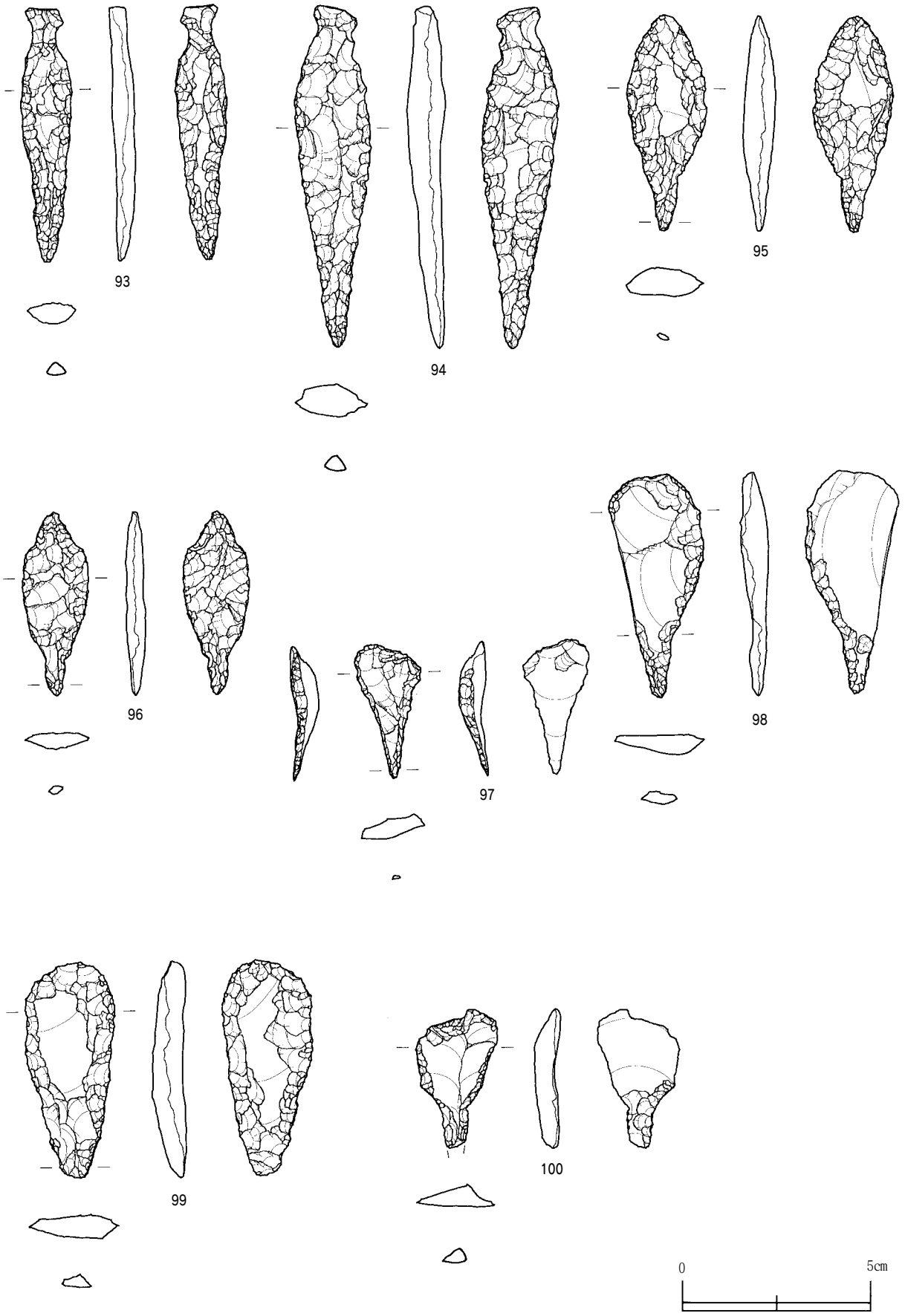
第45図　遺構外出土石器（６）石匙



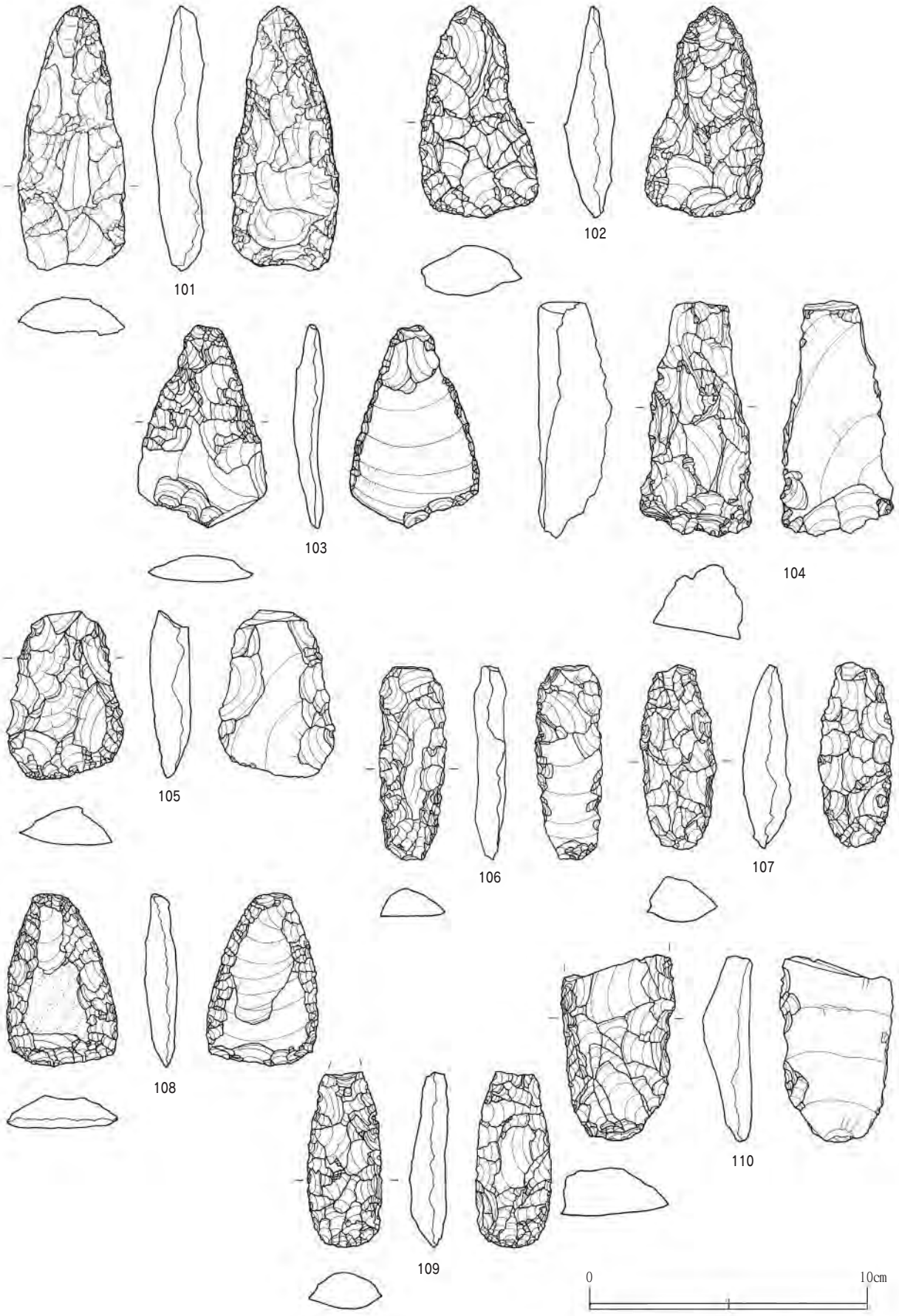
第46図　遺構外出土石器（７）石匙



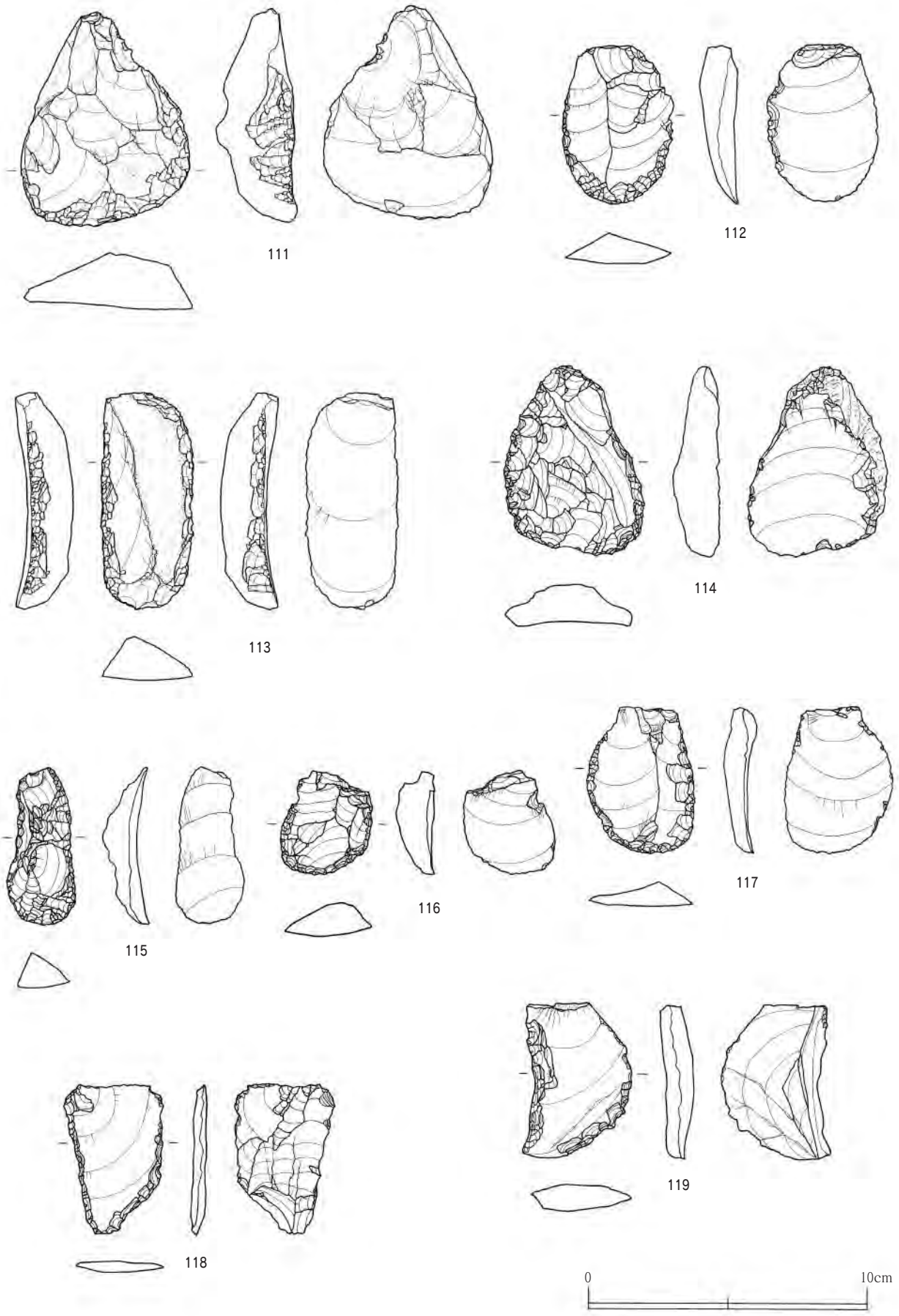
第47図　遺構外出土石器（８）石匙



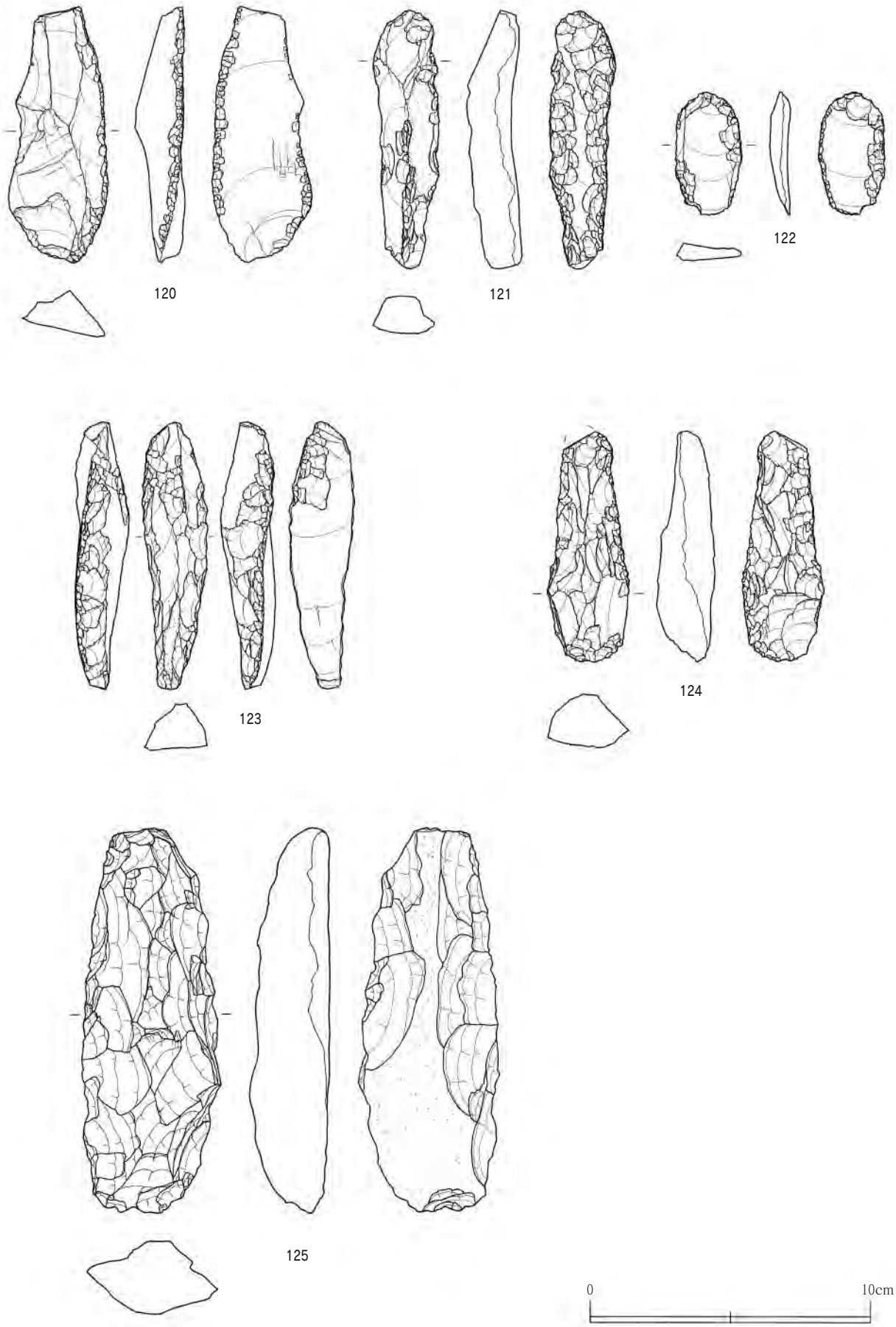
第48図　遺構外出土石器（９）石錐



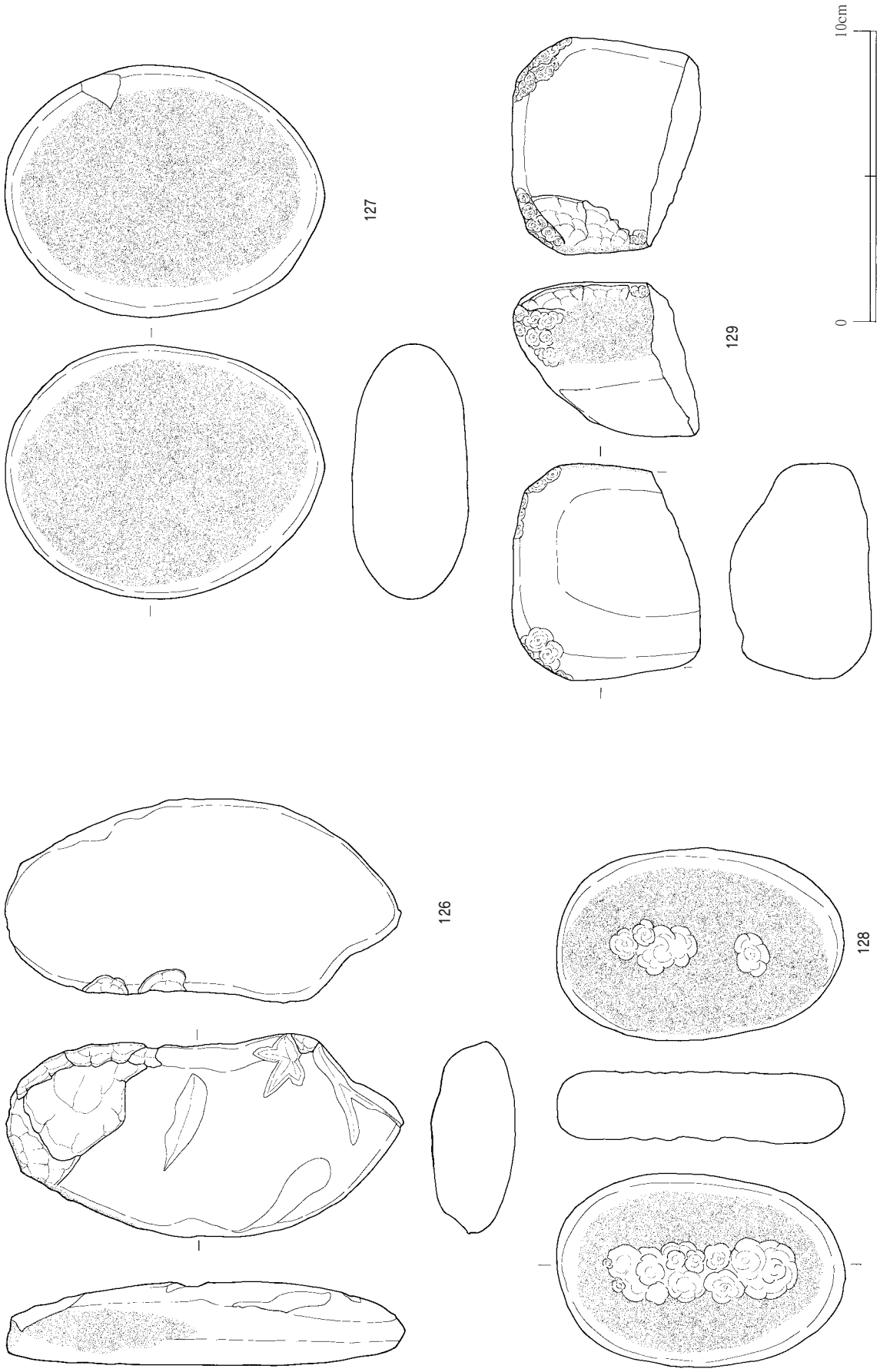
第49図　遺構外出土石器（10）石箆



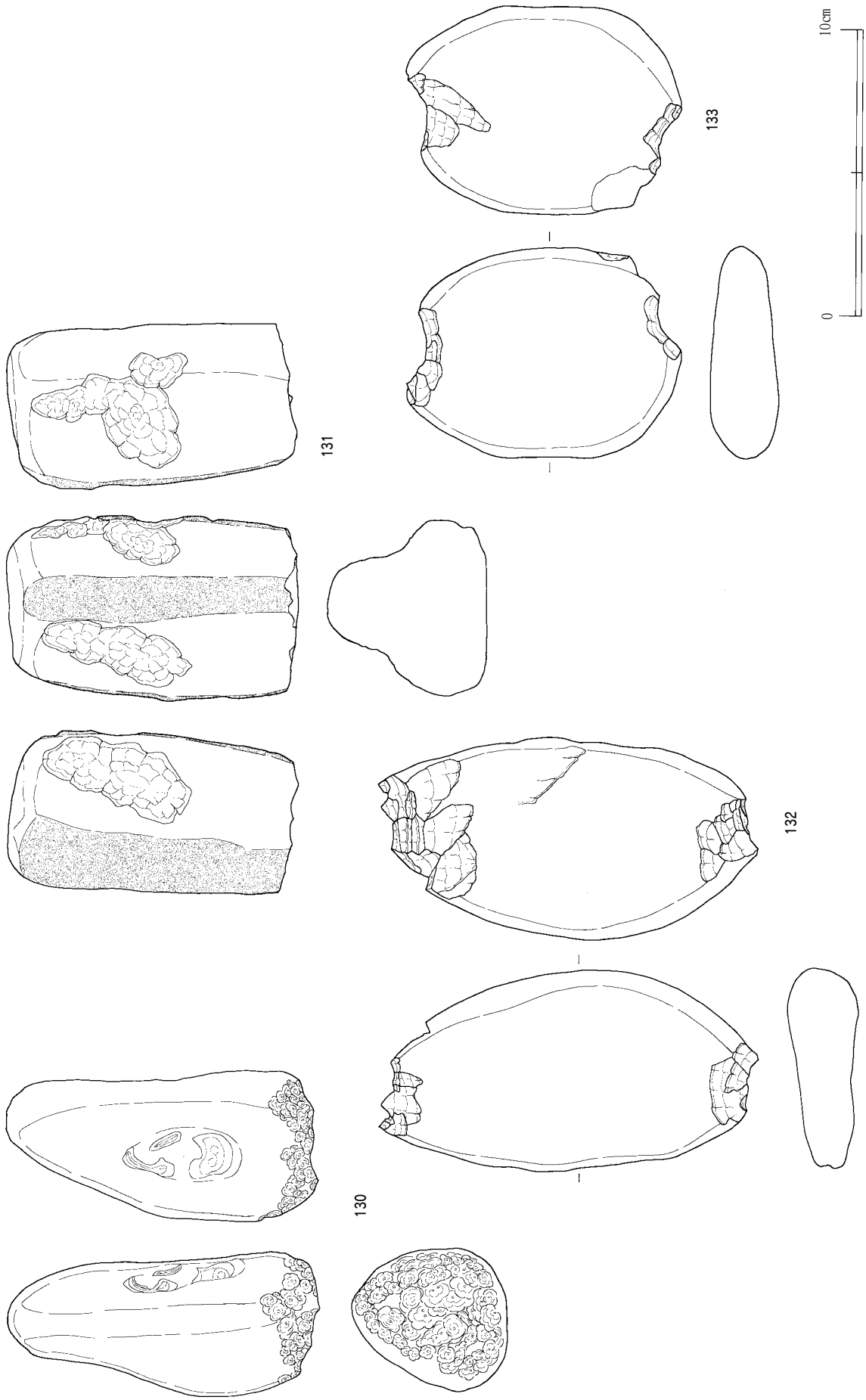
第50図　遺構外出土石器（11）掻器



第51図　遺構外出土石器（12）削器・打製石斧



第52図　遺構外出土石器（13）磨石



第53図　遺構外出土石器（14）敲石・凹石・石錘

第６表　遺構外出土石器観察表（１）

挿図番号	図版ページ	種別	出土グリッド・層位	出土日	長さ(底径)cm	最大幅cm	高さ(厚さ)cm	重量g	石質	備考
４０－１	３０	石鏃	ＬＮ４５　Ⅱ層	2005/ 9/ 9	2.4	2.2	0.7	1.3	頁岩	
４０－２	３０	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	3.1	2.4	0.6	2.6	頁岩	
４０－３	３０	石鏃	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/10/21	3.8	2.4	0.7	3.8	頁岩	アスファルト付着
４０－４	３０	石鏃	ＬＮ４５　Ⅲ層	2005/10/20	(3.5)	2.1	0.6	<2.9>	頁岩	先端部欠損
４０－５	３０	石鏃	ＭＡ４７　Ⅱ層	2005/10/ 3	(2.2)	(1.9)	0.5	<1.1>	頁岩	基部欠損
４０－６	３０	石鏃	ＭＢ４７　Ⅱ層	2005/ 9/22	2.4	1.4	0.4	0.7	頁岩	
４０－７	３０	石鏃	ＬＴ４９　Ⅲ層	2005/10/24	(4.3)	(1.7)	0.5	<2.8>	頁岩	基部欠損
４０－８	３０	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	4.7	3.4	0.8	10.0	頁岩	
４０－９	３０	石鏃	ＬＴ５３　Ⅱ層	2005/10/11	(2.5)	1.6	0.6	<1.7>	頁岩	先端部欠損
４０－１０	３０	石鏃	ＬＴ４４　Ⅱ層	2005/ 9/15	2.9	1.8	0.5	2.1	頁岩	
４０－１１	３０	石鏃	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/ 9/15	(3.4)	2.4	0.7	<4.0>	頁岩	先端部欠損
４０－１２	３０	石鏃	ＭＢ４７　Ⅱ層	2005/ 9/22	3.7	2.0	0.7	3.7	頁岩	
４０－１３	３０	石鏃	ＬＴ４９　Ⅱ層	2005/10/ 3	(2.9)	1.9	0.6	<2.2>	頁岩	先端部欠損
４０－１４	３０	石鏃	ＭＢ４７　Ⅱ層	2005/ 9/27	3.4	1.9	0.6	2.7	チャート	
４０－１５	３０	石鏃	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/10/18	3.2	1.6	0.4	1.3	頁岩	
４１－１６	３０	石鏃	ＭＢ５３　Ⅱ層	2005/ 9/29	(4.6)	2.1	0.7	<5.0>	頁岩	先端部欠損
４１－１７	３０	石鏃	ＭＡ５５　Ⅱ層	2005/ 9/16	3.9	1.8	0.6	2.9	頁岩	
４１－１８	３０	石鏃	ＬＮ４５　Ⅱ層	2005/ 9/ 9	3.7	1.6	0.6	2.4	頁岩	
４１－１９	３０	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 7	3.7	1.4	0.6	2.5	頁岩	
４１－２０	３０	石鏃	ＬＴ４６　Ⅲ層	2005/10/21	4.3	1.6	0.6	2.6	頁岩	
４１－２１	３０	石鏃	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/10/12	(3.8)	1.6	0.5	<2.5>	頁岩	先端部欠損
４１－２２	３１	石鏃	ＭＢ４７　Ⅱ層	2005/ 9/22	(3.8)	1.9	0.9	<5.7>	頁岩	先端部欠損
４１－２３	３１	石鏃	ＬＱ４５　Ⅱ層	2005/ 9/ 5	4.2	1.4	0.5	1.9	頁岩	
４１－２４	３１	石鏃	ＬＳ４６　撹乱	2005/ 9/12	(2.4)	1.4	0.5	<1.2>	頁岩	先端部欠損（若干）
４１－２５	３１	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	(3.0)	1.3	0.5	<1.3>	頁岩	
４１－２６	３１	石鏃	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/10/12	4.3	1.6	0.6	2.9	頁岩	
４１－２７	３１	石鏃	ＬＯ４６　Ⅱ層	2005/ 9/ 6	(5.0)	2.0	0.8	<4.4>	頁岩	
４１－２８	３１	石鏃	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/29	(3.3)	1.4	0.7	<2.1>	頁岩	
４１－２９	３１	石鏃	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/26	(3.0)	1.5	0.6	<2.3>	頁岩	先端部欠損　赤色　アスファルト付
４２－３０	３１	石鏃	ＬＯ４５　Ⅲ層上面	2005/ 9/16	4.7	1.5	0.5	2.2	頁岩	
４２－３１	３１	石鏃	ＬＲ４４　Ⅱ層	2005/ 9/29	4.4	1.4	0.7	3.1	頁岩	
４２－３２	３１	石鏃	ＬＯ４５　Ⅲ層上面	2005/ 9/16	5.3	1.9	0.6	3.9	頁岩	
４２－３３	３１	石鏃	ＭＣ４５　Ⅱ層	2005/10/ 5	(4.2)	2.4	0.7	4.7	頁岩	
４２－３４	３１	石鏃	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/ 9/15	4.0	1.8	0.7	3.2	頁岩	
４２－３５	３１	石鏃	ＬＯ４６　Ⅲ層	2005/ 9/ 8	3.5	1.3	0.6	1.9	頁岩	
４２－３６	３１	石鏃	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/10/12	3.3	0.8	0.4	0.9	頁岩	
４２－３７	３１	石鏃	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/26	2.5	1.3	0.3	0.7	頁岩	
４２－３８	３１	石鏃	ＬＯ４６　Ⅲ層	2005/ 9/ 8	3.4	1.3	0.5	1.1	頁岩	
４２－３９	３１	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	3.3	1.5	0.5	1.6	頁岩	
４２－４０	３１	石鏃	ＭＡ４５　Ⅱ層	2005/10/14	5.5	1.6	0.6	3.6	頁岩	
４２－４１	３１	石鏃	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/27	3.1	1.5	0.6	1.6	頁岩	
４２－４２	３１	石鏃	ＭＣ４７　Ⅱ層	2005/ 9/26	(3.7)	2.4	1.1	<6.4>	頁岩	先端部欠損
４２－４３	３１	石鏃	ＭＡ５５　Ⅱ層	2005/ 9/16	3.0	1.8	0.7	2.3	頁岩	
４２－４４	３１	石鏃	ＭＡ４５　Ⅱ層	2005/10/18	2.9	1.7	0.5	1.5	頁岩	
４３－４５	３１	石鏃	ＭＢ４７　Ⅱ層	2005/ 9/26	(3.7)	1.9	0.6	<3.4>	頁岩	先端部欠損（若干）
４３－４６	３１	石鏃	ＬＲ４４　Ⅱ層床上	2005/10/ 4	(4.1)	2.0	0.8	<4.8>	頁岩	先端部欠損
４３－４７	３１	石鏃	ＬＰ４６　Ⅲ層	2005/ 9/28	(3.2)	1.7	0.7	<2.8>	頁岩	先端部欠損
４３－４８	３１	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	(3.1)	1.5	0.5	<1.7>	頁岩	先端部欠損
４３－４９	３１	石鏃	ＬＰ４６　Ⅲ層	2005/ 9/28	(2.8)	1.9	0.6	<1.3>	頁岩	先端部欠損
４３－５０	３１	石鏃	ＭＣ４７　Ⅱ層	2005/ 9/27	(3.5)	1.8	0.6	<2.4>	頁岩	先端部欠損（若干）
４３－５１	３１	石鏃	ＭＢ５１　Ⅱ層	2005/10/ 3	(3.3)	1.3	0.6	<1.8>	頁岩	先端部欠損
４３－５２	３１	石鏃	ＬＴ４５　Ⅱ層	2005/10/18	(3.6)	1.6	0.6	<2.3>	頁岩	先端部欠損
４３－５３	３１	石鏃	ＭＢ５２　Ⅱ層	2005/ 9/29	4.6	1.9	0.6	3.7	頁岩	
４３－５４	３１	石鏃	ＬＴ４５　Ⅱ層	2005/10/18	4.0	1.6	0.6	2.7	頁岩	
４３－５５	３１	石鏃	ＭＢ４６　Ⅱ層	2005/10/ 5	3.3	1.5	0.5	1.7	頁岩	
４３－５６	３１	石鏃	ＬＳ４４　Ⅲ層	2005/ 9/13	(4.0)	2.2	0.6	<4.5>	頁岩	
４３－５７	３１	石鏃	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/ 9/15	(2.7)	1.6	0.6	<1.9>	頁岩	基部欠損
４３－５８	３１	石鏃	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 7	(3.2)	1.5	0.5	<1.6>	頁岩	基部欠損
４３－５９	３１	石鏃	ＬＳ４３　Ⅱ層	2005/ 9/26	(3.2)	1.4	0.7	<2.4>	頁岩	基部欠損
４３－６０	３１	石鏃	ＬＳ４３　Ⅱ層	2005/10/14	(3.1)	1.2	0.7	<1.6>	頁岩	基部欠損
４３－６１	３１	石鏃	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/10/12	(3.2)	1.8	0.7	<2.8>	頁岩	基部欠損
４４－６２	３２	石槍	ＬＮ４６　Ⅱ層	2005/ 9/ 6	13.0	3.8	2.0	73.5	頁岩	
４４－６３	３２	石槍	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	11.0	4.2	2.1	85.9	頁岩	
４４－６４	３２	石槍	ＬＴ４９　Ⅱ層	2005/ 9/26	5.1	2.3	1.7	16.2	頁岩	
４４－６５	３２	石槍	ＭＢ４４　Ⅱ層	2005/ 9/28	7.6	3.3	1.8	42.6	頁岩	
４４－６６	３２	石槍	ＬＴ４６　Ⅱ層	2005/ 9/12	(7.2)	3.0	1.5	<32.5>	頁岩	先端欠損
４４－６７	３２	石槍	ＬＴ４９　Ⅱ層	2005/ 9/20	(4.4)	2.8	0.9	<9.5>	頁岩	刃部欠損
４５－６８	３２	石匙	ＬＴ４５　Ⅲ層	2005/10/18	5.2	5.1	0.9	12.9	頁岩	
４５－６９	３２	石匙	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	4.7	4.9	1.0	16.0	頁岩	

（　）は残存値

第６表　遺構外出土石器観察表（２）

４５－７０	３２	石匙	ＭＢ４４　Ⅱ層	2005/ 9/29	6.5	4.9	1.4	29.7	頁岩	
４５－７１	３２	石匙	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	6.2	(6.5)	1.7	<47.9>	頁岩	先端欠損
４５－７２	３２	石匙	Ｌ０４５　Ⅲ層上面	2005/ 9/19	(3.4)	4.3	1.2	<8.6>	頁岩	基部欠損
４５－７３	３２	石匙	Ｌ０４７　Ⅱ層	2005/ 9/27	9.1	5.4	1.6	58.5	頁岩	
４５－７４	３２	石匙	ＬＴ４５　Ⅱ層	2005/10/17	6.2	3.9	1.0	16.3	頁岩	先端部欠損・基部欠損
４５－７５	３２	石匙	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/30	5.5	3.5	0.9	11.6	頁岩	
４５－７６	３３	石匙	ＬＲ４３　Ⅱ層	2005/ 9/21	6.8	3.5	1.1	12.2	頁岩	先端欠損
４５－７７	３３	石匙	ＬＴ４５　Ⅱ層	2005/10/17	5.8	2.6	0.8	7.5	頁岩	先端部欠損
４６－７８	３３	石匙	ＬＲ４６　Ⅲ層上面	2005/10/16	7.8	3.2	1.5	21.1	頁岩	
４６－７９	３３	石匙	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/27	6.7	2.4	0.6	6.6	頁岩	
４６－８０	３３	石匙	Ｌ０４６　Ⅲ層上面	2005/ 9/16	(5.2)	2.7	0.9	<6.9>	頁岩	先端部欠損
４６－８１	３３	石匙	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/18	5.3	3.5	0.9	10.3	頁岩	先端欠損
４６－８２	３３	石匙	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/ 9/ 2	6.4	5.4	0.8	33.1	頁岩	先端部欠損
４６－８３	３３	石匙	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 3	6.5	4.2	1.0	19.1	頁岩	先端欠損
４６－８４	３３	石匙	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 3	6.9	3.9	1.2	22.0	頁岩	
４６－８５	３３	石匙	ＭＡ４５　Ⅲ層	2005/10/19	6.8	4.6	1.4	33.7	頁岩	
４６－８６	３３	石匙	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/10/12	7.6	4.5	2.1	39.7	頁岩	
４６－８７	３３	石匙	ＬＴ４６　Ⅲ層	2005/10/19	8.3	3.4	1.3	35.0	頁岩	つまみ部欠損
４６－８８	３３	石匙	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 6	(5.1)	3.2	1.0	<15.9>	頁岩	先端欠損
４７－８９	３３	石匙	ＬＳ４６　Ⅲ層	2005/10/19	5.8	6.9	0.9	16.1	頁岩	
４７－９０	３３	石匙	ＬＳ４９　Ⅱ層	2005/ 9/30	(3.6)	5.6	0.9	<10.1>	頁岩	
４７－９１	３３	石匙	Ｌ０４６　表土中	2005/ 9/ 2	3.9	9.0	1.3	34.8	頁岩	
４７－９２	３３	石匙	ＬＴ４５　Ⅱ層	2005/ 9/22	5.8	6.2	1.7	43.7	頁岩	
４８－９３	３４	石錐	Ｌ０４６　Ⅲ層上面	2005/10/16	6.8	1.5	0.7	5.0	頁岩	
４８－９４	３４	石錐	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 7	9.1	2.1	1.1	12.7	頁岩	
４８－９５	３４	石錐	ＬＲ４３　Ⅱ層	2005/ 9/28	5.8	2.2	0.9	6.3	頁岩	
４８－９６	３４	石錐	ＭＡ５０　Ⅲ層	2005/10/27	4.9	1.8	0.6	3.4	頁岩	
４８－９７	３４	石錐	Ｌ０４６　Ⅱ層	2005/ 9/ 6	3.7	1.8	0.8	2.5	頁岩	
４８－９８	３４	石錐	ＬＳ５１　Ⅱ層	2005/10/14	6.0	2.6	0.8	8.1	頁岩	
４８－９９	３４	石錐	ＬＲ４３　Ⅱ層	2005/ 9/ 7	5.7	2.4	1.0	10.9	頁岩	
４８－１００	３４	石錐	ＬＲ４７　Ⅲ層上面	2005/ 9/27	(3.8)	2.2	0.8	<3.4>	頁岩	先端部欠損
４９－１０１	３４	石篦	排土中	2005/ 9/15	9.6	3.9	2.0	58.0	頁岩	
４９－１０２	３４	石篦	ＬＳ４６　Ⅲ層	2005/10/19	7.7	4.3	1.9	42.3	頁岩	
４９－１０３	３４	石篦	ＬＴ４６　Ⅲ層	2005/10/21	7.3	4.7	1.1	27.3	頁岩	失敗作
４９－１０４	３４	石篦	ＭＣ４７　Ⅱ層	2005/ 9/27	8.5	4.1	2.7	80.2	頁岩	
４９－１０５	３４	石篦	ＬＴ４６　Ⅲ層	2005/10/21	6.1	4.2	1.4	33.5	頁岩	
４９－１０６	３４	石篦	ＬＳ４３　Ⅱ層	2005/ 9/15	7.0	2.4	1.2	22.4	頁岩	
４９－１０７	３４	石篦	ＬＲ４３　Ⅱ層	2005/ 9/21	6.7	2.7	1.7	27.4	頁岩	先端欠損
４９－１０８	３４	石篦	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 3	6.3	4.0	1.2	31.2	頁岩	
４９－１０９	３４	石篦	ＬＳ４８　Ⅱ層	2005/ 9/ 7	(6.4)	2.7	1.3	<24.6>	頁岩	先端欠損
４９－１１０	３４	石篦	ＬＲ４８　Ⅱ層	2005/ 9/ 5	(6.7)	4.1	1.8	<49.8>	頁岩	刃部欠損
５０－１１１	３５	掻器	ＬＲ４７　Ⅱ層	2005/ 9/20	7.8	6.1	2.9	106.8	頁岩	
５０－１１２	３５	掻器	ＬＳ４６　Ⅲ層	2005/10/19	5.7	4.1	1.4	24.9	頁岩	
５０－１１３	３５	掻器	ＬＲ４４　Ⅱ層	2005/ 9/20	7.9	3.4	2.1	52.0	頁岩	
５０－１１４	３５	掻器	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 7	6.9	5.1	1.7	44.7	頁岩	
５０－１１５	３５	掻器	ＬＴ５２　Ⅱ層	2005/10/12	5.7	2.5	1.7	14.1	頁岩	
５０－１１６	３５	掻器	ＭＢ４４　Ⅱ層	2005/ 9/28	3.3	3.7	1.4	15.0	頁岩	
５０－１１７	３５	掻器	ＭＢ４５　Ⅱ層	2005/10/ 7	5.3	3.9	1.2	16.9	頁岩	
５０－１１８	３５	削器	ＬＴ４９　Ⅲ層	2005/10/24	5.4	3.6	0.6	10.0	頁岩	
５０－１１９	３５	削器	ＬＳ４４　Ⅱ層	2005/ 9/29	5.6	3.9	1.3	24.1	頁岩	つまみ部欠損
５１－１２０	３５	削器	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/10/13	9.3	3.6	1.8	39.8	頁岩	
５１－１２１	３５	削器	ＬＴ４８　Ⅱ層	2005/10/13	9.3	2.4	2.1	35.9	頁岩	サイドスクレーパー
５１－１２２	３５	削器	ＬＲ４４　Ⅱ層	2005/10/ 7	4.5	2.4	0.8	6.9	頁岩	
５１－１２３	３５	削器	ＭＢ５２　Ⅱ層	2005/ 9/29	9.6	2.4	2.0	39.2	頁岩	サイドスクレーパー
５１－１２４	３５	削器	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/ 9/ 5	(8.3)	3.0	2.6	<42.6>	頁岩	先端欠損
５１－１２５	３５	石斧	斜面通路　黒土	2005/ 8/30	13.7	5.0	2.9	209.6	頁岩	
５２－１２６	３６	磨石	ＬＮ４６　Ⅱ層	2005/ 9/ 8	13.7	7.0	2.8	269.1	流紋岩	
５２－１２７	３６	磨石	ＭＢ４７　Ⅲ層	2005/10/26	10.9	8.7	4.0	533.4	流紋岩	
５２－１２８	３６	磨石	ＬＲ４３　Ⅱ層	2005/ 9/21	9.9	6.7	2.4	276.6	流紋岩	敲いてから磨っている
５２－１２９	３６	磨石	ＬＰ４６　Ⅱ層	2005/ 9/ 6	(6.4)	7.4	5.3	<316.2>	流紋岩	
５３－１３０	３６	敲石	ＬＲ４５　Ⅱ層	2005/10/15	10.9	4.5	5.3	281.8	安山岩	
５３－１３１	３６	凹石	ＬＴ４９　Ⅲ層	2005/10/21	10.2	6.5	5.8	572.9	砂岩	
５３－１３２	３６	石錘	ＬＴ４４　Ⅲ層	2005/ 9/15	13.3	7.1	2.4	245.7	安山岩	
５３－１３３	３６	石錘	ＬＳ４５　Ⅱ層	2005/ 9/ 9	9.6	7.4	2.4	221.7	安山岩	

（　）は残存値

第５章　自然科学的分析

家ノ前遺跡放射性炭素年代測定（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（１）遺跡の位置

家ノ前遺跡は、秋田県由利本荘市米坂（北緯39°26′28″、東経140°４′39″）に所在する。

（２）測定の目的

家ノ前遺跡は縄文時代の遺跡が主体である。竪穴住居跡は複式炉の埋設土器から年代は推定できたが、それ以外のフラスコ状土坑は年代を推定できる遺物が少ない。そのため遺構覆土から出土した炭化物の年代測定を行うことによって時期を確定し、遺構の年代や新旧関係を把握することを目的とする。

（３）測定対象試料

測定試料は、SKT06底部から出土した炭化物（試料１：IAAA-51896）、SK11底部から出土したの炭化物（試料２：IAAA-51897）、SKF27底部から出土した炭化物（試料3：IAAA-51898）、SX30底部から出土した炭化物（試料4：IAAA-51899）、SKF35の炭化物（試料5：IAAA-51900）、SKF55床面直上から出土した炭化物（試料6：IAAA-51901）、SKP71底部から出土した炭化物（試料７：IAAA-51902）、合計７点である。試料は採取後、アルミホイルに包まれ、さらにビニール袋に入れて保管された。

（４）化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。

3）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。

6）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（5）測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

（6）算出方法

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。

$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$　（1）

$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000$　（2）

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の14C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$　($^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき)

または　$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$　($^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき)

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$　(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon)がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$ (‰)

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$ (%)

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP)が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は、１桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

6）較正暦年代の計算では、IntCal04データベースを用い、OxCalv3.10較正プログラムを使用した。

（７）測定結果

SKT06底部から出土した炭化物（試料１：IAAA-51896）は2816±33yrBPの^{14}C年代であり、縄文時代晩期に相当する。SK11内の炭化物（試料２：IAAA-51897）は655±29yrBPの^{14}C年代であり、鎌倉時代に相当する。SKF27底部から出土した炭化物（試料３：IAAA-51898）は4882±35yrBPの^{14}C年代であり、縄文時代前期に相当する。SX30底部から出土した炭化物（試料４：IAAA-51899）は4791±36yrBPの^{14}C年代であり、縄文時代前期に相当する。SKF35内の炭化物（試料５：IAAA-51900）は4784±36yrBPの^{14}C年代であり、縄文時代前期に相当する。SKF55床面直上から出土した炭化物（試料６：IAAA-51901）は4819±36yrBPの^{14}C年代であり、縄文時代前期に相当する。SKP71底部から出土した炭化物（試料７：IAAA-51902）は4735±40yrBPの^{14}C年代であり、縄文時代前期に相当する。

参考文献

Stuiver,M.and Polash,H.A.(1977)Discussion:Reporting of 14C data.Radiocarbon,19:355-363

第８表　暦年代較正の結果

Cood　No.	遺構番号	暦年較正（yrcalBP）	libby　Age(yrBP)
51896	SKT06	1070BC-890BC（93.9%） 880BC-840BC（1.5%）	２８１６　±３３
51897	SK11	1270AD-1330AD（45.3%） 1340AD-1400AD（50.1%）	６５５　±２９
51898	SKF27	3760BC-3740BC（1.9%） 3720BC-3630BC（92.1%） 3560BC-3540BC（1.4%）	４８８２　±３５
51899	SX30	3660BC-3510BC（94.1%） 3400BC-3380BC（1.3%	４７９１　±３６
51900	SKF35	3650BC-3510BC（93.1%） 3410BC-3380BC（2.3%）	４７８４　±３６
51901	SKF55	3700BC-3680BC（1.0%） 3679BC-3520BC（94.4%）	４８１９　±３６
51902	SKP71	3640BC-3490BC（66.0%） 3460BC-3370BC（29.4%）	４７３５　±４０

第９表　放射線炭素年代測定の結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-51896	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 1-SKT06	Libby Age(yrBP) ： 2,820 ± 30 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -26.13 ± 0.88 Δ14C(‰) ＝ -295.7 ± 2.9 pMC(%) ＝ 70.43 ± 0.29
#1149-1	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -297.4 ± 2.6 pMC(%) ＝ 70.26 ± 0.26 Age (yrBP) ： 2,840 ± 30
IAAA-51897	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 2-SK11	Libby Age(yrBP) ： 660 ± 30 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -27.83 ± 0.68 Δ14C(‰) ＝ -78.3 ± 3.4 pMC(%) ＝ 92.17 ± 0.34
#1149-2	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -83.6 ± 3.1 pMC(%) ＝ 91.64 ± 0.31 Age (yrBP) ： 700 ± 30
IAAA-51898	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 3-SKF27	Libby Age(yrBP) ： 4,880 ± 40 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -25.04 ± 0.74 Δ14C(‰) ＝ -455.4 ± 2.4 pMC(%) ＝ 54.46 ± 0.24
#1149-3	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -455.5 ± 2.3 pMC(%) ＝ 54.45 ± 0.23 Age (yrBP) ： 4,880 ± 30
IAAA-51899	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 4-SX30	Libby Age(yrBP) ： 4,790 ± 40 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -23.65 ± 0.87 Δ14C(‰) ＝ -449.3 ± 2.5 pMC(%) ＝ 55.07 ± 0.25
#1149-4	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -447.7 ± 2.3 pMC(%) ＝ 55.23 ± 0.23 Age (yrBP) ： 4,770 ± 30
IAAA-51900	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 5-SKF35	Libby Age(yrBP) ： 4,780 ± 40 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -28.09 ± 0.81 Δ14C(‰) ＝ -448.8 ± 2.5 pMC(%) ＝ 55.12 ± 0.25
#1149-5	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -452.2 ± 2.3 pMC(%) ＝ 54.78 ± 0.23 Age (yrBP) ： 4,840 ± 30
IAAA-51901	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 6-SKF55	Libby Age(yrBP) ： 4,820 ± 40 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -25.98 ± 0.79 Δ14C(‰) ＝ -451.2 ± 2.5 pMC(%) ＝ 54.88 ± 0.25
#1149-6	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -452.3 ± 2.3 pMC(%) ＝ 54.77 ± 0.23 Age (yrBP) ： 4,840 ± 30
IAAA-51902	試料採取場所 ： 秋田県由利本荘市米坂字家ノ前 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号) ： 7-SKP71	Libby Age(yrBP) ： 4,740 ± 40 δ13C(‰)、(加速器) ＝ -28.47 ± 0.82 Δ14C(‰) ＝ -445.4 ± 2.8 pMC(%) ＝ 55.46 ± 0.28
#1149-7	(参考) δ13C の補正無し	δ14C(‰) ＝ -449.3 ± 2.6 pMC(%) ＝ 55.07 ± 0.26 Age (yrBP) ： 4,790 ± 40

第６章　まとめ

既述のとおり、今回の家ノ前遺跡の発掘調査では、縄文時代前期のフラスコ状土坑17基、土坑９基、焼土遺構11基、柱穴４基、柱穴様ピット１基、性格不明遺構２基の計44遺構と、縄文時代中期の竪穴住居跡５軒、土坑９基、焼土遺構１基、陥し穴１基、柱穴様ピット７基、計23遺構の合わせて67の遺構を検出した。遺物は縄文土器・石器が出土し、総出土量は中コンテナ（容量18㍑）換算で16箱（縄文土器８箱・石器８箱）である。本遺跡では、縄文時代前期後半と、縄文時代中期後半には集落を営んでいたことがうかがえる。しかし、長期間にわたり連続して集落を営んでいたかは、調査面積が少ないためはっきりしない。遺跡の性格を検討する上で大きな意味を持つと思われる検出遺構と出土遺物について記述し、概括する。

フラスコ状土坑について

遺跡は東側に延びる舌状台地の先端部に立地しており、17基のフラスコ状土坑は台地縁辺部の平坦面から緩斜面にかけての、所謂肩部北側に多く確認されている。

平面形は、開口部の形状がはっきりしたものは少ないが、断面形がフラスコ状を呈するものは原形をとどめていると判断した。原形をとどめている土坑はSKF27、SKF44の２基である。底径は1.2mから2.2mまであり、確認面からの深さも、0.7mから1.8mと多様で、規則性は認められなかった。

断面形は、開口部が外反するフラスコ型、頸部はあるが開口部のはっきりしない富士山型、頸部の無い台形の３種に分けるのが多いが、形がくずれたり、重複が多いため分類まではしていない。

底面施設としての、副穴が確認されたフラスコ状土坑はSKF44とSKF60の２基のみで、階段を装置する穴や上部構造を支える柱穴とも考えられる。

上部構造は、覆いや屋根がかけられていた痕跡は確認していない。

覆土の堆積状況から、ほとんどのフラスコ状土坑は人為的に埋め戻されたものと判断した。確認面では覆土と地山を区別するにも微妙で、調査当初には、フラスコ状土坑があることを見逃していた。覆土は比較的全体がモザイク状を呈するものが多く、短期間の間に、新しくフラスコ状土坑を作っては、その排土で古いフラスコ状土坑を埋めていくということが行われていたと思われる。また西側斜面部ではフラスコ状土坑をつくったときに出た排土が堆積している事を確認した。なぜ埋め戻したものがほとんどなのかははっきりしないが、危険防止のためと考えるのが、まず思いつくことである。県内の池内遺跡や杉沢台遺跡などでは、貯蔵穴としての使用目的終了後に土器や貝殻などを廃棄する場に転用しているが、本遺跡ではそのような再利用は確認されていない。

構築された時期は、出土した土器からほとんど縄文時代前期の後半と思われるが、個々の年代を特定できる手がかりは少なく、比較的短期間の使用と思われる。

柱穴列について

調査区の北側に位置し、この柱穴列の北側には遺構は確認できなかったことから集落の北端にあたる遺構と思われる。はじめ、掘立柱建物跡にならないかと柱穴の間隔を測り、周囲をよく精査したが、

この柱穴列以外には確認できなかった。柱穴の間隔は北から1.52m、2.12m、2.3mとなっており、これには規則性は感じられない。また柱穴の直径も北から0.64m、0.86m、1.08m、0.56m、とまちまちで、深さが、0.72m、0.76m、0.74m、0.3mと若干共通性がある程度である。地形的にみて、集落とその外側を区別する建造物と推定されるが上部構造は不明である。柱痕の太さが25㎝と30㎝あることや深さから考えかなり高さのある丸太材を使用したものと思われる。集落のシンボル的なトーテム・ポールを立てていた可能性も考えられる。

竪穴住居跡について

調査のはじめ、調査区の平坦部南側で大型の長楕円形をした黒色のプラン（長軸10m、短軸５m）を確認した。前期の大形竪穴住居跡ではないかと考え、十字状ベルトを設定し、慎重に掘り進めていったが、明確な床面や壁は見つけることができなかった。前期の竪穴住居跡では立ち上がりが不明なこともあるので、決定的な根拠となる柱穴の検出を慎重に進めたが、柱穴と思われる痕跡は見つけられなかった。最後に思い切って長軸に直交してサブトレンチを入れて断面を確認したが、明確な床や壁が確認できなかったため、自然にできた窪みと判断した。前期の住居跡はこの長楕円形の窪みを境として、南西側の平坦部に構築されていたものと思われる。この調査区外の平坦部では表土中から石器を採取しており、不自然な窪みも確認できることから、ある程度大きな集落の存在が推定される。

縄文時代中期の竪穴住居跡は５軒検出したが、平面形はいずれも円形に近く、規模も同程度である。縄文時代中期の竪穴住居跡としては平均的な大きさである。また、竪穴住居跡を炉の形態で分けると、複式炉４基、地床炉１基となる。また複式炉の位置に規則制がないか調べたが、規則性は認められなかった。複式炉は形状で分類すると、土器埋設部保有３基、馬蹄形石囲い１基となる。

この中で特徴的な竪穴住居跡はSI23である。SI23は床面の広範囲にわたり、焼土ブロックや炭が分布していた。これは土葺き屋根に貼られていた粘土質土が焼けたものと推測した。

また、この住居の炉に使われた埋設土器の内部上面に、１個の土器が置かれており、住居の廃絶儀式として火をつけた可能性も考えられる。

縄文時代前期にはフラスコ状土坑をつくり、貯蔵場所にしていた区域にも、中期には住居をつくっていたことから、このころの集落の住居数が前期よりも多くなったか、居住域が東側に移ったものと推測する。

土器について

縄文時代前期の土器のほとんどは調査区西側の斜面部で、破片として比較的まとまって出土した。ちょうどフラスコ状土坑群から西に下りた場所にあたる。同一個体として接合できた土器も４点ほどあり、不要になった土器を斜面部に捨てていたことがうかがわれる。土器の形式は大木６式に比定されるものと、円筒下層ｄ式に比定されるものの２種類確認できた。家ノ前遺跡では、縄文時代前期には大木式文化圏と円筒式文化圏の交流があり、大木６式土器と円筒下層ｄ式が併行関係にあったことも明らかになった。

縄文時代中期の土器は、ほとんどが竪穴住居跡の炉に埋設されていたものである。土器の形式は大木10式に比定されることから、縄文時代中期の末葉に集落が営まれていたものと思われる。

石器について

石器の種別と出土点数からは、石鏃と石匙の割合が高く、打製石斧などの大型の石器は低い傾向が出ている。地形を見ると、北側に北由利丘陵地が広がっていることから、狩猟場となっていたことは想像される。狩猟が日常的に行われていた可能性は考えられる。石錐の中でつまみのついた石器（第48図93と94）を鳥海町の提鍋遺跡では有撮石器と呼び、本遺跡でも出土している。類例の少ない石器であるため、今後の研究で関連性や分布範囲が明らかにされることが期待される。

引用・参考文献

秋田県教育委員会　『池内遺跡』秋田県文化財調査報告書第268集　1997.3（平成９年）
秋田県教育委員会　『虫内遺跡』秋田県文化財調査報告書第274集　1998.3（平成10年）
秋田県教育委員会　『古館堤頭遺跡』秋田県文化財調査報告書第338集　2002.3（平成14年）
秋田県教育委員会　『堀量遺跡』秋田県文化財調査報告書第367集　2004.1（平成16年）
秋田県教育委員会　『龍門寺茶畑・向山遺跡』秋田県文化財調査報告書第406集　2004.3（平成16年）
秋田県教育委員会　『烏野上岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第406集　2006.3（平成18年）
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第413集　2006.3（平成18年）
青森県教育委員会　『館野遺跡』青森県文化財調査報告書第119集　1989.3（平成元年）
秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書－坂ノ上Ｆ遺跡－』
鳥海町教育委員会　『堤鍋遺跡』鳥海町文化財調査報告書　1998（平成10年）
山内清男　『日本先史土器の縄文』先史考古学会　1979（昭和54年）
冨樫泰時　『秋田県における北陸系土器について』本荘市史研究第四号　1984（昭和59年）
新海和広　『秋田県における複式炉の様相』日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集

遠景（西→）

全景（北→）

図版2

ＳＫＦ27断面（南→）

ＳＫＦ27炭化物出土状況
（南→）

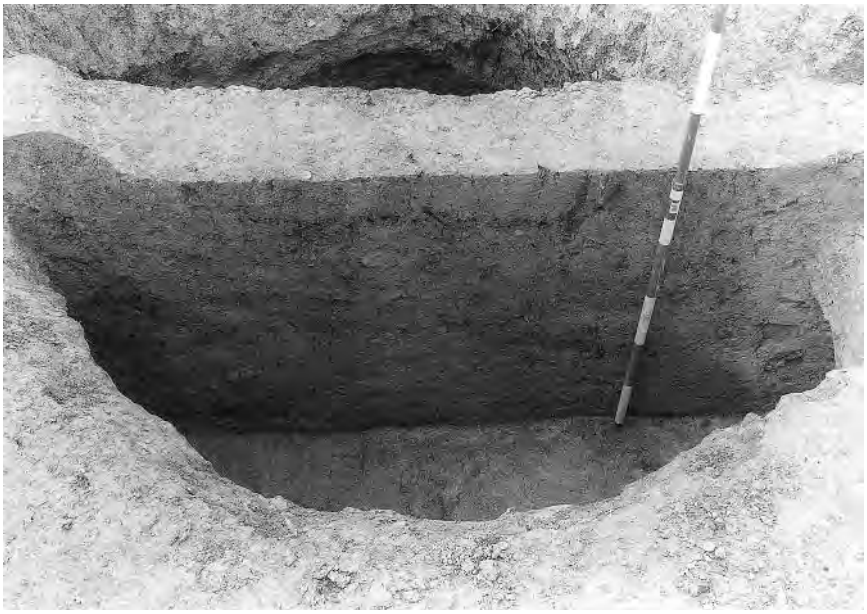
ＳＫＦ27完掘（南→）

ＳＫＦ34・36断面（東→）

ＳＫＦ34・36完掘（南東→）

図版4

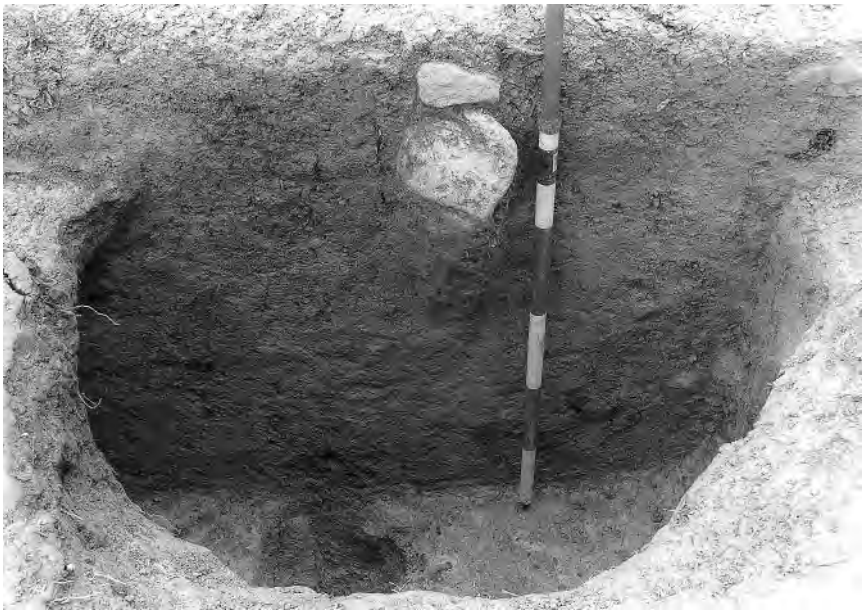
ＳＫＦ39完掘（南→）



ＳＫＦ39・77断面（東→）

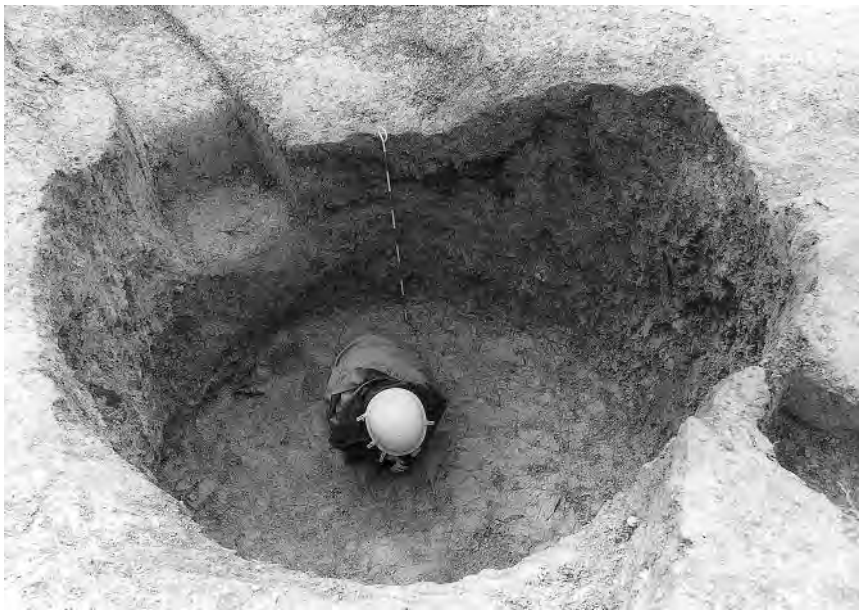
ＳＫＦ62・68・69完掘作業

ＳＫＦ44断面（南→）



ＳＫＦ44完掘（西→）

ＳＫＦ61完掘（北東→）



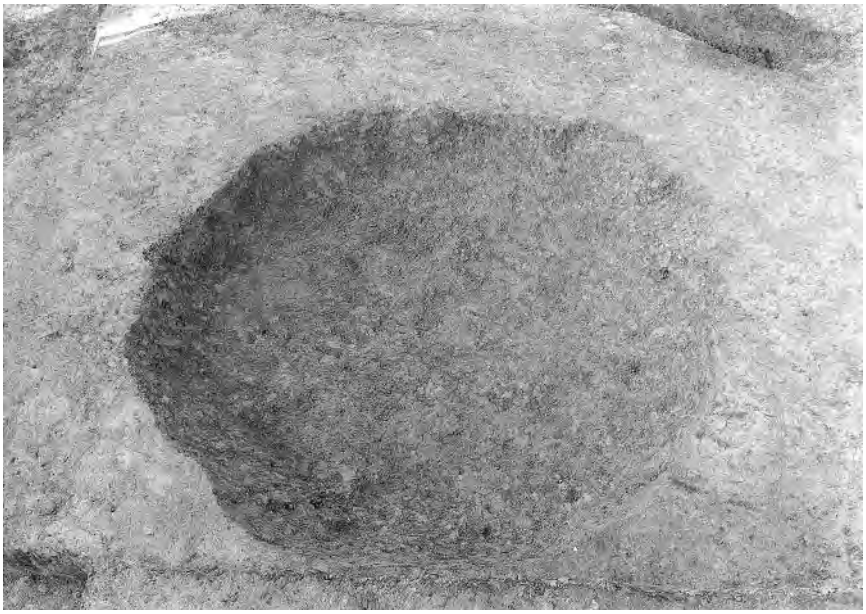
フラスコ状土坑完掘作業

フラスコ状土坑群（西→）

ＳＫ30検出状況（北→）

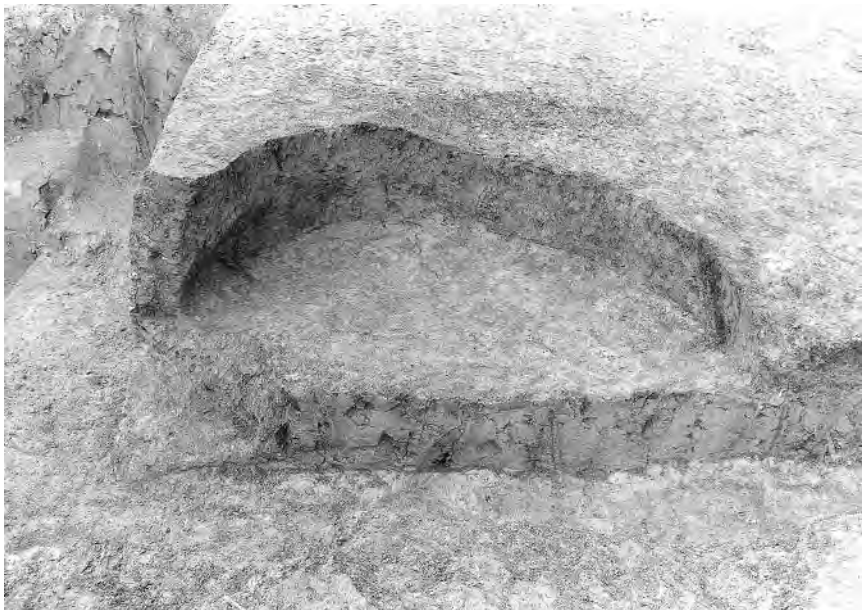
ＳＫ30完掘（南→）

図版8



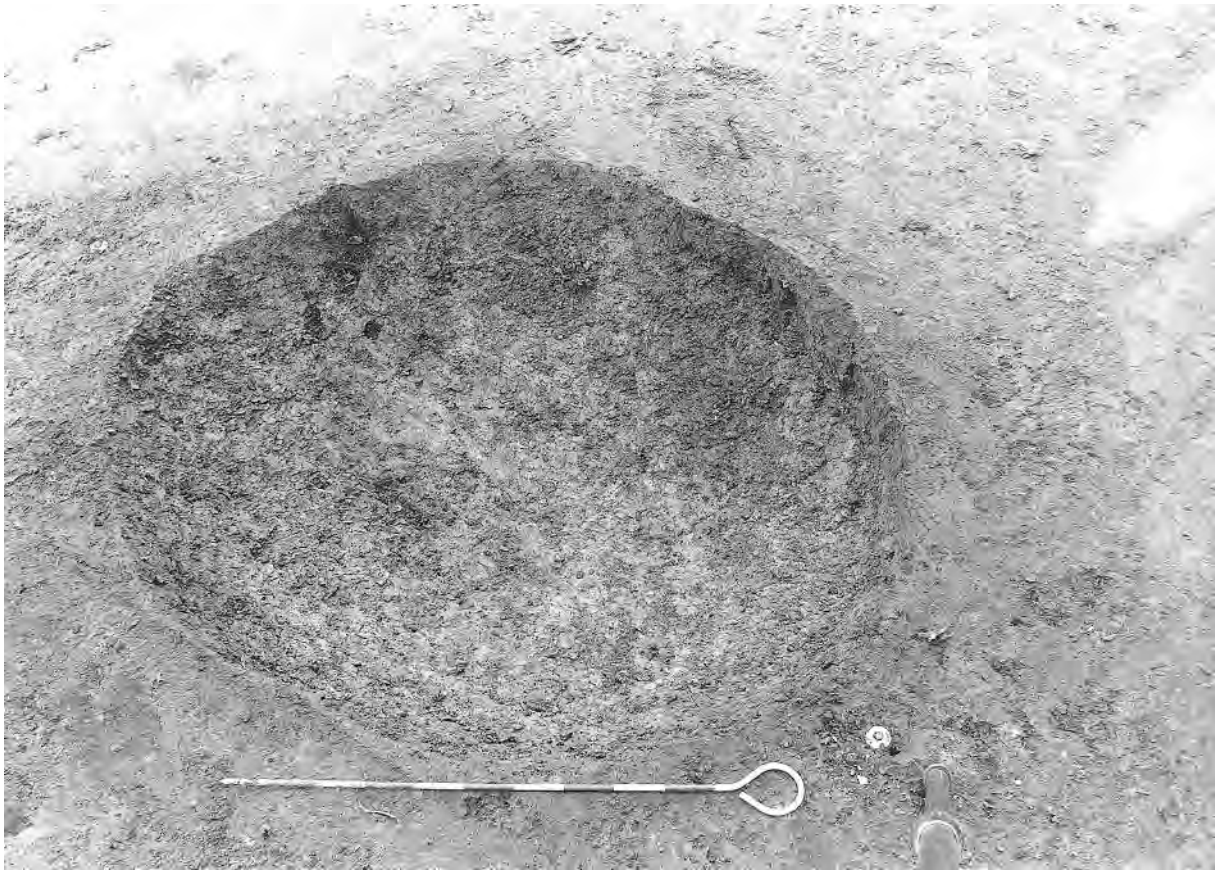
ＳＫ37完掘（北東→）

ＳＫ38完掘（南西→）



ＳＫ42完掘（西→）

ＳＮ47断面（南→）



ＳＮ47完掘（南→）

ＳＫＰ58断面（北→）

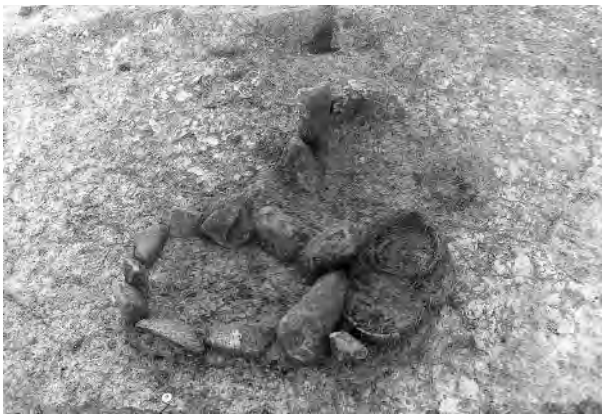
ＳＫＰ65断面（北→）

ＳＫＰ71・65・58・70柱穴列（北→）

フラスコ状土坑群（南東→）

ＳＩ03完掘（北→）

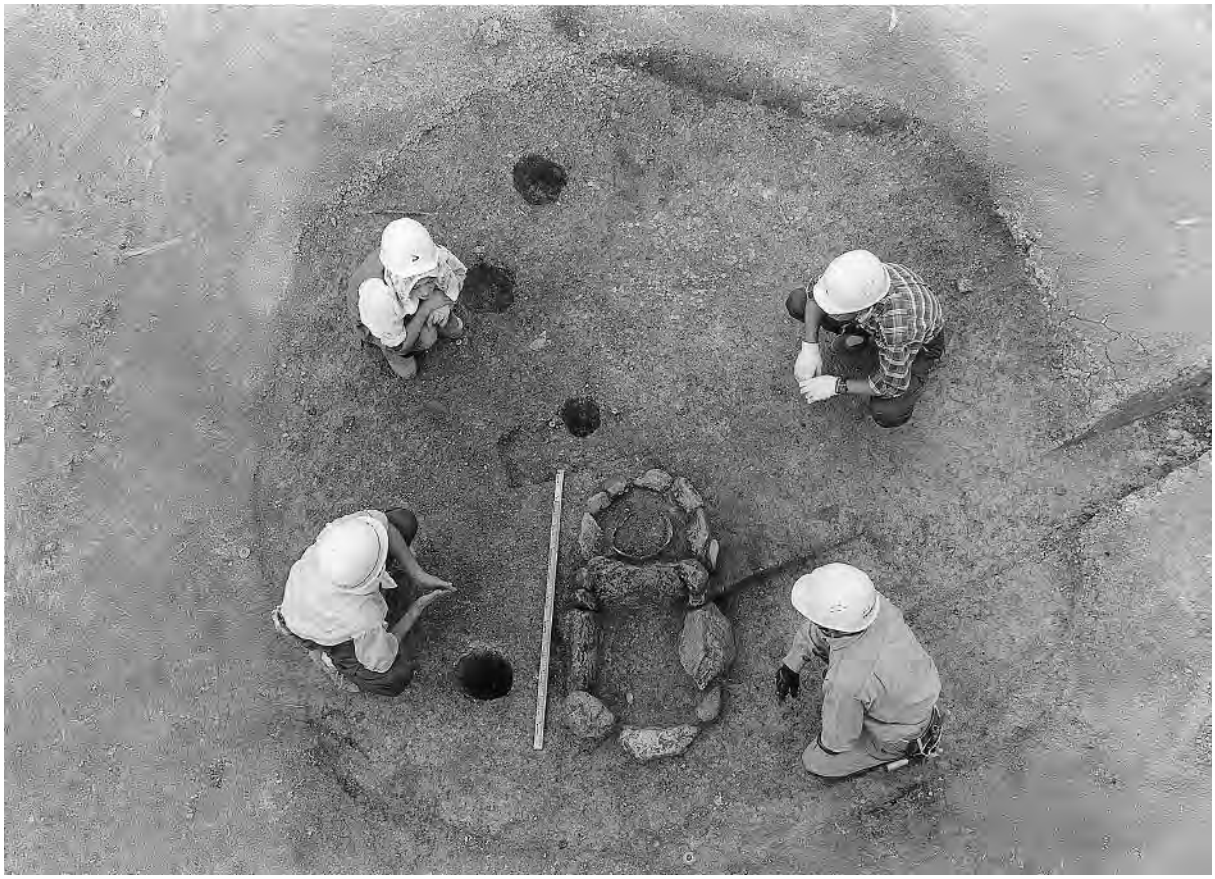
ＳＩ03検出状況（北→）



ＳＩ03炉完掘（北→）

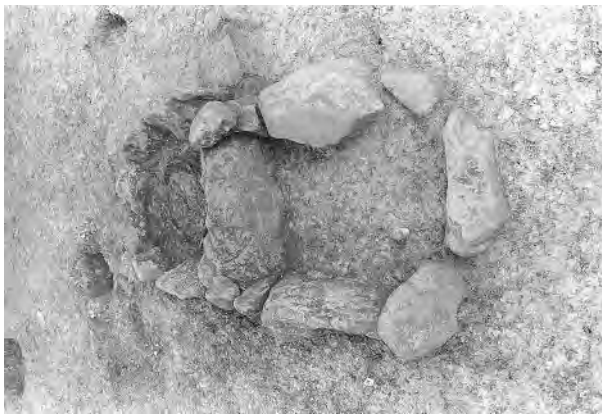
ＳＩ03炉跡土器埋設部側面（西→）

ＳＩ03炉跡土器埋設部断面（西→）



ＳＩ04完掘（南→）

ＳＩ04検出状況（南→）



ＳＩ04複式炉（南西→）

ＳＩ04複式炉土器埋設部側面（東→）

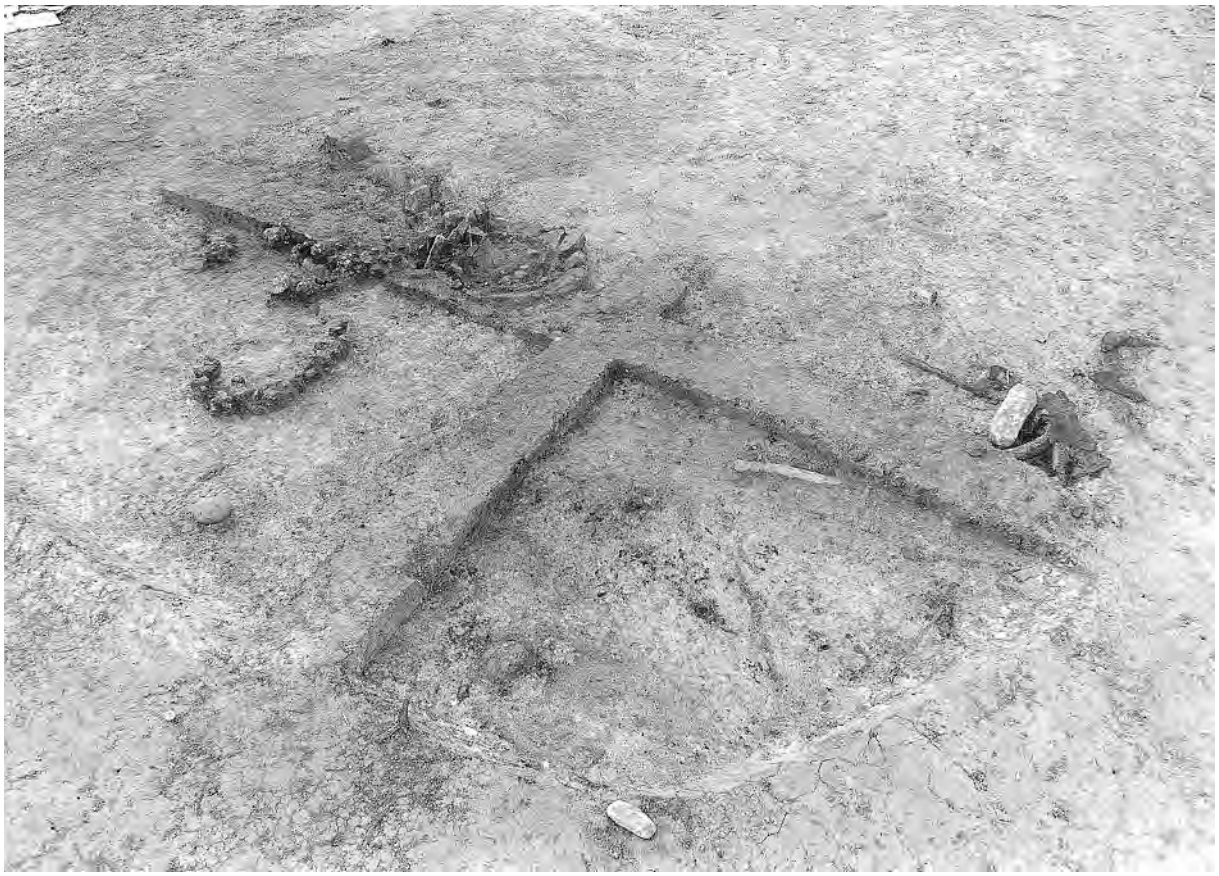
ＳＩ04複式炉土器埋設部断面（東→）

ＳＩ05検出状況（南→）

ＳＩ05土器埋設部側面（南東→）

ＳＩ07完掘（北→）

ＳＩ07炉　炉跡完掘（北東→）



ＳＩ23焼土ブロック検出状況（東→）

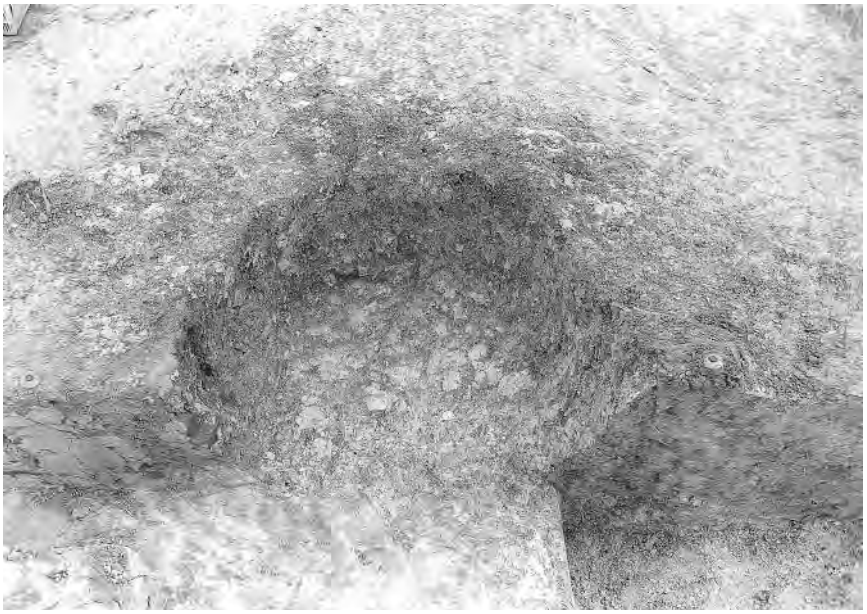
ＳＩ23複式炉完掘（東→）

ＳＩ23複式炉土器埋設部（東→）

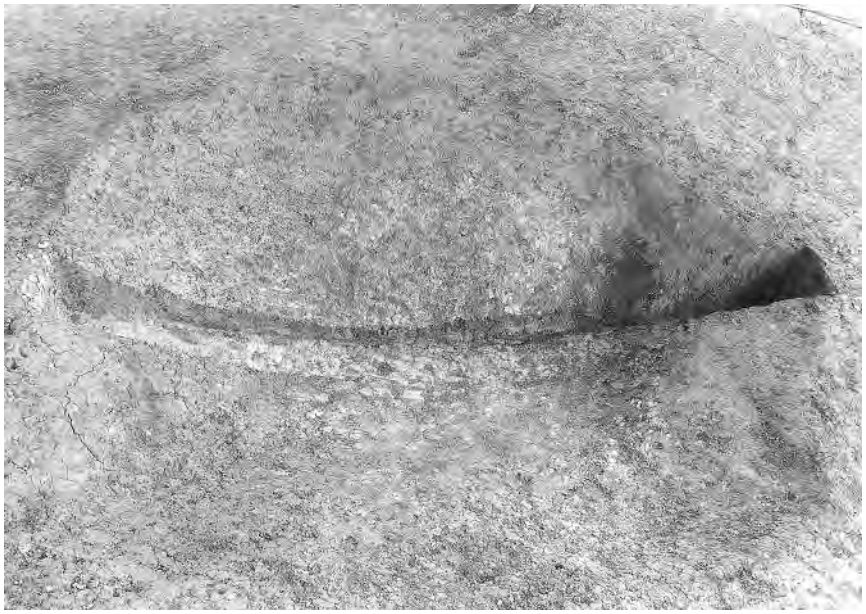
ＳＩ23土器埋設部小型深鉢形土器側面（東→）

ＳＩ23土器埋設部埋設土器側面（東→）

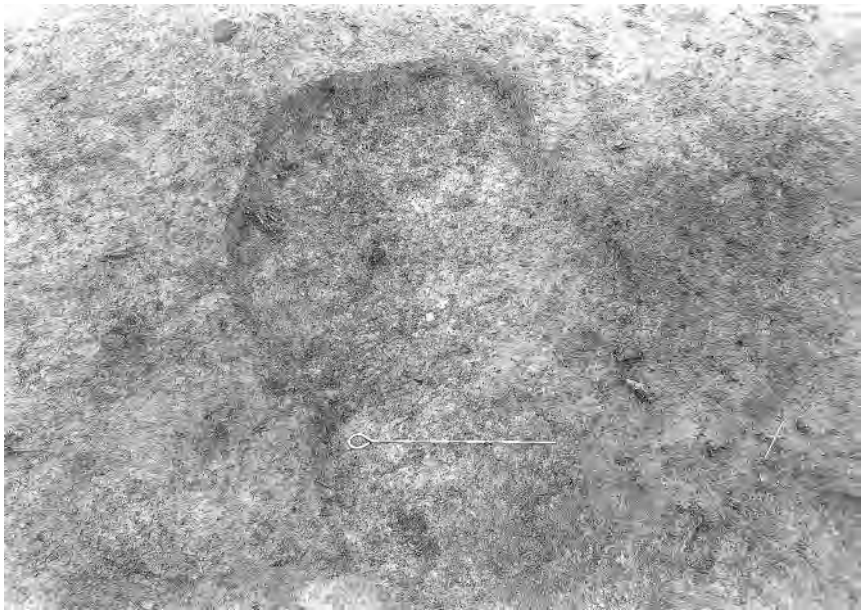
ＳＫ02完掘（南→）

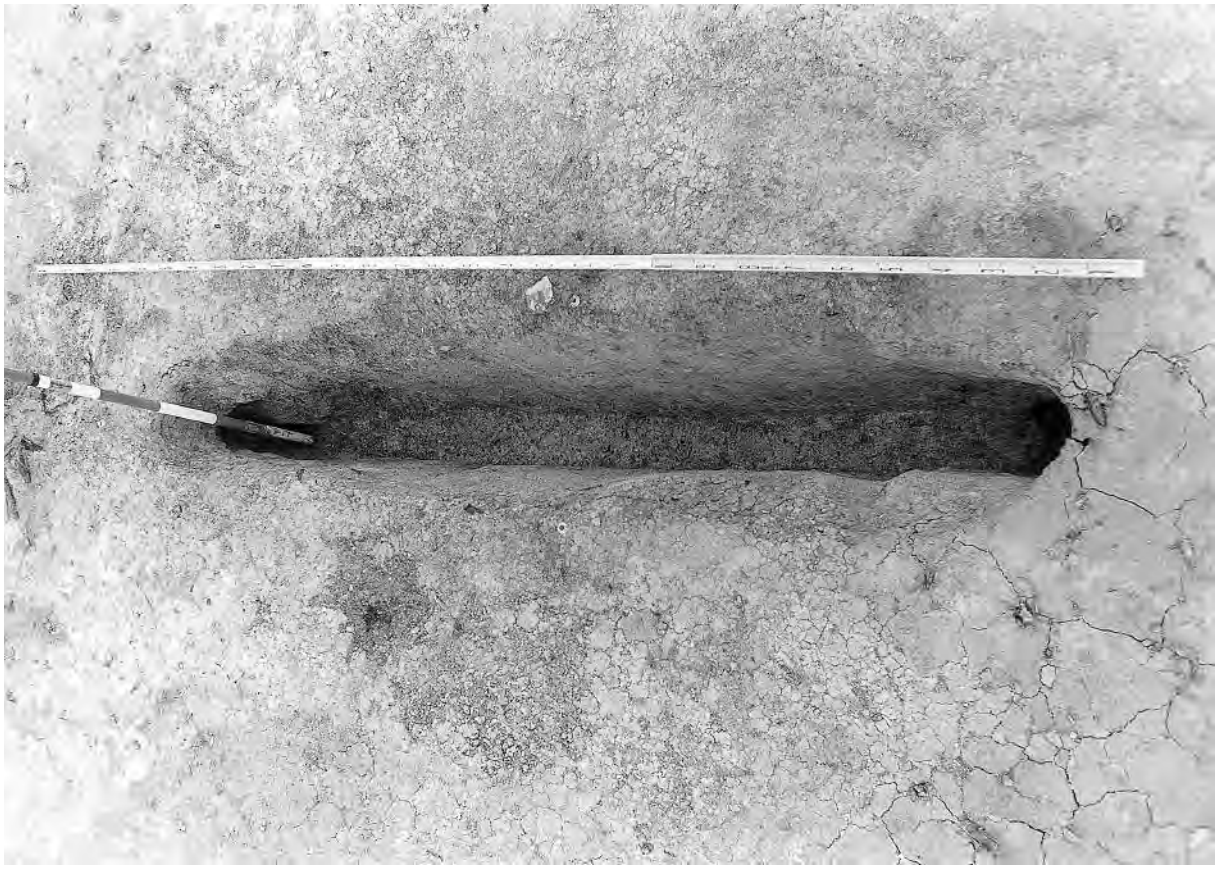


ＳＫ16完掘（北西→）



ＳＫ25完掘（南→）



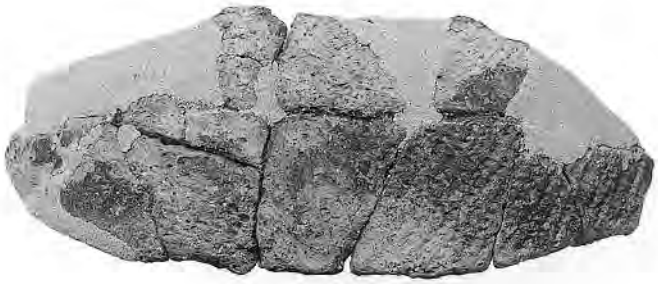


ＳＫＴ06完掘（南→）

作業風景

ＳＩ23炉埋設土器

ＳＩ23出土遺物（ＲＰ１）

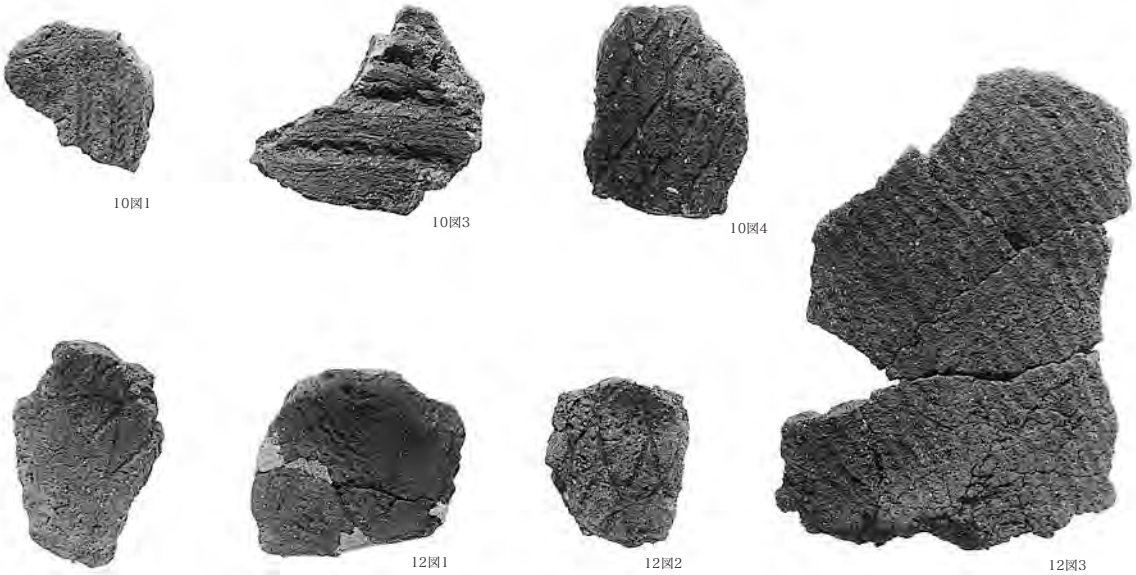


ＳＩ23出土遺物（ＲＰ２）

ＳＩ04炉埋設土器

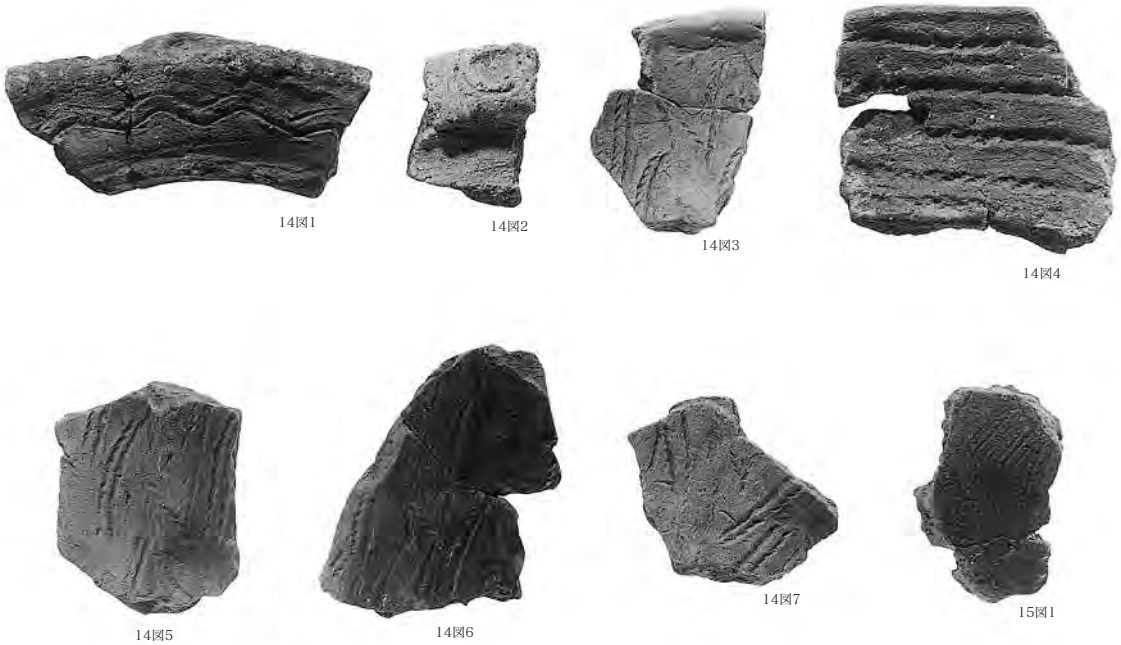
28図1

ＳＩ05出土遺物

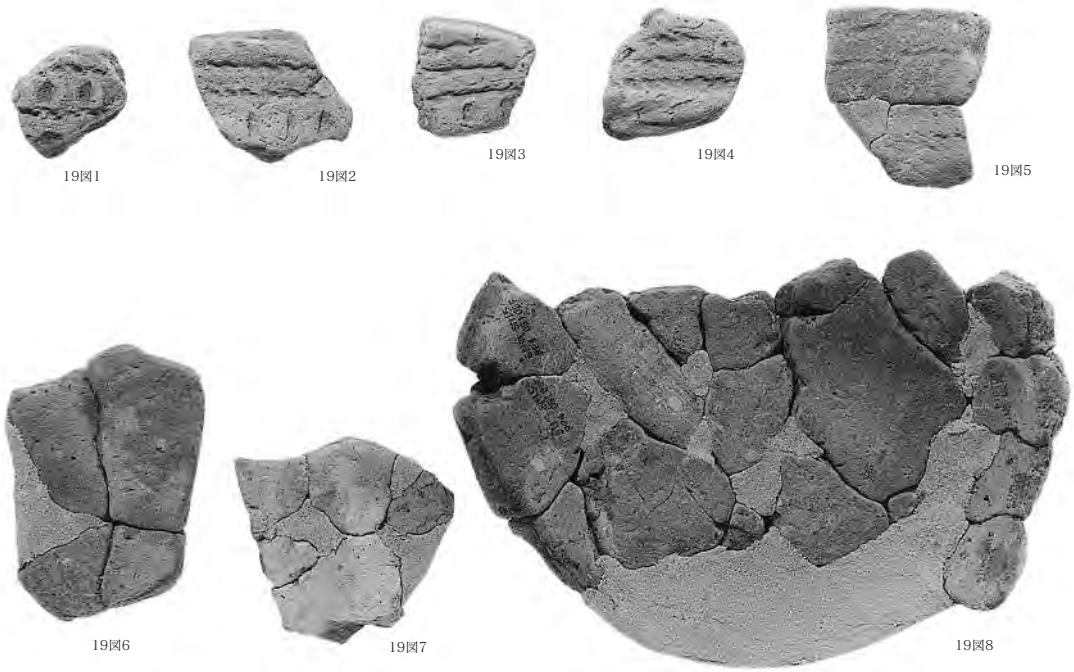


10図1　10図3　10図4　10図5　12図1　12図2　12図3

遺構内出土土器　前期①



遺構内出土土器　前期②



遺構内出土土器　前期③

26図2

26図3

27図2

27図1

33図1

遺構内出土土器　中期

10図2

11図1

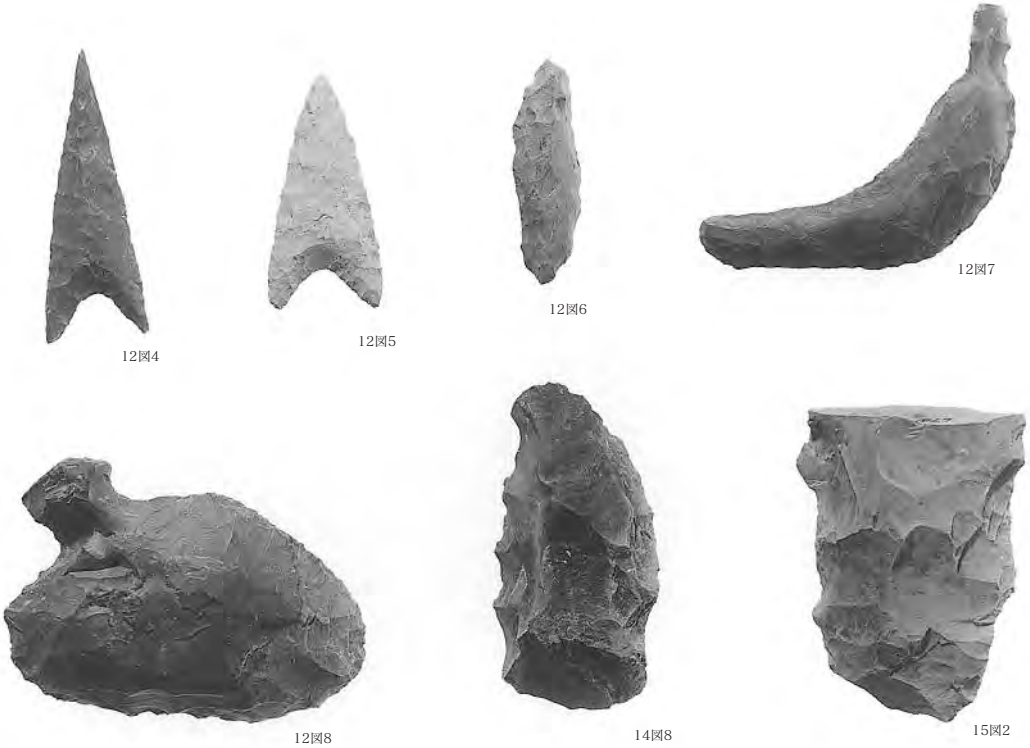
11図3

11図4

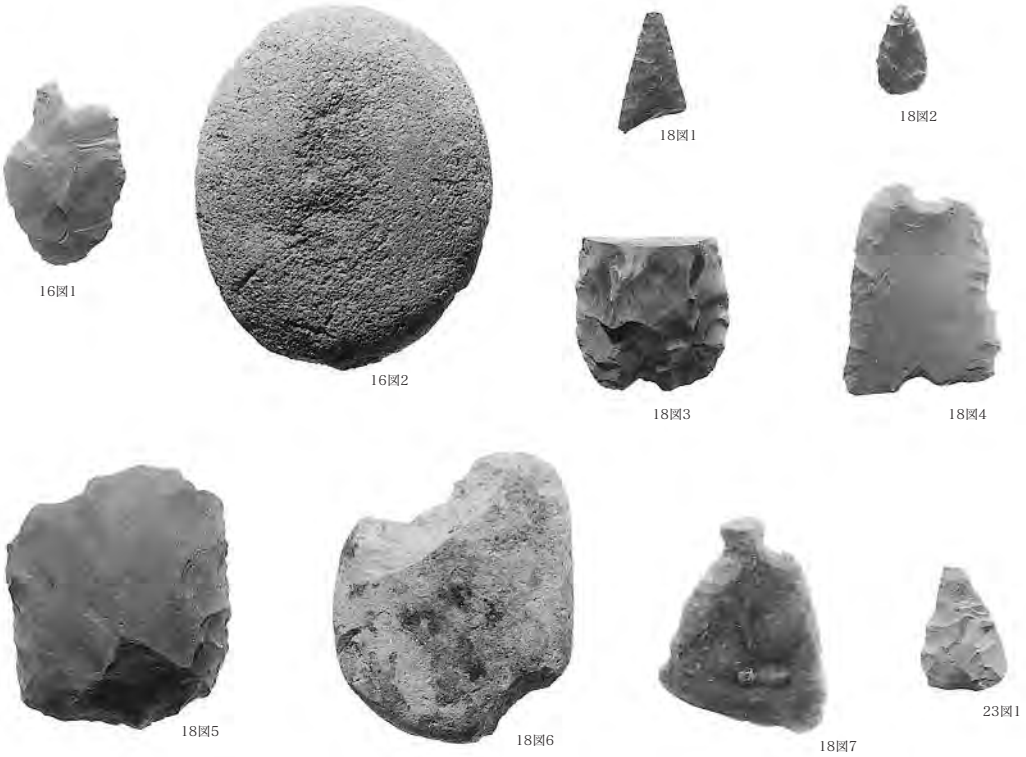
11図2

11図5

遺構内出土石器　前期①



遺構内出土石器　前期②



遺構内出土石器　前期③

遺構内出土石器　中期

遺構外出土土器①

36図2

36図3

36図4

36図5

36図6

遺構外出土土器②

36図7

36図8

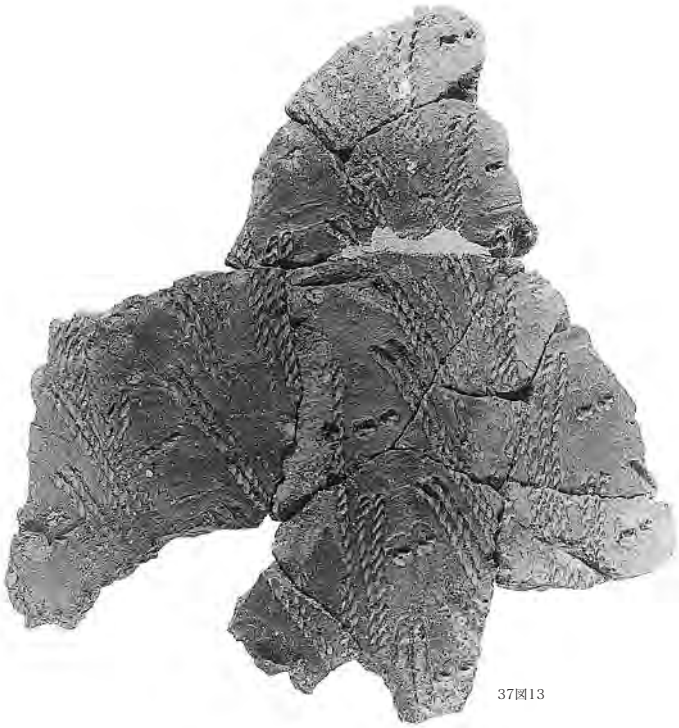
36図9

36図10

36図11

36図12

遺構外出土土器③

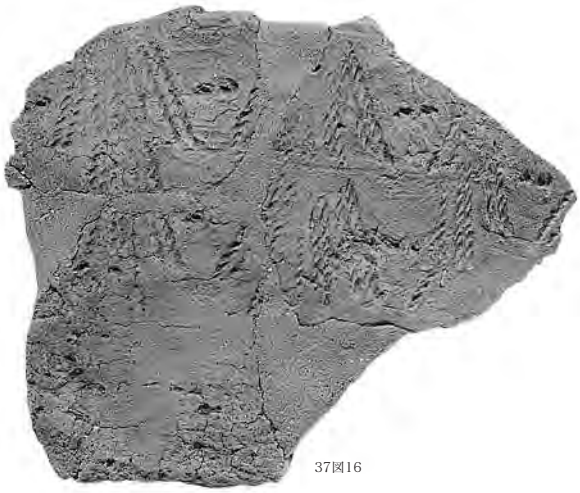


37図13

遺構外出土土器④

37図14

37図15



37図16

遺構外出土土器⑤

37図17

37図18

37図20

37図19

遺構外出土土器⑥

38図21

38図22

遺構外出土土器⑦

38図23

38図24

38図25

38図26

38図27

38図28

遺構外出土土器⑧

38図29

38図30

38図31

38図32

38図33

39図34

遺構外出土土器⑨

39図35

39図36

39図37

39図38

39図39

39図40

39図41

遺構外出土土器⑩

40図1

40図2

40図3

40図4

40図5

40図6

40図7

40図8

40図9

40図10

40図11

40図12

40図13

40図14

40図15

41図16

41図17

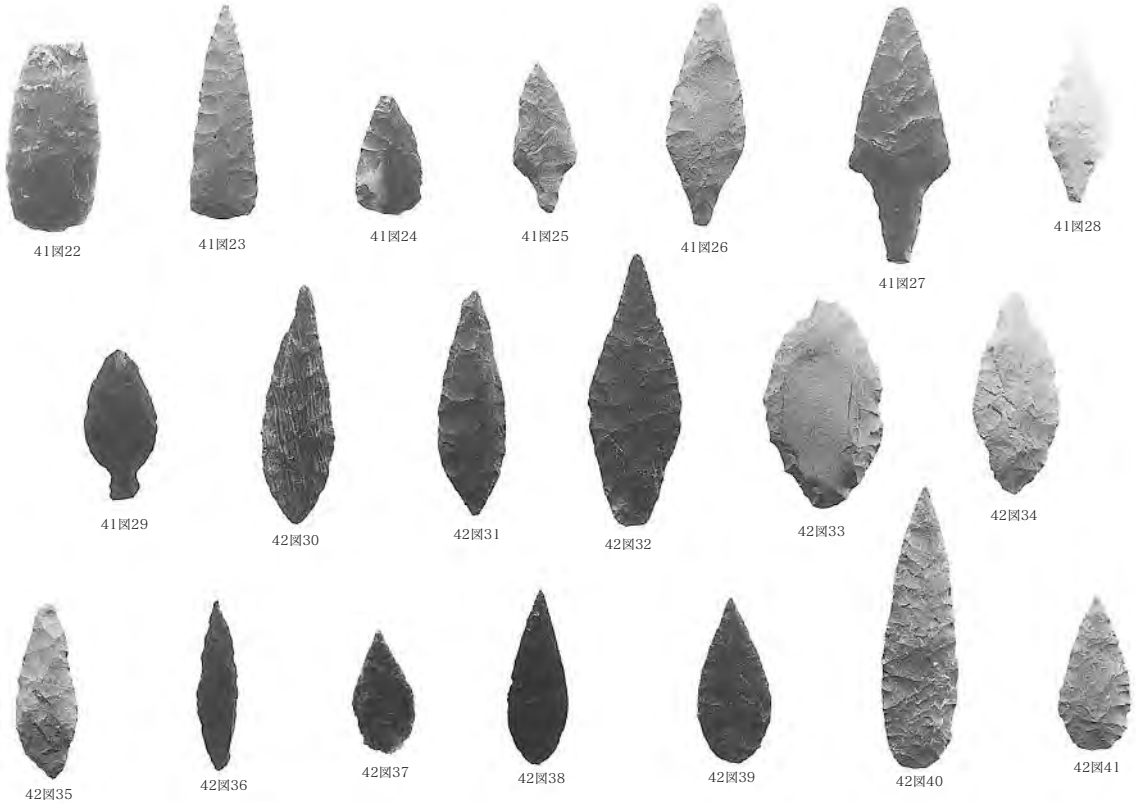
41図18

41図19

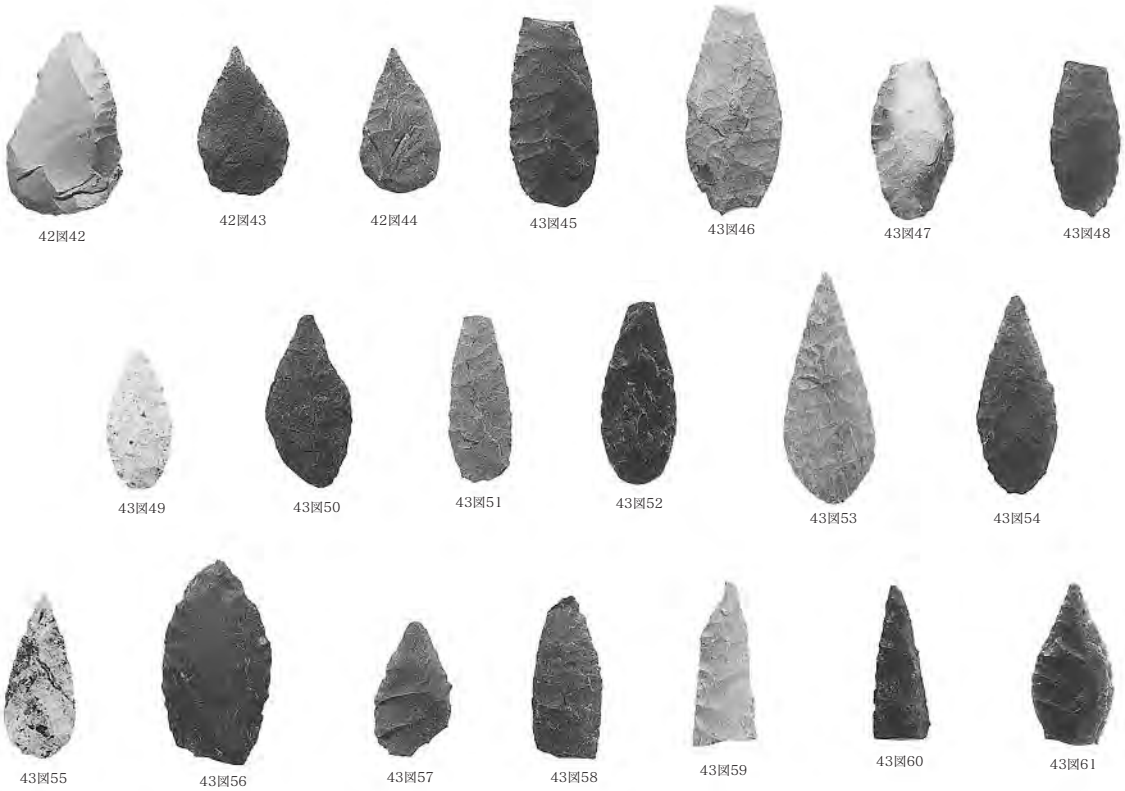
41図20

41図21

遺構外出土石器　石鏃①



遺構外出土石器　石鏃②



遺構外出土石器　石鏃③

44図62

44図63

44図64

44図65

44図66

44図67

遺構外出土石器　石槍

45図68

45図69

45図70

45図71

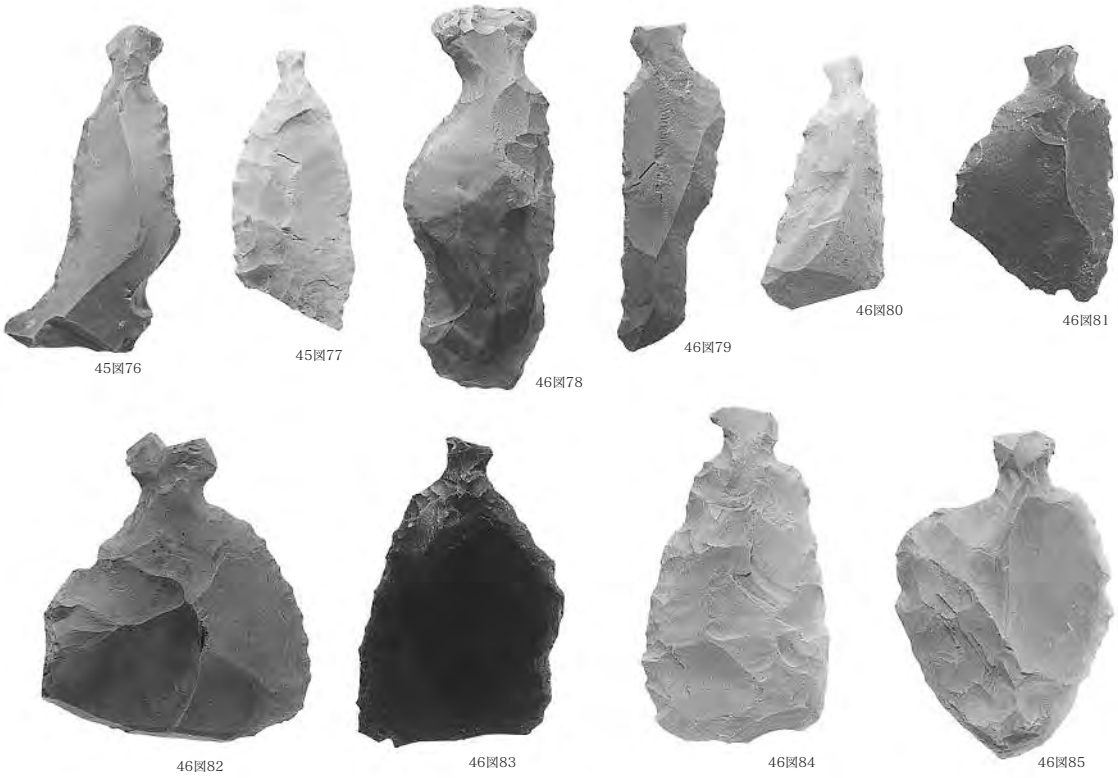
45図72

45図73

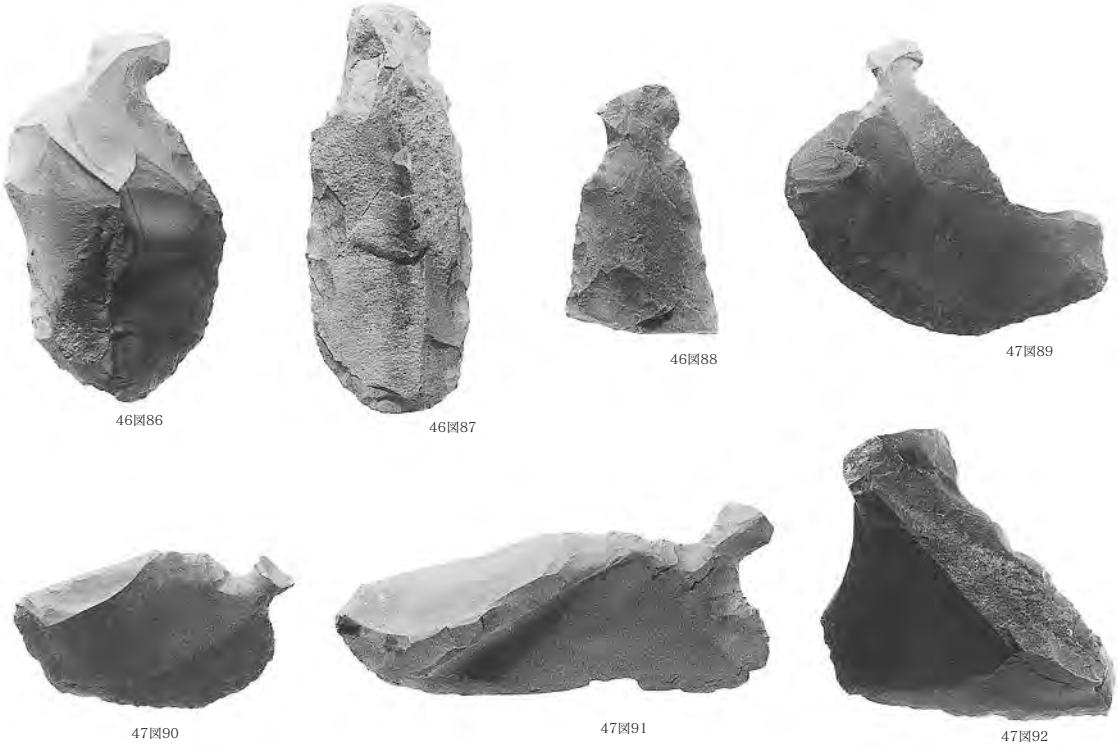
45図74

45図75

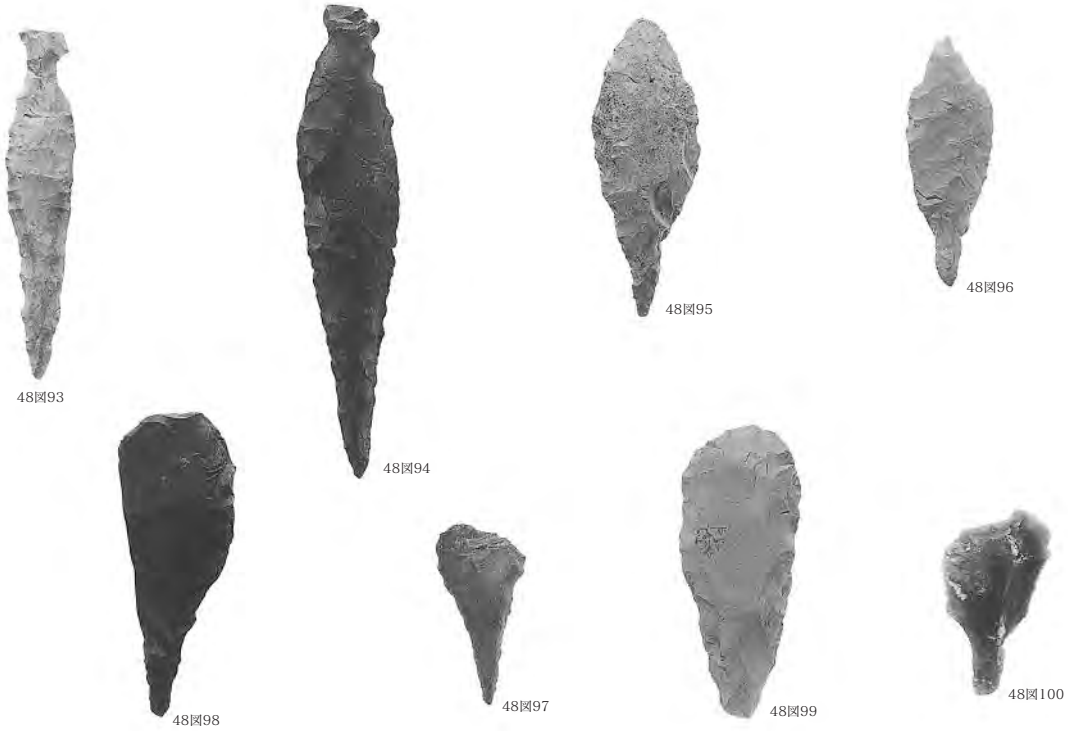
遺構外出土石器　石匙①



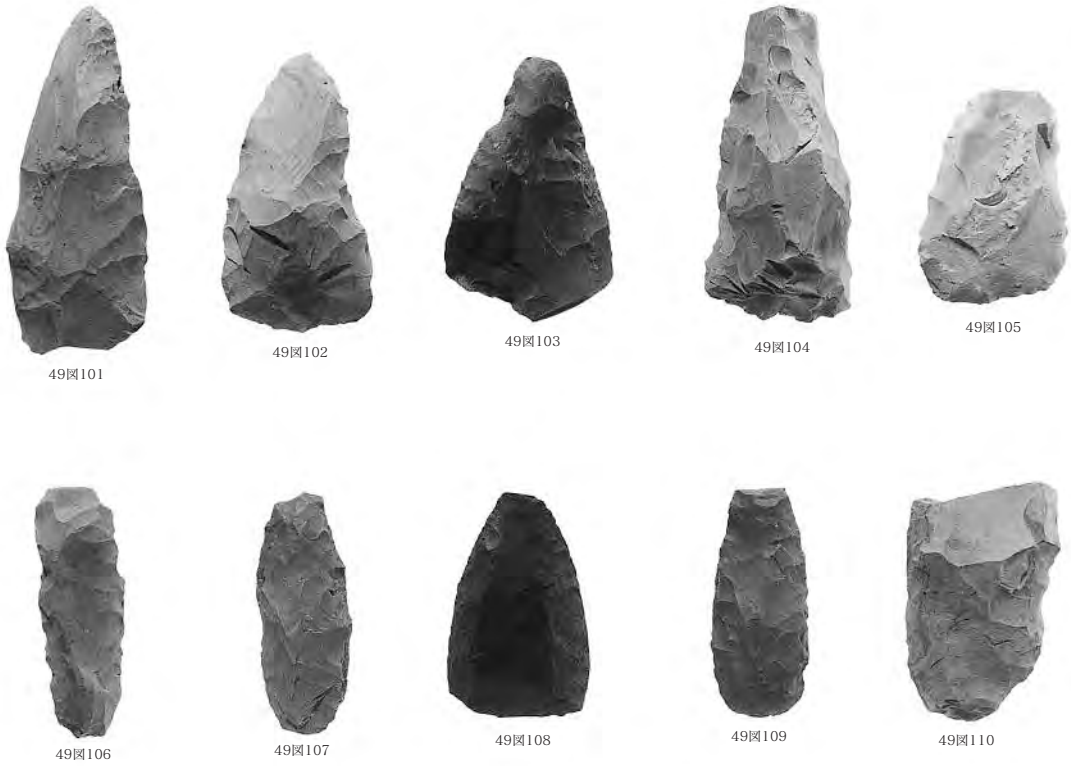
遺構外出土石器　石匙②



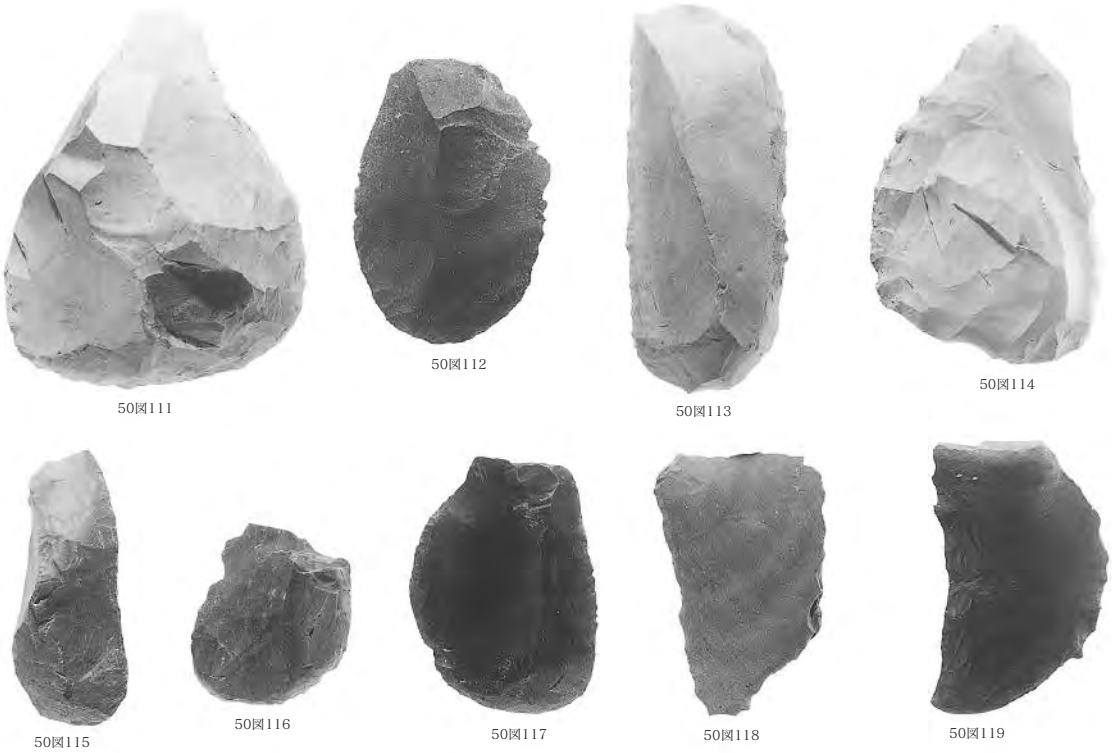
遺構外出土石器　石匙③



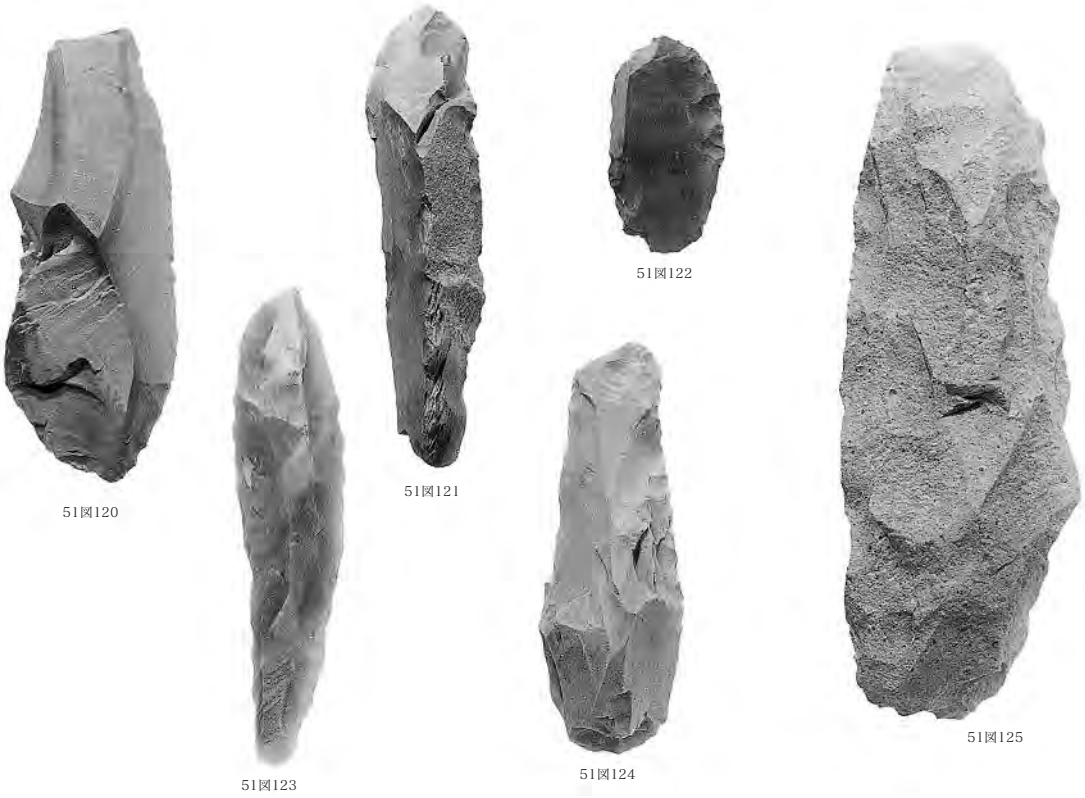
遺構外出土石器　石錐



遺構外出土石器　石箆



遺構外出土石器　掻器



遺構外出土石器　削器・打製石斧

52図126

52図127

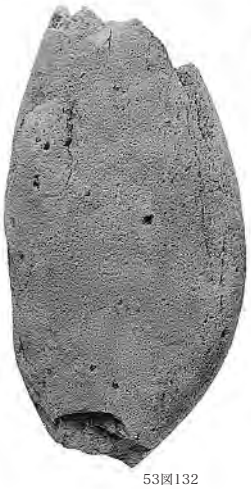
52図128

52図129

遺構外出土石器　磨石

53図130

53図131



53図132

53図133

遺構外出土石器　敲石・凹石・石錘

報告書抄録

ふりがな	いえのまえいせき
書名	家ノ前遺跡
副書名	国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第４１８集
編著者名	開田猛夫　吉川寿朗　簗瀬圭二　打矢泰之
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2007年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
家ノ前遺跡（いえのまえいせき）	秋田県由利本荘市米坂字家ノ前（あきたけんゆりほんじょうしよねさかあざいえのまえ）８７－３外（ほか）	05210	---	39° 26′ 28″	140° 4′ 39″	20050830 ～ 20051107	1,700㎡	国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家ノ前遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 フラスコ状土坑 土坑 陥し穴状遺構 焼土遺構 柱穴	縄文土器・石器	縄文時代前期終わり頃と縄文時代中期終わり頃に集落が営まれていたことが明らかになった。

秋田県文化財調査報告書第418集
家ノ前遺跡
－国道105号国道道路改築事業（岩谷道路）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成19年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802
秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話 (0187)69-3331　FAX(0187)-69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580
秋田市山王三丁目1番1号
電話 (018)-860-5193
印　　刷　(株)三戸印刷所